

Monthly Report

SENDAI UNIV.
PUBLIC RELATIONS

Vol.192 / 2022 .APR

(月1回発行)

令和4年度入学式を挙行了しました



新入生代表の宣誓を務めた大石優希さん（体育学科）

令和4年度 仙台大学第56回体育学部並びに第25回大学院入学式を4月5日に本学第5体育館で挙行之、体育学部650名（うち、体育学科349名、健康福祉学科101名、スポーツ栄養学科64名、スポーツ情報マスメディア学科56名、現代武道学科48名、子ども運動栄養学科28名、転編入生4名）及び大学院11名が入学しました。

昨年に引き続き、式は新型コロナウイルス感染予防対策から学生と教職員のみでの出席に限定し、時間を短縮して執り行いました。

新入生代表の大石優希さん（体育学科・盛岡第三高校卒）が「私たちは、体育・スポーツ・健康に関わる諸科学を探究し、これからの時代の担い手となるよう、身体を鍛え、教養を深め、心を磨き、豊かな学生生活を送るよう、努力してまいります」と力強く宣誓しました。

なお、式典の様子は仙台大学公式YouTubeチャンネルでLIVE配信しました。

〈学長式辞要旨・高橋 仁〉

オリンピックなどのトップアスリートが集うスポーツだけでなく、日常生活の中にあるスポーツにも大きな価値があります。本学では、アスリートの育成とともに、スポーツによる地域貢献やボランティア活動にも力を入れています。今から11年前、皆さんがまだ小学生のころに発生した東日本大震災の際にも、避難所での健康運動など、さまざまなボランティア活動を行いました。現在も、災害時のボランティアだけでなく、地域の皆さんの健康づくりや中学校の部活動の支援など、多様な活動を行っています。キャンパスの中だけでなく学外でも学ぶべき事はたくさんあります。新型コロナウイルスの影響でまだ多くの制限はありますが、感染予防対策を講じながら充実した大学生活を送る事ができるようさまざまな機会を提供していきますので、皆さんには積極的に活用してほしいと思います。

失敗を恐れず、さらに一歩踏み出す勇気を持っていろいろな事に挑戦していきましょう。



〈目次〉

・令和4年度入学式を挙行了しました	1
・【スポーツ情報サポート研究会】活動報告会を開催しました ・みる・する・ささえるスポーツ！音で伝えるスポーツ情報Podcast ・白石市・柴田町・仙台大学東京オリ・パラ事前合宿招致推進協議会が記念誌を発刊しました	2
・現代武道学科の学生有志による「防犯ボランティア活動」に対して感謝状 ・男子ハンドボール部の佐藤蓮と木戸将史が全国大会準決勝の審判を担当 国内トップの審判を目指す！	3
・硬式野球部/仙台六大学野球春季リーグ開幕から4連勝で首位快走中	5
・本学の佐々木琢磨職員が3度目のデフリンピックへ ・「高校スポーツの安全を守る」Vol. 48	6
・令和4年度新任者紹介	7 ～ 10

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報課までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報課までご一報ください。

仙台大学 広報課

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

【スポーツ情報サポート研究会】活動報告会を開催しました

4月12日（火）B103教室で、「スポーツ情報サポート研究会」の令和3年度活動報告会を開催しました。

本研究会では、現在約30名の学生が「情報戦略」と「メディア」の2つの側面から、各部活動の競技力向上支援や広報活動に取り組んでいます。

異なる競技の部活動に所属している学生同士は普段交わる機会が少ないですが、「情報」というキーワードで繋がり、大変有意義な時間を過ごすことができました。あらゆる情報資源を競技力向上にどのように繋げたら良いか、他の競技から学ぶ部分もあったかと思えます。メディア活動に取り組む学生は、本学サークルの取材や撮影を行い、PR動画の制作や学内外に向けた広報活動に取り組んでいました。

今回は研究会所属学生と担当教員の他、スポーツ情報マスメディア学科1年生の皆さんにも参加してもらい、普段どのような活動を行っているのかを知ってもらう良い機会となりました。報告会終了後に早速、入会希望者の学生が先輩のところへ話を聞きに行く姿もありました。

今後も研究会では勉強会等を開催し、各々の活動の幅を広げられるように実践を通した学びの場を増やしていきます。

<スポーツ情報マスメディア学科>



みる・する・ささえるスポーツ！音で伝えるスポーツ情報Podcast

スポーツ情報マスメディア学科で、スポーツに関する様々な情報を発信するPodcastチャンネルを開設しました。現代はインターネットの普及やICT利活用が急速に進み、情報化社会とも言われています。これはスポーツ界においても同様で、最新テクノロジーを駆使することであらゆる情報が「可視化」されるようになり、チームの競技力向上やスポーツ中継にも多様なデータが活用されています。本学科では情報戦略とマスメディアの両分野において、情報の収集・加工・分析・提供方法について実践を通した学びを深めています。



成長途上の学生たちがそれぞれの専門分野で、現場での実習や演習を通して感じたことを読者の皆さんにお届けする「とうほく報知」では学生たちの思いをコラム形式で掲載しています。普段とはひと味違う学生目線で書かれた、ぎこちないながらも熱量たっぷりの原稿をお届けします。

※本チャンネル内で取り上げる記事の中には、本学学科学生が、教員の指導の下作成し新聞社等に寄稿した記事を確認許諾を頂き、使用しております。このポッドキャストではスポーツニュースだけでなく、スポーツに関する様々な情報を学生目線で学内外の話題を発信していく予定です。

<スポーツ情報マスメディア学科>

白石市・柴田町・仙台大学東京オリ・パラ事前合宿招致推進協議会が記念誌を発刊しました

本学は白石市・柴田町と共に東京オリンピックの新体操競技に出場したベラルーシ共和国新体操ナショナルチームのホストタウン事業として2016年から東京オリ・パラ事前合宿招致推進協議会を発足し、これまで5年間に渡って事前合宿などに取り組んできました。

今回、その集大成として記念誌を発刊しましたのでお知らせします。

本学HPより是非ご覧ください。



現代武道学科の学生有志による「防犯ボランティア活動」に対して感謝状

4月25日、防犯ボランティア活動を行った現代武道学科の学生有志に対し、宮城県警察本部生活安全部長から送られた感謝状を高橋仁学長からひとり一人に手渡されました。

感謝状を贈られた学生5人は、現代武道学科で社会の安全・安心概論を学ぶ2年生の大向健太さん、木村賢斗さん、小川あすみさん、菅野彩水さん、佐藤萌杏さんの5人で、県警生活安全部からの要請に応じて、昨年夏休み期間等を活用し、船岡小学校周辺の防犯マップを作成し、地元ボランティア団体の皆さんとともに防犯見守り活動を行いました。

学生はそれぞれ、「安全・安心に関わる活動の重要性を認識することができた」、「地域の皆さんに貢献できてうれしい」、「めったに入ることのできない学長室で感謝状をいただき、うれしい」などと話し、社会貢献活動に対する気持ちを新たにしていました。



男子ハンドボール部の佐藤蓮と木戸将史が全国大会準決勝の審判を担当 国内トップの審判を目指す！

3月26日(土)～29日(火)に富山県氷見市で行われた、第17回春の全国中学生選手権大会に男子ハンドボール部の佐藤蓮(健康福祉4年)と木戸将史(スポーツ栄養4年)が、ペアで審判として参加しました。全国大会を担当できる審判は、高レベルの審判ライセンスを取得かつ、各ブロック(東北地区)からの推薦を得られた審判のみです。さらに、今大会において二人は男子準決勝を担当しました。大会に参加する数多くの審判の中で準決勝を担当できるのは、4ペア(8名)だけです。惜しくも決勝の担当までには至りませんでしたが、さらなる研鑽を積んで、次の機会にはファイナルを目指します。男子ハンドボール部では、競技者のみならず、競技を「支える」審判の育成にも力を注いでいます。



写真左

佐藤 蓮(サトウ レン) 健康福祉4年

出身 : 宮城県仙台市(宮城県立利府高等学校出)

写真右

木戸 将史(キド マサフミ) スポーツ栄養4年

出身 : 福島県福島市(聖光学院高等学校出)

<男子ハンドボール部>

12年連続Jリーガーを輩出！男子サッカー部の栗野健翔が来季J3福島ユナイテッドFCに加入内定および今季JFA・Jリーグ特別指定選手に承認されました

男子サッカー部の栗野健翔（体育4年）が福島ユナイテッドFC（J3）に来季加入が内定し、日本サッカー協会より今季「JFA・Jリーグ特別指定選手」として承認されましたのでお知らせします。

これで男子サッカー部は12年連続でJリーガーの輩出となります。



【プロフィール】

■ポジション：MF

■生年月日：2001年1月5日（21歳）

■身長/体重：162cm/60kg

■出身：山形県上山市（仙台大学附属明成高出）

■チーム歴：

西一サッカースポーツ少年団→SFCジェラレー→マルバ山形→ベガルタ仙台ジュニアユース→ベガルタ仙台ユース→仙台大学

【コメント】

小さい頃からの夢だったプロサッカー選手になることができとても嬉しく思います。また、福島ユナイテッドという素晴らしいクラブでプロ生活を送れることを非常に楽しみにしています。

ここまでこれたのは、これまでのサッカー人生で携わった監督、コーチ、関係者の皆様のお陰でもあります。そして、福島ユナイテッドのために少しでも貢献できるよう努力します。

応援よろしくお願いします。

男子バレーボール部の倉茂涼がヴィクトリーナ姫路（V1）アナリストへ

先月本学を卒業した男子バレーボール部の倉茂涼が、ヴィクトリーナ姫路（バレーボール女子Vリーグ Division1）に入団いたしました。

これでVリーグのスポーツアナリストとしては、通算5人目の輩出となります。



【プロフィール】

倉茂涼（くらしげ りょう）

令和3年度 スポーツ情報マスメディア学科卒業

■ポジション：スポーツアナリスト

■生年月日：1999年6月21日（22歳）

■出身：新潟県燕市（新潟県立巻高校出）

【コメント】

ヴィクトリーナ姫路さんにアナリストとして入団させていただくことになりました。チームに必要な存在になれること、終盤の1点を自分のデータで取れることができたと言って貰えるようなアナリストになれるよう、日々努力していきます。

硬式野球部/仙台六大学野球春季リーグ開幕から4連勝で首位快走中



4月9日（土）仙台六大学野球春季リーグが仙台市・東北福祉大学野球場で開幕しました。
今季は各大学2戦先勝方式の総当たりによる勝ち点制で優勝を争います。
本学硬式野球部は第1節に宮城教育大学、第2節に東北工業大学と対戦し、いずれも勝利しました。
現在4戦全勝で首位となっています。

○1回戦（4月9日） 対 宮城教育大学（9-0）○ 七回コールドゲーム
 仙台大 041 202 0=9
 宮教大 000 000 0=0

先発の長久保（体育4年）が5回をリズムの良い投球で無失点に抑え1勝目、打線は二回に7番三原（体育3年）の先制3ランなど14安打放ちコールド勝ちとしました。

○2回戦（4月10日） 対 宮城教育大学（11-4）○ 八回コールドゲーム
 宮教大 040 000 00=4
 仙台大 015 002 12=11

二回に4点を先制されるも、その裏に1点を返し、続く三回には坂口（体育3年）の2ランなど4安打5得点で逆転し、勢いに乗るとその後も得点を重ねコールド勝ちとしました。

○1回戦（4月16日） 対 東北工業大学（9-0）○ 七回コールドゲーム
 仙台大 041 100 3=9
 東工大 000 000 0=0

打線は二回に松嶋（体育4年）の先制2ラン本塁打で勢いに乗ると14安打を放ち9得点。先発の長久保（体育4年）は5回を被安打3の無失点で2勝目を挙げました。

○2回戦（4月17日） 対 東北工業大学（8-0）○ 七回コールドゲーム
 東工大 000 000 0=0
 仙台大 000 305 ×=8

先発の川和田（体育3年）が被安打7の無失点で2勝目。打線は四回に今季2本目となる坂口（体育3年）の2ラン本塁打など3点を奪い、六回には打線が繋がって5得点を挙げ突き放しました。

○今後の日程について
 4月29日10:30～ 対 東北大学
 4月30日13:00～ 対 〃
 5月 7日10:00～ 対 東北学院大学
 5月 8日13:00～ 対 〃
 5月21日10:00～ 対 東北福祉大学
 5月22日13:00～ 対 〃

○会場
 東北福祉大野球場
 宮城県仙台市青葉区国見ヶ丘7-146
 TEL022-279-8911

本学の佐々木琢磨職員が3度目のデフリンピックへ

5月1日からブラジル（カシアス・ド・スル）で開催する第24回夏季デフリンピックの陸上競技（男子100M、男子200M、4×100リレー、4×400リレー）に出場する佐々木琢磨職員と同大会のコーチとして帯同する名取英二教授（本学陸上競技部部長）が4月11日に朴澤泰治理事長と高橋仁学長へ出場の報告をしました。



佐々木職員はこれまで2013・2017年のデフリンピックに出場し、2017年では4×100リレーで金メダルを獲得しています。

また、2021年にポーランドで開催された世界デフ陸上選手権の男子100Mでは日本人初となる銀メダルを獲得しました。

今大会に向けて佐々木職員は「世界デフ陸上選手権では銀メダルという結果にとっても悔しい思いをしました。今大会では自己ベストを更新し、金メダルを取ることが目標です」と決意を話してくれました。

川平キャンパスAT・S&Cレポート

「高校スポーツの安全を守る」Vol. 48

助手 今野 桜

4月から新学期が始まり、仙台大学川平ATルームでは普段の部活動中の怪我や体調不良の対応などに加えて新入生のフィジカルチェックや傷害予防講習会などを行っています。

4～5月にかけては、1年の中でも特に怪我の発生率が高く、入学してきたばかりの1年生が怪我をして離脱するケースが多くあります。そのため、川平ATRでは生徒の入学時の体の特徴を把握し、なるべく早い時期から一人一人の弱点を克服し始め傷害予防につなげる事を目的として新入生のフィジカルチェックを行っています。現時点でほとんどの特定研究指定部活動のフィジカルチェックが終了しました。それぞれの部活動ごとの特徴や競技特性による違い、例年と比較しての違いなど、結果を見比べると様々な良い部分と改善が必要な部分が見えてきました。運動部に所属する生徒は、5～6月に高校総体という大事な大会を控えています。大会前に怪我をして試合に出場できなかったり、出場しても思うようなプレーができなかったりと言ったことが減るように、なるべく早いうちにフィジカルチェックのフィードバックをして、生徒自身が自分の体の特徴を把握し日々のケアやトレーニングに励んでほしいと思います。



フィジカルチェックの様子



講習会の様子

令和4年度 新任者紹介

教員8名 事務職員4名 新助手10名 臨時職員6名 計28名の皆さんが着任いたしました。

教員

<p>やまうち はるき 山内 明樹 教授 (学校防災・教職)</p> 	<p>学校教員、教育委員会職員として37年間勤務。東日本大震災以後は、被災地の高等学校、教育委員会担当課で学校教育の復興に携わってきました。仙台大学との出会いに感謝します。</p>	<p>あんどう あゆみ 安藤 歩美 講師 (スポーツ情報マスメディア学科)</p> 	<p>新聞記者、ニュースサイトの立ち上げ、テレビやラジオなどに関わってきました。 さまざまなメディアでの経験を生かして、聞くこと、伝えることの面白さを学生に教えられたらと思います。</p>
<p>ほうざわ けんじ 朴澤 憲治 准教授 (経済学、経営学)</p> 	<p>生命保険会社やWEBマーケティング会社など民間企業で働いてきました。その経験を活かし、学生の皆さんには社会に出てから私の授業や演習で勉強してよかった。と思ってもらえることを目標にしたいと思いま</p>	<p>いとう あいり 伊藤 愛莉 助教 (教育行政学)</p> 	<p>大学院で得た知識や経験を活かし、教員や指導者を目指す学生さんのサポートができればと思っています。学生のみなさんの考えを聞いたり、共に学ぶことを楽しみにしています。</p>
<p>なんじょう まさと 南條 正人 准教授 (社会福祉)</p> 	<p>短期大学・大学に15年間勤務し、社会福祉士、介護福祉士、福祉レクリエーション・ワーカーの養成に携わりました。 他大学の社会福祉士養成校での経験を活かして仙台大学の発展に貢献できるよう努めてまいります。どうぞ宜しくお願い申し上げます。</p>	<p>うめつ りゅう 梅津 龍 助手 (スポーツ栄養)</p> 	<p>今年度から助手として勤務することとなりました。 現在はマイナビ仙台レディースへの栄養サポートや明成高校部活動の栄養支援等を行っております。現場での経験を仙台大学に還元できるよう尽力いたします。</p>
<p>はしもと ちあき 橋本 智明 准教授 (情報教育、メディア文化、芸術学)</p> 	<p>大学の情報教育やメディア教育などを通して、学生の皆さんのメディアリテラシー向上に貢献できるように頑張っていきます。所属はスポーツ情報マスメディア学科です。どうぞよろしくお願いいたします。</p>	<p>じん きょうへい 神 恭平 助手 (スポーツ栄養)</p> 	<p>昨年度まで新助手で、今年度から助手になりました。至らぬ点が多いかと存じますが、前向きに業務に邁進して参ります。今後ともご指導ご鞭撻の程、何卒、よろしくお願い申し上げます。</p>

職員

<p>おおとも きよし 大友 清 職員 (学生生活課)</p> 	<p>今春、宮城県警察を定年退職し、本大学で勤務させていただくことになりました。前職とは全く違う仕事内容ですが、明るく精一杯、頑張りたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。</p>
<p>たまおき ひろやす 玉置 裕康 職員 (教務部)</p> 	<p>31年間銀行に勤務し、縁あって仙台大学で勤務することになりました。社会経験を活かして仙台大学の運営に貢献できるよう努めていきたいと思っています。</p>
<p>はしもと だいすけ 橋本 太輔 職員 (嘱託研究員)</p> 	<p>今年度より嘱託研究員として任用となりました。国際交流課業務・空手道の授業・空手道部の指導が主な担当となります。在学中に得た知見や、中国での経験を母校に還元できるよう尽力して参ります。</p>
<p>セベツェアリーナ 職員 (嘱託研究員)</p> 	<p>3年前にベラルーシから来て、ホストタウン（白石市・柴田町・仙台大学）の親善大使をしていました。 今年度は国際交流課とロシア語の講義を担当します。よろしくお願いいたします。</p>

新助手

<p>すずき あやな 鈴木 彩菜 新助手 (スポーツ栄養学科)</p> 	<p>今年度よりスポーツ栄養学科の新助手として勤務させていただきます。本学で学んだことを活かし、仙台大学の発展に貢献できるよう誠心誠意努めて参ります。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。</p>
<p>よしむら ひろき 吉村 広樹 新助手 (スポーツ情報マスメディア学科)</p> 	<p>本学卒業後はスポーツ映像分析ソフトの営業、アナリストとしてスポーツの現場に3年間携わってきました。スポーツITの世界に挑戦する学生の為に、毎日全力でサポートしてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。</p>
<p>おちあい ゆき 新助手 (漕艇部)</p> 	<p>二年前に卒業し、他の大学院で国際教育協力について知見を深めてきました。 この度は、所属していた漕艇部に携わる機会をいただき、大変嬉しく思います。漕艇部、さらに仙台大学に貢献できるよう、努めてまいります。</p>
<p>ほしや ゆうすけ 星谷 勇佑 新助手 (トレーニングセンター)</p> 	<p>本年度よりトレーニングセンターでアシスタントS&Cスタッフとして働かせていただきます。仙台大学の卒業生として同じS&Cを目指す学生の希望となれるよう頑張っていきます。</p>

新助手

<p>さかた かずや 坂田 和也 新助手 (男子サッカー部)</p> 	<p>今年度よりお世話になります。主に男子サッカー部の指導を担当いたします。ご縁があり母校である仙台大学で仕事をできることを嬉しく思っております。どうぞよろしくお願いいたします。</p>	<p>ぶんご あやか 豊後 彩香 新助手 (女子サッカー・附属高校実 施支援者)</p> 	<p>今年度より新助手として勤務させていただきます。女子サッカー部のコーチをしながら明成高校での勤務を行います。母校である仙台大学と明成高校の発展のために精一杯力を尽くしていきます。よろしくお願い致します。</p>
<p>おおうち もえこ 大内 萌子 新助手 (健康運動サポート事業)</p> 	<p>本年度から母校である仙台大学に、新助手として着任致します。運動指導を志す学生のサポートを通して、本学に貢献できるよう努めて参ります。皆様ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い致します。</p>	<p>ふかつ こうすけ 深津 孝祐 新助手 (大学GT・男子サッカー)</p> 	<p>今年度より大学GT及びサッカー部の指導をさせていただきますことになりました。仙台大学と明成高校の発展に貢献できるよう努めてまいります。よろしくお願い致します。</p>
<p>かの 鹿野 あかり 新助手 (スポーツ科学研究実践機 構事務課)</p> 	<p>今年度から新助手として勤務させていただきます。 少しでも大学に貢献できるよう、努めて参ります。 ご指導ご鞭撻の程宜しくお願い致します。</p>	<p>てらち ゆうじろう 寺地 祐次郎 新助手 (大学GT・体操競技)</p> 	<p>今年度より新助手・大学GTとして採用していただくことになりました。仙台大学及び仙台大学附属明成高等学校の発展に貢献できるよう、責任と覚悟を持って務めさせていただきます。よろしくお願い致します。</p>

臨時職員

<p>わがつま さり 我妻 紗理 臨時職員 (学生支援課)</p> 	<p>学生がよりよい学生生活を送れるよう精一杯サポートしていきたいと思っています。</p> <p>至らない点も多々あるかと思いますが、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。</p>	<p>すずき ともゆき 鈴木 智之 臨時職員 (研究実践機構)</p> 	<p>今年度より、健康科学研究実践機構に勤務させていただきます。一日でも早く、皆さんのお力になれるよう全力で頑張ります。</p> <p>至らない点も多々あるかと思いますが、ご指導のほどよろしくお願いいたします。</p>
<p>ましこ まさき 増子 昌希 臨時職員 (学生支援課・施設管理課)</p> 	<p>今年度より臨時職員として学生支援課と施設管理課で働かせていただきます。</p> <p>学生が充実した生活を送れるよう全力でサポートしていきます。</p> <p>よろしくお願いいたします。</p>	<p>はちや やすのり 八矢 泰徳 臨時職員 (男子バレーボール部)</p> 	<p>男子バレーボール部のコーチとして指導をさせていただきます。仙台大学の発展、また男子バレーボール部の競技力向上に貢献できるように精進して参りますのでご指導ご鞭撻の程宜しくお願い</p>
<p>しおぬま なおき 塩沼 直希 臨時職員 (学生支援課)</p> 	<p>今年度から学生支援室で臨時職員として勤務させていただきましたことになりました。学生がよりよく学生生活を送れるように全力でサポートしていきたいと思っています。</p> <p>よろしくお願い致します。</p>	<p>ほんごう たかし 本郷 貴志 臨時職員 (学生募集)</p> 	<p>この3月まで明成高校にいましたが、縁あって仙台大学に参りました。これからは皆さんの後輩となる学生の獲得のため努力したいと思っています。</p>

～仙台大学教職員の共通理解事項～

仙台大学の「建学の精神」、「基本理念」、「使命・目的」

建学の精神

「実学と創意工夫」

仙台大学の経営母体である学校法人朴沢学園(明治12年開設)の学園創始者は、建学の精神として「実学と創意工夫」を掲げ、「創意工夫と先見性をもって実学を志し、実学に根ざした人格形成と人材育成を図る」ことをもって先進的な女子教育を行い、寺子屋方式に代え一斉教授法を導入し明治時代の裁縫教育に一大革新をもたらした。

その考え方は、体育系単科大学として昭和42年に開学した本学にも受け継がれ、人格形成の要素である体育・徳育・知育のうち「体育」に教育・研究の重点を置きつつ、実学と創意工夫に根差した広い教育研究領域を探究することに継承されてきた。

なお、建学の精神の意図するところについては、開学時の第1回入学式・初代学長告辞にも「社会で充分活動できるため

基本理念

「スポーツ・フォア・オール」

仙台大学は、昭和42年、単一学部・単一学科で開学した。その後、平成7年度以降、順次学科を増設し、現在では6学科構成としている。また、学科増設に加え平成10年度には大学院スポーツ科学研究科(修士課程)も新設している。こうした教育研究領域の拡大に伴い建学の精神を基盤に据えつつ、大学の新たな基本理念として定めたのが「スポーツ・フォア・オール」である。

「スポーツ・フォア・オール」とは文字通り「スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に」を、すなわち「乳幼児から元気なお年寄りはもちろん、寝たきりのお年寄りまで。そして、性別や障がいの有無を問わず、トップアスリート、生活の中での楽しみや健康の励みとしてスポーツをする人、スポーツをみることが好きな人、スポーツをささえる人などすべての人を対象としてスポーツを科学的に探究すること」を意味している。

使命・目的

基本理念を踏まえた仙台大学の使命・目的は、仙台大学学則第2条および仙台大学大学院学則第2条にそれぞれ示している。

■仙台大学学則 第2条

本学は、体育・スポーツ、健康福祉、スポーツ栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する諸科学を教授研究し、当該分野における指導者としての専門的知識と技能を体得させるとともに、高い識見と広い視野をもって、社会の指導的な役割を果し得る有能な人材を育成することを目的とする。

■仙台大学大学院学則 第2条

本大学院は、広い視野に立って、体育・スポーツ、健康福祉、運動栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する学術の理論と応用を教授研究し、当該分野における高度の専門的な職業等を担うための卓越した能力を培い、もって体育・スポーツ及び健康分野の発展に寄与する有為な人材を育成することにより、広く社会に貢献することを教育研究上の目的とする。

その他 (リンクを貼っていますので、項目をクリックして閲覧ください)

■人材の養成に関する目的その他教育研究上の目的(仙台大学学則別表第一)

■3つのポリシー ①学部 ②大学院

③体育学科 ④健康福祉学科 ⑤スポーツ栄養学科

⑥スポーツ情報マスメディア学科 ⑦現代武道学科 ⑧子ども運動教育学科

■朴沢学園中期経営計画

■事業計画

Monthly Report

佐々木琢磨選手・星泰雅選手 第24回夏季デフリンピック競技大会報告会を開催



左から佐々木琢磨選手（本学OB・H28年卒）、星泰雅選手（本学OB・R3年卒）

5月30日に本学LC棟において、5月にブラジル（カシアス・ド・スル）で開催された第24回夏季デフリンピック競技大会で本学職員の佐々木琢磨選手（本学OB・H28年卒）が陸上競技男子100Mで日本人初となる金メダルを獲得し、星泰雅選手（本学OB・R3年卒）が水泳競技において2種目（4×100メドレーリレー・4×100フリーリレー）で銀メダルを獲得した、両名の報告会が行われました。

朴澤泰治理事長から「夢を持ち、それを目標、目的にして、様々な努力を重ねて実現に至ったことは、彼らに続く、これからの若い世代への励みになる」、高橋仁学長からは「人間はひとりひとりが特別な存在であり、その可能性は無限であることを今大会の両名の活躍で証明してくれました」と祝辞がありました。

今大会を振り返り、佐々木選手は「本学に来て11年間が経ち、これまで様々なことがありましたが、大学関係者の皆さんのサポートがあり、ここまで来ることが出来ました」と感謝の言葉を述べ、星選手は「コロナ禍の影響で思うような練習場所がなく、水泳を何度も辞めようと思ったことがありましたが、仲間に励まされメダルを獲得することができ感謝しています」と謝辞がありました。

また、同窓会を代表し、小島淑子同窓会会長から挨拶と共に報奨金と懸垂幕が贈呈され、両選手が所属した陸上競技部および水泳部の学生より花束が贈られました。

なお、報告会には約70名が参加し、その模様をスポーツ情報サポート研究会の学生が撮影し、本学公式YouTubeチャンネルで配信しています。



リンク：<https://youtu.be/-vY-Op4gH7c>

動画はこちらからも
ご覧いただけます



＜ 目 次 ＞

・佐々木琢磨選手・星泰雅選手 第24回夏季デフリンピック競技大会報告会を開催	1
・本学の佐々木琢磨職員がデフリンピックで世界一に	2
・スポーツマネジメントコース春季研修会を終えて	3
・男子バレーボール部の林佑河と亀山 優汰がV. LAGUE DIVISION1に所属するチームヘアナリストインターンシップ	5
・【スポーツ情報サポート研究会】スポーツコード勉強会に参加 ・男子バレーボール部／春季リーグ戦を全勝で優勝飾る	6
・硬式テニス部／東北学生春季テニストーナメント大会結果 ・夏へ課題見つけた！ 体操部力こぶ／東日本インカレ	7
・2022年度若手・女性研究者奨励金「女性研究者奨励金」に採択 ・「高校スポーツの安全を守る」Vol. 49	8

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報課までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報課までご一報ください。

仙台大学 広報課

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

佐々木琢磨選手・星泰雅選手 第24回夏季デフリンピック競技大会報告会報告会の様子



本学の佐々木琢磨職員がデフリンピックで世界一に

本学の佐々木琢磨職員は5月9日、ブラジル（カシアス・ド・スル）で開催されている第24回夏季デフリンピックの陸上競技男子100Mで10秒75を記録し、日本人初となる金メダルを獲得しました。

佐々木琢磨職員のコメント

「デフリンピックで世界一になるために」と健常者界に踏み出す勇気を決意し、仙台大学に入学してから11年間ずっと、怪我や困難などの壁にぶつかり、努力し乗り越えた最高の金メダルを獲得することができました。

本学陸上競技部の指導者に多くのことを学び、最高の走りをこの舞台で発揮することができました。

たくさんの応援誠にありがとうございました。

大会中の様子

提供：日本デフ陸上競技協会



スポーツマネジメントコース春季研修会を終えて



3年ぶりに宿泊を伴う体育学科スポーツマネジメントコース春季研修会を4月23、24日に実施しました。

この研修会はスポーツマネジメントコースの2年生を対象にコースの特徴を理解し、実践力を高めるという教育方針・特色を表す一つの大きなイベントです。

コース教育を理解するためのプログラム「レクチャー」と「体験談話会」では、学生がメモを取りながら、教員と先輩方からの話を真剣に聞く様子や、仲間と協力し合いながら役割分担をして行うプログラムでは、「野外炊事」で炊いた焦げたご飯や、使用済み調理用具の片づけに対して、施設の職員方から指導を受ける学生も見受けられましたが、時間内で全員ゴールにたどり着くことができました。

今回の研修会は、コロナ感染予防対策を徹底的に講じ、入所式に励ましに駆けつけてくださった高橋仁学長をはじめ、プログラムの考案から実施までの企画運営に携わったコース教員、補助学生のご尽力により無事に終わることが出来ました。誠にありがとうございました。

また、活動を通して、コースへの帰属意識を高められ、学生同士や先輩・教員との横・縦の繋がりが強まり一体感を感じました。

<体育学科スポーツマネジメントコース主任 馬 佳濤>

男子バレーボール部の林佑河と亀山 優汰がV.LEAGUE DIVISION1に所属するチーム へアナリストインターンシップ

男子バレーボール部所属の林 佑河（スポーツ情報マスメディア学科4年）が堺ブレイザーズ（バレーボール男子V.LEAGUE DIVISION 1）へ、同部の亀山 優汰（スポーツ情報マスメディア学科3年）が、大分三好ヴァイセアドラー（バレーボール男子V.LEAGUE DIVISION 1）へインターンシップでのアナリスト活動を行いました。

共に4月30日（土）～5月5日（木）に開催された「第70回黒鷲旗 全日本男女選抜バレーボール大会」までチームに同行。インターンシップを通して現場での経験や実践したことを活かし、さらに成長していくことを期待しています。

【林 佑河（はやし ゆうが）】



※写真は堺ブレイザーズからご提供いただきました

- 生年月日：2000年6月30日（21歳）
- 出身：青森県八戸市（青森県立八戸東高校出身）

【コメント】

男子バレーボール部監督の石丸先生や受け入れてくださったチームの方々、男子バレー部でのアナリスト業務を任せた後輩、多くの人の協力やご縁のおかげで今シーズン男子V.LEAGUE DIVISION 1の堺ブレイザーズにアナリストとして帯同しスキルアップすることができました。本当にありがとうございました。

バレーボールの国内トップリーグのチームにアナリストとして同行することでトップ選手や監督、コーチの方々のバレーボールに対する取り組みや、現場でどのようなことが実際に行われているか等を肌で感じることができました。現場を知ることでアナリストとしての技量や経験は勿論ですが、それ以外にも技術的なスキルやコーチング等多くのことを学ばせていただきました。

バレーボールに人生を賭けている方たちとの生活は学生スポーツとは違った緊張感や勝利した時の達成感、喜びがあり、改めて自分はスポーツが、バレーボールが好きだということを実感できました。

大学での活動にも今シーズン学んだことを少しでも多く還元し、チームと選手、そして自分自身の成長のために尽力し、悔いのない大学ラストイヤーとしたいと思います。

【亀山 優汰（かめやま ゆうた）】



- 生年月日：2001年8月1日（20歳）
- 出身：宮城県多賀城市（宮城県立多賀城高校出身）

【コメント】

大学で行っている分析活動とは異なる面も多かったですが、大学生らしく積極的に行動に移すということを心がけながら、自分にできることを精一杯頑張って活動しました。日本最高峰のリーグでの経験を、本学の男子バレーボール部にしっかりと還元していきたいです。

【スポーツ情報サポート研究会】スポーツコード勉強会に参加

5月11日（水）株式会社フィットネスアポロ社・Hudl Japan様（<http://hudl.jp/>）主催の「スポーツコード勉強会」に、スポーツ情報サポート研究会所属の8名の学生が参加しました。

スポーツコードはチームを勝利に導くために、映像が持つポテンシャルを最大限に引き出すためのゲーム分析ソフトです。オリンピックなどの国際大会に出場する代表チームや、国内外のプロチームで導入されています。「分析項目を自由にカスタマイズができる」という特徴があり、様々な競技で愛用されているソフトウェアです。本学では10年ほど前からスポーツコードを導入しており、現在も複数の部活動で活用しています。

本学から参加した学生は、バスケットボール部、バドミントン部、硬式野球部、バレーボール部を普段サポートしている学生で多種目に渡り、中には初めてスポーツコードに触れた新入生もいました。今後のアナリスト活動・研究活動で使ってみてみたいと思った学生もいたようです。

今回は基本的な操作から細かいテクニックなどについてレクチャーをしてもらいました。今回感じた事や学んだ事を研究会活動に活かしていきたいと思います。

スポーツ情報サポート研究会では、情報戦略とメディアに関わる勉強会を毎月1回開催していきます。今後も活動の様子をお知らせできればと思います。
＜スポーツ情報サポート研究会＞



スピーカーの話に耳を傾ける学生

男子バレーボール部／春季リーグ戦を全勝で優勝飾る

本学男子バレーボール部が第59回東北バレーボール大学男女リーグ戦で全勝優勝を飾りました。

リーグ最終節は5月21・22日（日）に本学第2体育館で行われ、本学は21日に東北福祉大学、22日は東北学院大学といずれも勝利を収め、リーグ成績を7勝0敗としました。

21日

仙台大学 3（25 - 15、18 - 25、25 - 19、26 - 24）1 東北福祉大学

22日

仙台大学 3（25 - 23、29 - 27、25 - 20）0 東北学院大学

チームは今後、東日本インカレや国体予選、天皇杯予選などと大会が続きます。どの大会も好成績を残せるように更なる練習を積み上げて参ります。

男子バレーボール部Twitter；仙台大学男子バレーボール部（@sendaivolley）、Instagram：仙台大学男子バレーボール部（sendaiunivolley）から情報を発信していますので各SNSのフォローもよろしくお願いいたします。

今後も仙台大学男子バレーボール部の応援をよろしくお願いいたします。

＜男子バレーボール部＞



硬式テニス部／東北学生春季テニストーナメント大会結果

東北学生春季テニストーナメント大会が4月28日～5月4日に仙台市・泉総合運動公園、川内庭球場で行われました。

本大会は全日本学生テニス選手権（インカレ：三重県）の東北代表の選考も兼ねており、本学は遠沢風太（体育4年）、桜庭千夏（体育3年）、内山優衣（体育4年）の3名がインカレの出場権を獲得しました。

結果

○男子シングルス

第7位 早坂優輝（体育4年）

○男子ダブルス

優勝 遠沢風太（体育4年）・ 緒方（東北大学医学部）

第5位 早坂優輝（体育4年）・ 佐藤紋斗（体育2年）

○女子シングルス

第3位 桜庭千夏（体育3年）

第4位 内山優衣（体育4年）

○女子ダブルス

準優勝 桜庭千夏（体育3年）・ 内山優衣（体育4年）

第3位 五十嵐雛子（体育4年）・ 工藤はるか（スポーツ栄養4年）

コロナ禍の開催でありましたが、SNSなどを通じて保護者の方々、OBOGをはじめとして多くの声援を賜りました事、チーム一同感謝申し上げます。

<硬式テニス部>



左:遠沢（体育4年）、緒方（東北大学医学部）



（左から:内山（体育4年）、桜庭（体育3年）、工藤（スポーツ栄養4年）、五十嵐（体育4年）

夏へ課題見つけた！ 体操部力こぶ／東日本インカレ

体操の第55回東日本学生選手権大会が5月19日（木）から3日間、群馬県高崎市の高崎アリーナで行われ、本学勢はいまひとつピリッとした成績を収められませんでした。目指すのはあくまで「大学日本一」だけに、少しでも近づくため夏の全日本インカレ（8月18～22日・三重県四日市市）へ向けて巻き返します。

団体総合の成績は男子4位（総合得点396.500）、女子9位（同230.200）。とても満足いくものではありません。男女を率いる鈴木良太監督は「ミスが目立つし、いずれも練習が足りない。心も体も鍛え直す」と厳しく総括しながらも、「課題が見えたとも言えるし、各選手の調子を上向かせていきたい」と意欲を示しました。

個人総合は男子の佐々木郁哉（体育2年）が81.700の得点で7位にくい込んだのが最高。一方、種目別は岩澤将英（体育3年）が跳馬を15.100で制し気を吐きました。このほか、佐々木は床運動と跳馬で共に3位、あん馬でも5位に入りました。さらに岩澤は床運動4位、1年生の吉田求（体育）はあん馬で7位。鉄棒は高橋静波（体育3年）が8位でした。

<体操競技部>



男子団体のメンバー



女子団体のメンバー



個人枠で出場した男女のメンバー

2022年度若手・女性研究者奨励金「女性研究者奨励金」に採択

このたび、加畑 碧助教の研究課題「セルフモニタリングを活用した女性アスリートの心身の自己調整」が、日本私立学校振興・共済事業団「2022年度若手・女性研究者奨励金」の「女性研究者奨励金」部門に採択されました。

女性アスリートが心身ともに健やかにスポーツに取り組んでいくためのシステムを構築し、選手のコンディション維持とパフォーマンス向上の双方の有効性等について研究を進めていきます。



加畑 碧 助教

川平キャンパスAT・S&Cレポート

「高校スポーツの安全を守る」Vol. 49

助手 浅野 勝成

今回は、各部活動に提供しているトレーニング内容の一部を大まかに紹介します。

1. レジスタンストレーニング

ウェイトトレーニングや自体重を用いた様式となります。筋肉量の増加、筋腱複合体の強化、そして筋力の向上などが目的となります。

2. プライオメトリックトレーニング

主にジャンプを用いたトレーニングで、筋腱複合体のばねなどを鍛えて瞬発力の向上を狙います。正しい着地姿勢も習得して着地時の傷害リスクの減少を目指します。

3. スプリント・アジリティトレーニング

加速、スピード、減速、方向転換の動作習得と質の向上を目的とします。特に減速を重点に置きます。理由は、例えば、ブレーキ性能の劣ったスポーツカーは事故を起こしやすく、加速やスピードが良くても減速の質が悪いと傷害リスクが上がるためです。

4. メディシンボールトレーニング

メディシンボールという3-5kg程度のボールを用いたトレーニングとなります。壁、床、真上、そしてペアを組んで投げます。全身・上半身のパワーやボールをキャッチする際の衝撃を上手く受け止める力（≒減速・着地能力）を養成します。

5. ウェイトリフティング

ジャークを導入可と判断したチームのみに指導しています。全身のパワーとキャッチする際の姿勢制御（≒着地・減速能力）の向上を目的とします。

6. 持久系トレーニング

走様式が多いので“ラントレ”とも言います。様々なインターバルトレーニングを用いて持久力の向上を目指します。これが多い時期はストップウォッチを持ってるだけで生徒達が嫌な顔をすることも。たまに私も一緒に走ることもあります。

7. モビリティ・静的ストレッチ

ウェイトトレーニング中のセット間などに用います。紹介して自宅でやるようにと指示もします。基本的には紹介して自宅で習慣化するように促しますが、それがとても難しい。

8. ウォームアップ

RAMP (Raise, Activate, Mobilize, Potentiate) の概念を参考に指導しています。おおよそ10-15分程度のものを各競技のニーズを基に作成・指導しています。また、毎日行えるトレーニングでもあるため、様々な種目を段階的に導入していくこともあります。

9. 安全面などの指導・教育

適切な器具の使い方、清掃の仕方、服装、シューズの履き方なども指導します。間違っていれば即座に修正します。高校在学中がトレーニングを学べる最後の期間にもなりうるため、卒業後も安全にトレーニングや運動を行えるような指導・教育を心掛けています。

～仙台大学教職員の共通理解事項～

仙台大学の「建学の精神」、「基本理念」、「使命・目的」

建学の精神

「実学と創意工夫」

仙台大学の経営母体である学校法人朴沢学園(明治12年開設)の学園創始者は、建学の精神として「実学と創意工夫」を掲げ、「創意工夫と先見性をもって実学を志し、実学に根ざした人格形成と人材育成を図る」ことをもって先進的な女子教育を行い、寺子屋方式に代え一斉教授法を導入し明治時代の裁縫教育に一大革新をもたらした。

その考え方は、体育系単科大学として昭和42年に開学した本学にも受け継がれ、人格形成の要素である体育・徳育・知育のうち「体育」に教育・研究の重点を置きつつ、実学と創意工夫に根差した広い教育研究領域を探索することに継承されてきた。なお、建学の精神の意図するところについては、開学時の第1回入学式・初代学長告辞にも「社会で充分活動できるための智識と技能を鍛えた心身ともに健康である人間をつくること」であり、仙台大学は、企業等における健康管理・健康指導の企画・実施担当者の育成、各種の運動機構等における実技指導者、ならびに学校体育の指導者を養成することを目的としております」と端的かつ明確に示されている。

基本理念

「スポーツ・フォア・オール」

仙台大学は、昭和42年、単一学部・単一学科で開学した。その後、平成7年度以降、順次学科を増設し、現在では6学科構成としている。また、学科増設に加え平成10年度には大学院スポーツ科学研究科(修士課程)も新設している。こうした教育研究領域の拡大に伴い建学の精神を基盤に据えつつ、大学の新たな基本理念として定めたのが「スポーツ・フォア・オール」である。

「スポーツ・フォア・オール」とは文字通り「スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に」を、すなわち「乳幼児から元気なお年寄りはもちろん、寝たきりのお年寄りまで。そして、性別や障がいの有無を問わず、トップアスリート、生活の中での楽しみや健康の励みとしてスポーツをする人、スポーツをみる人が好きな人、スポーツをささえる人などすべての人を対象としてスポーツを科学的に探究すること」を意味している。

使命・目的

基本理念を踏まえた仙台大学の使命・目的は、仙台大学学則第2条および仙台大学大学院学則第2条にそれぞれ示している。

■仙台大学学則 第2条

本学は、体育・スポーツ、健康福祉、スポーツ栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する諸科学を教授研究し、当該分野における指導者としての専門的知識と技能を体得させるとともに、高い識見と広い視野とをもって、社会の指導的な役割を果し得る有能な人材を育成することを目的とする。

■仙台大学大学院学則 第2条

本大学院は、広い視野に立って、体育・スポーツ、健康福祉、運動栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する学術の理論と応用を教授研究し、当該分野における高度の専門的な職業等を担うための卓越した能力を培い、もって体育・スポーツ及び健康分野の発展に寄与する有為な人材を育成することにより、広く社会に貢献することを教育研究上の目的とする。

その他 (リンクを貼っていますので、項目をクリックして閲覧ください)

■人材の養成に関する目的その他教育研究上の目的(仙台大学学則別表第一)

■3つのポリシー ①学部 ②大学院

③体育学科 ④健康福祉学科 ⑤スポーツ栄養学科

⑥スポーツ情報マスメディア学科 ⑦現代武道学科 ⑧子ども運動教育学科

■朴沢学園中期経営計画

■事業計画

Monthly Report

東北初！女子硬式野球部 来春創設の記者発表を行いました



(前列左から) 千葉さん、廣田さん、木明桜さん
(後列左から) 重巢教授、高橋学長、江尻教授、入澤准教授

＜目次＞

・東北初！女子硬式野球部 来春創設の記者発表を行いました	1
・櫻井雅浩教授が国際学会で研究報告 ・【スポーツ情報サポート研究会】ワークショップを開催	2
・本学OBの南一輝選手が全日本体操種目別ゆか4連覇を報告 ・硬式野球部の辻本倫太郎選手（体育3年）が侍ジャパン大学日本代表に選出を高橋学長に報告	3
・男子バレーボール部：活動報告	5
・バドミントン部／成田行機が東北学生選手権制覇！齊藤梓も4位入賞！ ・軟式野球部メンバー6名が東北選抜に選出	6
・芝草通信 NO. 36	7
・「高校スポーツの安全を守る」Vol. 50	8

令和5年度春に東北で初となる女子硬式野球部を本学に創設することの記者発表が7月1日（金）に本学LC棟を会場におこなわれました。

近年、女子の野球競技人口は増加傾向にあり、今年度に入ってから各地の高校での創設や、女子野球に対する企業の支援等の報道が続いています。大学においても全国各地域で創設が進んでいますが、東北地区では設置おらず、このような状況を踏まえ、硬式野球を続けたいという女子学生の受け皿となれるよう、東北地区の大学では初となる女子硬式野球部の創設を決めたものです。

チームスタッフとして、監督には現在硬式野球部コーチの入澤裕樹准教授、部長は江尻雅彦教授が硬式野球部部長が兼務し、副部長は女子学生支援の観点から重巢吉美教授が就任する予定となっています。

創設に際しては、昨年の東京オリンピック・パラリンピックのホストタウン事業を共同で実施した柴田町と白石市、乳幼児の健康づくり等での連携や、男子硬式野球部が球場をお借りしている角田市から、練習場所の提供など全面的に支援していただけることとなっています。

会見では高橋仁学長が「今回の女子野球部の創設が、スポーツによる仙南地域の活性化にもお役に立てるよう、新しい部活動のスタイルを模索していきたい。また、近隣の3つの自治体の恵まれた環境をフルに活用して、女子の選手たちが存分に練習できるように支援していきたい」と話し、入澤裕樹監督は「大学日本一を目指しながらも、地域を活性化できるように元気と明るさで活気のあるチームにしていきたい」と今後に向けて抱負を述べました。

会場には、既に入部を希望している在学生3名も参加。選手としての活躍が期待される千葉真希さん（子ども運動教育1年）は「私はソフトボールしかしたことがないので、たくさんの困難にぶつかるとは思いますが、野球というスポーツに新たに触れて楽しみたい」、選手を支えるマネージャーを希望しているという廣田美憂さん（体育学科1年）は「チームを支えて勝利に貢献できるようなマネージャーになりたい」、アナリストを希望するという木明桜子さん（スポーツ情報マスメディア学科1年）は「データ分析を通して得られる個人やチームの強みや弱みを選手に伝えたい」と早速新チームでの活躍を誓いました。

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報課までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報課までご一報ください。

仙台大学 広報課

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

本学OBの南一輝選手が全日本体操種目別ゆか4連覇を報告

今年3月に本学を卒業し、現在はエムズスポーツクラブ《M・S・C》で体操競技を続ける南一輝選手が6月28日に本学を訪れ、高橋仁学長に全日本体操種目別選手権でのゆか運動4連覇を報告しました。

南選手は大会中の予選2位で臨んだ決勝の状況を「プレッシャーを感じていましたが演技中は楽しむことができました」と語り、序盤からの連続回転のジャンプや、後方抱え込み2回宙返り3回ひねりの大技「リ・ジョンソン」を決めたことが4連覇達成の決め手と振り返りました。しかし、着地ではミスが出てしまい、納得する演技ができなかったという南選手は、来年に向けて「ゆかでの5連覇と、今回ケガの影響で決勝を回避した跳馬でもメダルを取り、世界で勝つための準備をしていきたい」と更なる活躍を誓いました。

高橋学長は「後輩たちは南選手の後ろ姿を見て、刺激としている。教職員も南選手の活躍を楽しみにしているので、ぜひ地方から世界一となるように頑張ってもらいたい」とエールを送りました。



(左から) 高橋学長、南選手、
M・S・C松村俊輔代表（本学OB）

硬式野球部の辻本倫太郎選手（体育3年）

侍ジャパン大学日本代表に選出を高橋学長に報告

本学硬式野球部の辻本倫太郎選手（体育3年）が、7月5日～7月15日にオランダで開催される「第30回ハーレムベースボールウィーク」の侍ジャパン大学日本代表に選出されました。6月28日には高橋仁学長を訪れ、選出の報告と共に大会での活躍を誓いました。

辻本選手の「日の丸を背負ってプレーするので、世界一を取れるように貢献したい」との決意に対し、高橋学長は「『勝敗は時の運』とも言われるが、常に一番になるんだという気持ちをもってプレーをしてきてほしい」と激励しました。

本学からの日本代表選出は、第27回大会に出場した熊原健人投手（H27年度卒・元プロ野球選手）以来2人目です。



(左から) 高橋学長と辻本選手

プロフィール

辻本 倫太郎（つじもと りんたろう）

投 打 : 右投右打

ポジション : 内野手

出身高校 : 北海道・北海高等学校

男子バレーボール部：活動報告

6人制クラブカップ宮城予選を制し、全国大会の切符を掴む

仙台大クラブ（男子バレーボール部）が6月12日（日）に宮城県・多賀城市総合体育館で開催された2022年度全日本6人制バレーボールクラブカップ男女選手権大会宮城県予選会で優勝しました。

結果は以下の通り

仙台大学クラブ 2 (25 - 23、25 - 18) 0 東北学院大クラブ

仙台大学クラブ 2 (26 - 24、21 - 25、25 - 20) 1 阿武隈会

チームは今後、8月4日（木）～ 8月7日（日）に岡山県岡山市で開催される第41回全日本クラブカップ選手権大会に出場します。



激闘の末、一步及ばず

第41回東日本バレーボール大学選手権大会が6月22日（水）から町田市総合体育館で開催されました。

本学男子バレーボール部は1回戦で富山大学に勝利を収めました、続く筑波大学との2回戦では激闘の末、惜しくも敗れました。

結果は以下の通り

1回戦 仙台大学 2 (23 - 25、25 - 17、25 - 19) 1 富山大学

2回戦 仙台大学 1 (24 - 26、27 - 25、15 - 25、18 - 25) 3 筑波大学



ミニ国体への出場を決める

第77回国民体育大会バレーボール競技宮城県選考会が6月26日（日）に多賀城総合体育館で開催され、本学男子バレーボール部が優勝を果たしました。

前年度優勝の本学は東北学院大学との決勝戦に臨みました。

結果は以下の通り

仙台大学 3 (25 - 20、25 - 21、25 - 23) 0 東北学院大学

これにより、本学男子バレーボール部は8月19日から青森県で開催される東北ミニ国体に宮城県代表として出場します。



なお、Twitter；仙台大学男子バレーボール部（@sendaivolley）、Instagram：仙台大学男子バレーボール部（sendaiunivolley）から情報を発信していますので各SNSのフォローもよろしくお願いいたします。

<男子バレーボール部>

バドミントン部／成田行磯が東北学生選手権制覇！齊藤梓も4位入賞！

5月27日～6月2日、山形県山形市で東北学生春季リーグ戦と東北学生選手権が開催されました。

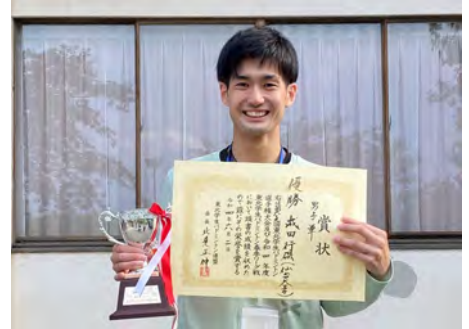
春季リーグ戦では、男女ともに1部3位で目標の優勝に届かず悔しい思いをしましたが、個人戦である東北学生選手権では男女それぞれのエースが躍動しました。

成田行磯（体育4年）は、これまで3連敗、今大会の団体戦でも敗れていた八島良弥選手（東北学院大学）が準決勝の相手でしたが、前日にアナリスト・須田翔大（スポーツ情報4年）と対策ミーティングを行いました。

須田は、八島選手の試合映像を誰よりも多く観てデータを収集していたことから試合のコーチングシートにも入ることにしました。ミーティングで立てた作戦が的中し、まったくリードを許すことなく完勝することができました。

決勝の相手は、東北学生を連覇し、直接対決でも連敗中の大畑龍平選手（東日本国際大学）でした。こちらにもミーティングでの策が当たり、1ゲームを先取しましたが、相手も粘り強く2ゲーム目を取り返され、ファイナルゲームも一進一退の展開となり20-20から2点先取して優勝まで到達しました。

アナリストの須田だけでなく、コンディショニングを担当したアスレティックトレーナーの中嶋蒼（体育4年）などスタッフ学生全員で勝ち取った優勝でした。



大会終了翌日に、高橋仁学長に優勝報告にうかがいました。

「自分が一番きつい練習をし、高い意識を以て取り組んでいた自信があった」と報告し、「東日本インカレや全日本インカレでも上位に食い込めるように頑張ってください」と激励をいただきました。

一方、女子の1年生エース・齊藤梓（スポーツ栄養1年）も準決勝に進出し、東北学生二連覇中の櫻庭ほのか選手（東北福祉大学）と対戦しました。互角に渡り合いファイナルゲームまで奮闘するも僅かな差で敗れ、3位決定戦においても健闘しましたが4位となりました。今大会における櫻庭選手の失ゲームは齊藤戦のみであったことから、今後に期待が持てる敗戦でした。



東日本大会や全日本大会において上位進出報告ができるように、選手ならびにサポートする学生たちも一緒にワンチームで精進してまいります。

＜バドミントン部＞

軟式野球部メンバー6名が東北選抜に選出

本学軟式野球部から6名が令和4年度大学軟式野球東北選抜として選出されました。

メンバーは以下の通り

○選手

岩渕颯太（スポーツ情報4年）

嶺岸奎（体育3年）

佐藤心乃介（スポーツ栄養3年）

山口大翔（健康福祉3年）

菊地雄大（体育3年）

○主務

鈴木希美（スポーツ栄養2年）



今後、他の大学のメンバーと交流し、その経験を部活に還元してくれることを期待します。

なお、本学軟式野球部は試合の采配を含め日常の練習等も学生監督、主将、主務が協力して活動を行っており、東北大会優勝、全国大会出場、そして全国大会で勝つことを目標に取り組んでいます。

是非、硬式、準硬式とは違う「軟式」という選択肢と一緒に戦う高校生のお待ちしています。

＜軟式野球部＞

芝草通信 NO. 36

担当 : 助教 野口 翔

ハスクバーナ オートモアの導入について①

皆さん、こんにちは。5月末より大学構内の噴水周りの芝生管理にオートモアという自動芝刈り機を導入しました。このオートモアはスウェーデンのハスクバーナという会社で開発されたロボット芝刈機で、最近ではテレビのCMで見かける方も多いかと思います。

自動刈込の仕組みとしては、自動掃除機をイメージして頂ければわかりやすいと思います。基本的には、チャージステーションを中心に低電圧ワイヤーを地中に埋設し、そのワイヤーを張った範囲内を走行し刈り込むものです。

(大学の製品は、GPSで走行跡を記憶し、同じ場所を走らないようになっています。)

今回は、オートモア導入の手始めに低電圧ワイヤーを埋設したときの様子を紹介します。

低電圧ワイヤー埋設手順

植栽や芝生から機械が出ないよう地際との間隔を決めロープを張る。

埋設には10cmほどの深さが必要なためスコップで切込みを付ける。

切込みに低電圧ワイヤーを埋設（留め具で固定）

チャージステーションに接続し刈り込み範囲を決定



ハスクバーナのオートモア



埋設作業の様子

切れ込みの跡

低電圧ワイヤーを地中に埋設しているところ

チャージステーション

「高校スポーツの安全を守る」 Vol. 50

新助手 佐藤 章人

5月末から6月上旬にかけて、宮城県高校総合体育大会が行われました。高校総体は高校生にとって大きな大会の一つです。この大会を最後に引退する選手も少なくないため、各部活動がこの日のために日々練習に取り組んできました。東北大会への出場権を獲得したチームや選手がいる一方、目標としていた結果に届かず悔しい思いをした選手も沢山いたことでしょう。勝ち進んだチームも悔しい思いをしたチームも既に次の目標に向け動き始めています。

やはり競技スポーツの最終目標の一つは勝利することにあります。それを達成するためにメンタル面やフィジカル面のコンディションを含めた競技力の向上が必要です。選手は競技力の向上にむけて日々、負荷の高い練習やトレーニングに耐え、かつより効率的な動きのできる身体を手に入れるべく「日々の身体のケア」と「自分自身の身体の特性を理解すること」が求められます。

ひとつ目の「日々の身体のケア」については、練習後のケアとして、静的ストレッチや筋膜リリース、アイシングなどがよく聞かれる方法だと思います。しかし、有名なはずでも正しいやり方で行えていなかったり、継続して実施していなかったりすることが多くのスポーツ現場で見られるのではないのでしょうか。明成高校では多くの選手が積極的にケアを行っていますが、残念ながら継続的に行えていない選手がいることもまた事実です。ATとしてケアの大切さを伝えるとともに選手自らケアを行っていくような声掛けをしていきたいと考えています。

ふたつ目の「自分自身の身体の特性を理解すること」については、私個人の取り組みとして、選手には痛みや違和感、ケガの仕方などを自身の言葉で表現してもらうようにしています。極力選手の発言は否定せずに傾聴を心がけ、選手に寄り添うことで、その過程で痛みに対する考え方や、選手の身体の癖や特性への理解に繋がると考えているからです。

私がATとしてできるサポートは微々たるものですが、目標に向かい日々必死に取り組んでいる選手一人一人のために、少しでも貢献できるように尽力していきたいです。



～仙台大学教職員の共通理解事項～

仙台大学の「建学の精神」、「基本理念」、「使命・目的」

建学の精神

「実学と創意工夫」

仙台大学の経営母体である学校法人朴沢学園(明治12年開設)の学園創始者は、建学の精神として「実学と創意工夫」を掲げ、「創意工夫と先見性をもって実学を志し、実学に根ざした人格形成と人材育成を図る」ことをもって先進的な女子教育を行い、寺子屋方式に代え一斉教授法を導入し明治時代の裁縫教育に一大革新をもたらした。

その考え方は、体育系単科大学として昭和42年に開学した本学にも受け継がれ、人格形成の要素である体育・徳育・知育のうち「体育」に教育・研究の重点を置きつつ、実学と創意工夫に根差した広い教育研究領域を探索することに継承されてきた。なお、建学の精神の意図するところについては、開学時の第1回入学式・初代学長告辞にも「社会で充分活動できるための智識と技能を鍛えた心身ともに健康である人間をつくること」であり、仙台大学は、企業等における健康管理・健康指導の企画・実施担当者の育成、各種の運動機構等における実技指導者、ならびに学校体育の指導者を養成することを目的としております」と端的かつ明確に示されている。

基本理念

「スポーツ・フォア・オール」

仙台大学は、昭和42年、単一学部・単一学科で開学した。その後、平成7年度以降、順次学科を増設し、現在では6学科構成としている。また、学科増設に加え平成10年度には大学院スポーツ科学研究科(修士課程)も新設している。こうした教育研究領域の拡大に伴い建学の精神を基盤に据えつつ、大学の新たな基本理念として定めたのが「スポーツ・フォア・オール」である。

「スポーツ・フォア・オール」とは文字通り「スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に」を、すなわち「乳幼児から元気なお年寄りはもちろん、寝たきりのお年寄りまで。そして、性別や障がいの有無を問わず、トップアスリート、生活の中での楽しみや健康の励みとしてスポーツをする人、スポーツをみる人が好きな人、スポーツをささえる人などすべての人を対象としてスポーツを科学的に探究すること」を意味している。

使命・目的

基本理念を踏まえた仙台大学の使命・目的は、仙台大学学則第2条および仙台大学大学院学則第2条にそれぞれ示している。

■仙台大学学則 第2条

本学は、体育・スポーツ、健康福祉、スポーツ栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する諸科学を教授研究し、当該分野における指導者としての専門的知識と技能を体得させるとともに、高い識見と広い視野とをもって、社会の指導的な役割を果し得る有能な人材を育成することを目的とする。

■仙台大学大学院学則 第2条

本大学院は、広い視野に立って、体育・スポーツ、健康福祉、運動栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する学術の理論と応用を教授研究し、当該分野における高度の専門的な職業等を担うための卓越した能力を培い、もって体育・スポーツ及び健康分野の発展に寄与する有為な人材を育成することにより、広く社会に貢献することを教育研究上の目的とする。

その他 (リンクを貼っていますので、項目をクリックして閲覧ください)

■人材の養成に関する目的その他教育研究上の目的(仙台大学学則別表第一)

■3つのポリシー ①学部 ②大学院

③体育学科 ④健康福祉学科 ⑤スポーツ栄養学科

⑥スポーツ情報マスメディア学科 ⑦現代武道学科 ⑧子ども運動教育学科

■朴沢学園中期経営計画

■事業計画

Monthly Report

セベツェアリーナ嘱託研究員が介護予防教室でチアダンスを行いました



セベツェアリーナ嘱託研究員の指導のもと、楽しく汗を流した参加者

＜目次＞

・セベツェアリーナ嘱託研究員が介護予防教室でチアダンスを行いました	1
・アスリート必見！アメリカの大学ってどんなところ？／留学報告	2
・ハワイ州立大学から留学生が短期研修で本学学生と交流しました	3
・バドミントン部の齊藤梓（スポーツ栄養1年）が山形県国体予選で優勝 ・東北ラウンド進出を決める／女子バレーボール部	4
・「高校スポーツの安全を守る」Vol. 51	5

7月5日（火）仙台大学あすと長町サテライトオフィス（仙台市・ゼビオアリーナ）でセベツェアリーナ嘱託研究員が介護予防教室の講師としてチアダンスを行いました。

この取り組みは郡山地域包括センター（仙台市太白区）が主催し、高齢者の健康づくり、フレイル予防、社会参加への支援を目的とした介護予防教室の一環で、今回の「シニアチア」はチアダンスをシニアでもやりやすく、楽しくできるように新しくプログラムされました。

初回は18名が参加し、オープニングセレモニーでは高橋仁学長が「最近ではシニアのチアダンスも広がりを見せており、参加して頂いた皆さんもぜひ最後まで楽しんで欲しい」と挨拶しました。

運動時は、和やかな雰囲気の中、ストレッチやチアダンスを行い、心身共にリフレッシュした様子で、終了後は参加者からアリーナ嘱託研究員に「楽しかった」、「また次も楽しみにしています」などの声を掛けられ、終始笑顔が溢れる教室となりました。

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報課までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報課までご一報ください。

仙台大学 広報課

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp



ダンスの前に準備運動を行う様子



オープニングセレモニーで挨拶を行った高橋学長

アスリート必見！アメリカの大学ってどんなところ？／留学報告

仙台大学トレーニングセンターのアシスタント・ストレンクス&コンディショニング（以下S&C）コーチの星谷勇佑です。現在、本学が独自に設置した専門指導者の育成制度の一環として、アメリカ合衆国にあるノースダコタ州立大学（以下NDSU）でS&C研修に参加しています。NDSUは八村塁選手が在籍していた大学と同じNCAAディビジョンIに所属しており、男女合わせて14のスポーツチームがあります。NFL、MLB、NBA に数々の選手を輩出した実績を持つ大学です。中でも、アメリカンフットボール部は7度全米一位（FCSディビジョン）に輝き、トランプ前大統領にホワイトハウスへ招待されハンバーガーを振る舞われた史上2校目になったことで有名です。

私は本学の卒業生で、学生時代はアメリカンフットボールに打ち込んでいましたが、ここまでの研修を通してアメリカの学生アスリートと関わる中で、日米の違いを様々な面で感じています。そこで、今回はアメリカの大学スポーツをとりまく環境を、主に施設、栄養、学業の3つの視点にフォーカスして紹介したいと思います。

施設

NDSUには26台のパワーラックと全フロアドロップ可能（画像1）、ラットプルマシン12台、さらにウェイトトレーニングエリアの隣には50ヤードの人工芝のエリアがあります。ラックが台数だけでも仙台大学の2倍以上の数です。充実した環境によって、より多くの選択肢の中から最適なトレーニングプログラムを組み合わせることが可能になり、トータルコーディネートされたトレーニング指導を学生アスリートは受けることができます。

栄養

ウェイトルームの入り口にはNutrition Station（画像2）と言って軽食を摂ることができるスペースがあります。そこには、プロテインやバナナ、シリアル、ヨーグルトなど他にも多くの軽食が用意されています。トレーニング前後にそこで栄養補給を済ませることが出来るのでトレーニング効果を最大限に引き上げることができます。この環境から、どれほどアスリートにとって栄養補給が重要視されているのか感じ取れますね！

学業面

NCAAでは、学業成績や練習時間などに関する厳しい規則が設けられており、規程以上の学業成績を修められなかった選手は試合への出場資格を失ってしまいます。しかし、練習時間も制限されているので学生は勉強に充てられる時間もはっきり確保できます。また、私の関わっている学生は卒業後のキャリアを見据えて病院でインターンシップをしています。とても合理的なシステムですね！私が学生の頃はとにかく可能な限り練習に時間を費やしていましたが、アメリカトップレベルの学生アスリートの生活を見ると“練習時間＝競技レベル”では無い事がとても伝わってきます。



1. ウェイトルーム



2. Nutrition Station

今回、紹介したアメリカの大学ならではのシステムは、日本の学生スポーツにも応用できるものだと考えますし、実際、本学でもトレーニングや栄養面において同様の活動が行われています。

今後も情報発信をしていきますので、特に学生アスリートの皆さんには、是非とも今後の活動に生かしてもらえれば嬉しいです！

ハワイ州立大学から留学生が短期研修で本学学生と交流しました

6月27日（月）～7月1日（金）に、ハワイ州立大学の4年生1名が本学で短期研修を行いました。

今回の研修は、共同研究（脳震盪に関する調査研究）を通じた学生交流で、学生選手における脳震盪に関する講義を受講したほか、アスレティックトレーニングルームなどの施設見学やAT部の学生との交流などを行いました。

また、仙台大学附属明成高校のメモリアルホールで「仙台フィルハーモニー」のコンサート鑑賞や日本文化体験として、「日本三景松島」を訪問しました。松島の見学では、AT部の学生と中国からの留学生も同行し、貴重な国際交流の機会となりました。

お忙しい中、特別講義をしてくださった先生方、ありがとうございました。

<国際交流センター>



バドミントン部の齋藤梓（スポーツ栄養1年）が山形県国体予選で優勝

7月に入り、バドミントン競技では各都道府県で国体予選が開催されており、本学の男女のエースがそれぞれの故郷にて上位進出を果たしました。

山形県では、齋藤梓（スポーツ栄養1年）が成年女子シングルスにて優勝し、同ダブルスにおいても準優勝しました。齋藤はシングルスの優勝にて国体メンバーに選出され、8月末に行われる東北ブロック予選（通称・ミニ国体）に出場します。同時に行われる東北総合バドミントン選手権大会の山形県代表にも選出されました。

青森県では、成田行磯（体育・4年）が成年男子ダブルスで、二年連続の準優勝となりました。ダブルスは優勝しないと国体メンバーには選ばれないことから残念ながらメンバー選出は逃してしまいました。

バドミントン部の男女エースに今後も期待していきたいです。
＜バドミントン部＞



東北ラウンド進出を決める／女子バレーボール部

女子バレーボール部が7月17日（日）に宮城県・多賀城市総合体育館で開催された2022年度天皇杯・皇后杯宮城県ラウンドで優勝しました。

結果は以下の通り

○準決勝

仙台大学 2 （ 25 － 12 、 25 － 15 ） 0 聖和短期大学

○決勝

仙台大学 2 （ 25 － 18 、 25 － 11 ） 0 常盤木学園高等学校



これにより、9月10日（土）～11日（日）に福島県で開催される天皇杯・皇后杯東北ブロックラウンドに宮城県代表として出場します。

応援よろしくお願いします。

＜女子バレーボール部＞

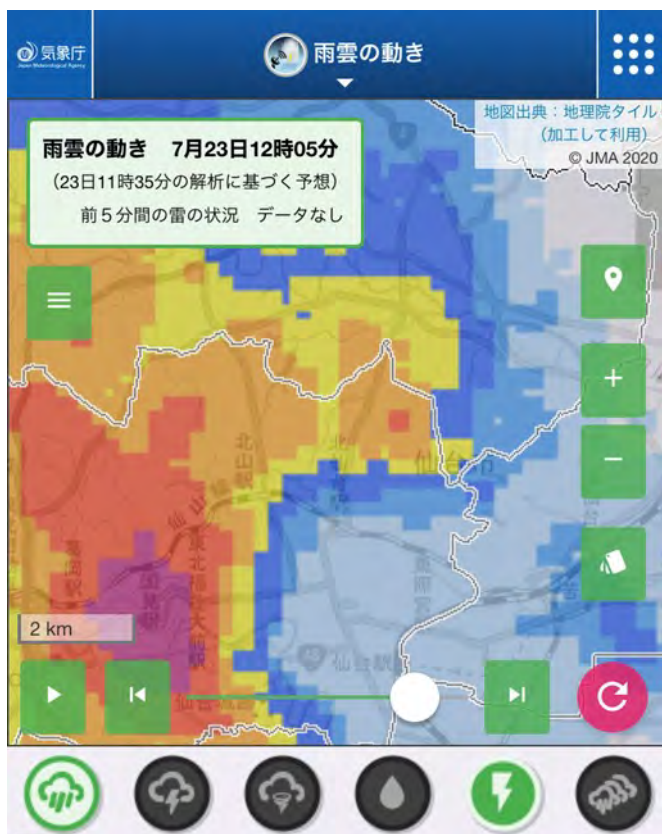
「高校スポーツの安全を守る」 Vol. 51

助手 高野 順平

7月中旬に全国高校サッカー選手権大会の宮城県1次予選が行われ、仙台大学附属明成高校男子サッカー部の試合に帯同してきました。本来この時期は、梅雨の終わりの晴れ間や梅雨が明けて急に気温が上がったりと、熱中症のリスクが高い時期ですが、今年は梅雨が早く開けたにも関わらず、その後も雨が続き比較的涼しい日が多かったです。試合は2日間あり、どちらもそこまで気温は高くなかったのですが、1日目は大雨の中での試合となりました。

熱中症に関しては、毎年テレビや新聞でも話題になるので色々対策は取られていると思いますが、スポーツ中の安全に関してこの時期もう一つ気を付けないといけないのが、落雷ではないでしょうか。仙台は比較的落雷件数が少ないようで、あまりニュースなどで話題にならないかもしれませんが、7月に入って仙台でも激しい雷雨の日が数日あったと思います。

川平ATルームでも、事前に天気予報を確認して、雷の可能性のある日はあらかじめ顧問の先生に伝えたり、部活動中も気象庁のホームページやスマートフォンのアプリで状況の変化を随時確認して、部活を中断しないといけない状況になった時は、先生方と連携し生徒たちを屋内に誘導したりしています。



～仙台大学教職員の共通理解事項～

仙台大学の「建学の精神」、「基本理念」、「使命・目的」

建学の精神

「実学と創意工夫」

仙台大学の経営母体である学校法人朴沢学園(明治12年開設)の学園創始者は、建学の精神として「実学と創意工夫」を掲げ、「創意工夫と先見性をもって実学を志し、実学に根ざした人格形成と人材育成を図る」ことをもって先進的な女子教育を行い、寺子屋方式に代え一斉教授法を導入し明治時代の裁縫教育に一大革新をもたらした。

その考え方は、体育系単科大学として昭和42年に開学した本学にも受け継がれ、人格形成の要素である体育・徳育・知育のうち「体育」に教育・研究の重点を置きつつ、実学と創意工夫に根差した広い教育研究領域を探索することに継承されてきた。なお、建学の精神の意図するところについては、開学時の第1回入学式・初代学長告辞にも「社会で充分活動できるための智識と技能を鍛えた心身ともに健康である人間をつくること」であり、仙台大学は、企業等における健康管理・健康指導の企画・実施担当者の育成、各種の運動機構等における実技指導者、ならびに学校体育の指導者を養成することを目的としております」と端的かつ明確に示されている。

基本理念

「スポーツ・フォア・オール」

仙台大学は、昭和42年、単一学部・単一学科で開学した。その後、平成7年度以降、順次学科を増設し、現在では6学科構成としている。また、学科増設に加え平成10年度には大学院スポーツ科学研究科(修士課程)も新設している。こうした教育研究領域の拡大に伴い建学の精神を基盤に据えつつ、大学の新たな基本理念として定めたのが「スポーツ・フォア・オール」である。

「スポーツ・フォア・オール」とは文字通り「スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に」を、すなわち「乳幼児から元気なお年寄りはもちろん、寝たきりのお年寄りまで。そして、性別や障がいの有無を問わず、トップアスリート、生活の中での楽しみや健康の励みとしてスポーツをする人、スポーツをみる人が好きな人、スポーツをささえる人などすべての人を対象としてスポーツを科学的に探究すること」を意味している。

使命・目的

基本理念を踏まえた仙台大学の使命・目的は、仙台大学学則第2条および仙台大学大学院学則第2条にそれぞれ示している。

■仙台大学学則 第2条

本学は、体育・スポーツ、健康福祉、スポーツ栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する諸科学を教授研究し、当該分野における指導者としての専門的知識と技能を体得させるとともに、高い識見と広い視野とをもって、社会の指導的な役割を果し得る有能な人材を育成することを目的とする。

■仙台大学大学院学則 第2条

本大学院は、広い視野に立って、体育・スポーツ、健康福祉、運動栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する学術の理論と応用を教授研究し、当該分野における高度の専門的な職業等を担うための卓越した能力を培い、もって体育・スポーツ及び健康分野の発展に寄与する有為な人材を育成することにより、広く社会に貢献することを教育研究上の目的とする。

その他 (リンクを貼っていますので、項目をクリックして閲覧ください)

■人材の養成に関する目的その他教育研究上の目的(仙台大学学則別表第一)

■3つのポリシー ①学部 ②大学院

③体育学科 ④健康福祉学科 ⑤スポーツ栄養学科

⑥スポーツ情報マスメディア学科 ⑦現代武道学科 ⑧子ども運動教育学科

■朴沢学園中期経営計画

■事業計画

Monthly Report

 SENDAI UNIV.

PUBLIC RELATIONS

Vol.196 / 2022.AUG

(月1回発行)

アイリスオーヤマ（株）と女子硬式野球部の支援に関する協定を締結



後列左から高橋仁 学長、佐野仁 朴沢学園常務理事、入澤裕樹 女子硬式野球部監督、朴澤泰治 理事長、アイリスオーヤマ株式会社 社長室 室長 浅野秀一様、柴田町 町長 滝口茂 様、白石市 市長 山田裕一 様、角田市 市長 黒須貫 様
前列左から千葉真希さん（子ども運動教育学科1年）廣田美憂さん（体育学科1年）

本学園とアイリスオーヤマ株式会社は8月24日（水）、仙台大学LC棟に於いて「仙台大学女子硬式野球部の支援に関する協定」を結びました。

この協定は、アイリスオーヤマ株式会社に活動支援をいただきながら、女子硬式野球部の振興とスポーツによる地域の活性化に貢献することを主な目的としています。

調印式には、女子硬式野球部の創設に際して、行政の立場からご支援いただく、柴田町の滝口茂町長、白石市の山田裕一市長、角田市の黒須貫市長のご臨席を賜り、アイリスオーヤマ株式会社の浅野秀一社長室長から「女子野球を志す方々に夢や希望を与える、笑顔をもたらしてくれるようなチーム作りや活動に取り組んでいただくとともに、交流大会の開催等を通して、この地域での宿泊や食事等利用により、地域が活性化するための一助ができることにうれしく思っている」との言葉をいただき、朴澤理事長が「アイリスオーヤマ株式会社様には、これまでもスポーツ・健康に係る教育環境の整備など、相互に密接な関係を持たせてきていただいておりますが、女子スポーツの新しい分野で、地域社会の活性化を踏まえた人材育成ということの協働が図れるということに、大きく期待を膨らませています」と感謝の言葉を述べました。

ご臨席いただいた3市町長から期待の言葉を頂戴した後、アイリスオーヤマ株式会社と3市町のロゴが入ったユニフォームの披露として、入部を希望している在学生の千葉真希さん（子ども運動教育学科1年）と廣田美憂さん（体育学科1年）が登壇しました。

入澤裕樹監督は「1年目から大会に出場して、いい成績を残すことが目標ですが、地域社会の活性化に向けて「産官学」連携による女子野球クラブチーム交流大会を開催するように取り組み、柴田町、白石市、角田市の仙南地区の球場および宿泊地を利用することにより、女子野球の振興だけでなく交流人口の増加を図り、スポーツによる地域創生に貢献していきたい」と決意を述べました。

＜ 目 次 ＞

・アイリスオーヤマ（株）と女子硬式野球部の支援に関する協定を締結	1
・令和4年度海浜実習報告	2
・クリケット研修会兼贈呈式（教職員対象）への参加報告 ・「日本文化体験～会津～」を開催！	3
・スポーツ情報マスメディア学科Podcast「メディアでアソバナイト」 ・岩澤、跳馬の王者へ／体操インカレ／団体、女子6位へ躍進 男子悔しい7位	4
・「高校スポーツの安全を守る」Vol. 52	5

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報課までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報課までご一報ください。

仙台大学 広報課

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp



アイリスオーヤマ株式会社と3市町のロゴが入ったユニフォームを披露した千葉真希さん（子ども運動教育学科1年）と廣田美憂さん（体育学科1年）

令和4年度海浜実習報告



7月15日（金）～18日（月・海の日）の3泊4日の日程で、山形県鶴岡市・由良海水浴場で海浜実習を実施しました。3年ぶりの同地での実施であることに加え、宿泊を伴う運営となったことから、新型コロナウイルス感染症等対策を含め、様々な配慮を要する状況でしたが、関係各位の手厚いサポートもあり、大きな事故無く終えられたことに感謝申し上げます。

天候についても、初日に現地で実習生が到着した時こそ雨が降っていましたが、午後に講習を始めるころには雨も上がり、その後は終始快晴そのもので、大変恵まれました。晴れ渡る青空の下、実習生たちは各々の泳力に応じて水泳技能向上に努めました。

実習に先駆け、出発前日の7月14日の昼休みに、プール横の浴室棟前にて実習生及び補助学生の抗原検査を実施し、対象者全員の「陰性」を確認しました。

いざ海を目の前にした実習生の表情は、緊張と不安がやや勝りながらも、コロナ禍で各種活動が大幅に制限を受けてきたこの2年間のことを思えば、期待とやる気が入り混じる、そんな複雑な様子でした。従前は、5月から約2カ月半の期間、実技「水泳」でしっかりと練習を積んで海に挑めたところ、コロナ禍以降はプールでの活動時間が大幅に減少しており、実習生の練習量が圧倒的に不足している状況で海に連れて行かなければならないことが、実習主任としては気がかりでしたが、班付きの先生方の細やかな声掛けと指導により、その不安は2日目の午前にして完全に払拭されました。当初の泳力こそ、例年の学生に比べれば未熟



と感じましたが、その分、やる気は十分で、講習回数を重ねるごとに水泳技能が格段に向上する様子に、大変頼もしく感じました。本実習は、いわゆる「バブル方式」で実施したことから、海上での練習はもとより、大学から実習地までのバス移動、民宿・旅館での生活に至るまで、全て班ごとに固定しました。そのことにより、従来通りの全員をひとまとまりとする大遠泳はかないませんでした。反対に、班ごとの「つながり」はより強固なものとなったようで、3日目午前の遠泳本番では、それぞれの班で互いに励まし合う言葉が飛び交い、全ての班が白山島の先の沖へ出て湾の外を泳いで力強く帰ってきました。実習生は、眼前に広がる一面海の景色に感嘆した様子で、ある学生は『マジこの景色感動する！一生に一度のこの景色を目に焼き付けとく！！』と言いながら泳ぐ様子を見て嬉しく思いました。終わってみれば1時間40分、一人の脱落者もなく、全員が遠泳を完泳しました。

3日目午後はもう一つのメインプログラムである着衣泳を実施しました。「堤防で釣りをしていた際に誤って落水した状況」を想定し、実習生は長そで長ズボンを着用して、白山港の灯台から飛び込んで実習本部のテントを目指しました。飛び込む直前に足がすくむ実習生もいましたが、皆覚悟を決めて着衣で落下（ジャンプ）し、岸まで泳いで戻り、その後は、水中脱衣の難しさや着ていた衣服で浮き具を作る体験を通して水辺の安全について考えてもらいました。着衣状態で落水するとどういった感覚が体を襲うのか？泳いで移動することはどれほど困難なのか？もし、泳ぐことが必要となった場合、どのような泳法が適切なのか？体力消耗を抑制し浮いて救助を待つにはどうすれば良いか？など、実習生はそれぞれの状況に応じて水とうまく付き合う方法について学びを深めてくれたことと思います。



高橋仁学長におかれましては、ご多忙中のところ、遠方よりご足労頂き、実習生を激励いただきました。この場を借りて深く感謝申し上げます。また、本実習運営とその実現にご尽力いただきました全ての皆様へ、この場をお借りして厚く御礼申し上げますとともに、引き続きご支援頂けますよう重ねてお願い申し上げます。

< 准教授 渡邊 泰典 >

クリケット研修会兼贈呈式（教職員対象）への参加報告

8月5日（金）亶理町立荒浜中学校で、クリケット研修会兼贈呈式が実施されました。これは、「クリケット競技によるまちづくりの推進に関する協定」に基づく亶理町・日本クリケット協会・本学の連携による取り組みの一環です（詳細は本学紀要vol. 53, NO. 2:99-112, 2022参照）。

当日は、日本クリケット協会・ジュニア普及コーディネーターの宮地直実氏が講師となり、本学クリケット部の女子部員及びコーチ4名（日本代表候補選手）がアシスタントとして参加し、筆者も部長として参加しました。贈呈式では、亶理町奥野教育長・宮地氏・筆者が参列し、日本クリケット協会から亶理町内全ての小・中学校にクリケット用具が贈呈されました。贈呈された用具はジュニア育成に用いられているクリケット用具の簡易版であり、入門用として活用されているものです。

クリケット研修会には各小・中学校の体育教員20名並びに奥野教育長、生涯学習課職員が参加しました。前半はクリケットを知るためのミニレクチャーが教室で実施され、後半は体育館で実技研修が行われました。参加者はクリケットの魅力や面白さを非常に感じた様子で、実技では皆が汗だくになりながらプレーし大変盛り上がった研修会となりました。今後も同様の研修会等を開催していき、亶理町の活性化、クリケットの普及に寄与できれば幸いです。

<教授 仲野 隆士>



教室でのクリケットレクチャー



モデルを務めた岩崎さん（体育3年）



全小・中学校に贈呈された用具



贈呈式での記念撮影



簡易ゲームのルール説明場面



サポートした部員4名

「日本文化体験～会津～」を開催！



7月30日（土）に学生支援センターが主催する留学生を対象とした日本文化体験を福島県で行いました。

日本文化体験は、留学生が日本の文化に触れる機会を作るとともに、留学生同士の親睦を深めることを目的として開催しており、今回は留学生7名の参加がありました。

白虎隊の学び舎であった会津藩校 日新館では、会津地方の民芸品である赤ペコの絵付けを体験し、会津のシンボルとなっている鶴ヶ城では様々な歴史資料や天守閣等を見学して、歴史と文化に触れてもらいました。また、福島県の名産品である旬の桃狩りを体験し、全員でもぎたての桃に舌鼓を打ちました。留学生たちは、真剣に日本の歴史や文化を楽しみながら学んでいました。

コロナ禍で外出する機会も少なかったため、留学生からは「日本の歴史や文化を知ることができた」、「地元のお食べ物を食べることができて、とても楽しい一日でした」などの声が聞かれました。

学生支援センターでは、今後も感染防止対策をしっかりとったうえで、留学生に日本の文化に触れてもらう機会を創出していく予定です。

<学生支援センター>

スポーツ情報マスメディア学科Podcast「メディアでアソバナイト」



「メディアでアソバナイト」

令和4年6月3日からスタートした、スポーツ情報サポート研究会に所属する学生によるPodcast配信が8月19日に第13回目を迎えました。メインパーソナリティを務めるのは、スポーツ情報マスメディア学科2年の渡辺大地さんです。

研究会に所属する学生と学生生活に関するトークをしたり、アナリストとして部活動に所属している先輩にお話を伺ったりして、学内外のスポーツに関する旬な話題をお届けしています。ごこちない中にも熱量たっぷりの放送を毎週金曜日にお届けしていますので、Podcast配信「メディアでアソバナイト」をぜひ一度お聴きください。

<スポーツ情報サポート研究会>



「メディアでアソバナイト」メインパーソナリティの渡辺大地さん

岩澤、跳馬の王者へ／体操インカレ／団体、女子6位へ躍進 男子悔しい7位

体操の全日本学生選手権大会2022が8月19～22日、三重県の四日市総合体育館で行われ、本学は女子が1部団体総合で6位に躍進、一方、男子は同種目7位の成績でした。個人は男子種目別の跳馬で岩澤将英（体育3年）が見事頂点に立ちました。「跳馬のスペシャリスト」の誕生です。

本学体操陣は全国の強豪校がひしめく1部団体で戦っています。今大会、女子チームのメンバーは躍動あふれる演技で気を吐き総合点237.658を獲得。前回8位という順位を一気に二つ押し上げました。ここ数年は低迷気味だっただけに、今後につながる奮闘です。

これに対し男子はやや精彩を欠きました。3大会前3位、前々回・前回とも5位という実績からすると今回の7位は決して満足ゆくものではありません。ただ、総合点392.725は5位大阪体育大学の得点と比べると差がわずか0.499。鈴木良太監督は「悔しい。どうしてこういう結果になったのか、課題を洗い出したい」と反省を踏まえ、「次回に向け部員一丸となって巻き返す」と語りました。

跳馬を制した岩澤は得点15.066と、ただ一人15点台をマーク。「ロペス」と呼ばれる後方伸身2回宙返り3回ひねりの大技で着地もピタリと決めました。会心の演技について「めちゃめちゃ気持ちよかった。大会2週間前には左肩を痛めて思うような練習ができなかったが、最後の最後でチームのために何とか力になれた」と振り返りました。

このほかの上位成績は次の通り。名前の後の数字は演技得点。

【男子】

▷個人総合 ⑧吉田求（体育1年）81.366▷種目別あん馬 ⑥吉田13.900⑦佐々木郁哉（体育2年）13.800▷跳馬 ③佐々木14.900▷鉄棒 ⑧吉田13.633

<体操競技部>



仙台大学のインカレ出場メンバー。右上から時計回りに女子団体・個人、男子個人、女子個人、男子団体・個人

「高校スポーツの安全を守る」 Vol. 52

助手 今野 桜

仙台大学附属明成高校では、7月下旬から約1ヶ月間の夏休みがありました。今年の夏は早い梅雨明けから始まり、その後雨の日が多くなりました。8月に入ってから気温が上がり、湿度も高い日が多くなりました。高い気温に湿度がプラスされると発汗による体温調節が難しくなるので、どうしても熱中症になる人が増えてしまいます。川平ATルームでも、毎年熱中症による体調不良者の対応をしています。今年も数名の熱中症対応を行いました。

私たちは、本格的に暑くなり熱中症の危険度が増す前に、特定研究指定部活動を対象に熱中症講習会を行っています。そのため、講習会を受けた生徒達は基礎的な知識は備わっているのですが、全ての部活動で熱中症対策を完璧には実施できていないのが現状です。あらかじめ体を冷やすための氷を用意しておく、水分や休息時間の確保、外であれば日陰で風通しの良い休憩場所の確保、帽子を被る、など熱中症を予防するためにできる事は沢山あります。チーム全体で取り組むこともあれば、日頃の体調や栄養の管理、服装に注意するなど個人で心がけてできる事もあります。私たちが対応した熱中症のケースで多いのが、朝食をとっていなかったり、長時間直射日光に当たりながら運動をしていたり、といったケースです。熱中症は予防すれば防げるものです。講習会や日頃の声掛けなどで、少しずつ熱中症の件数や重症度にも改善が見られているように感じます。9～10月にかけてそれぞれの部活動で大会を控えているので、生徒一人一人がベストなコンディションで大会に臨めるようにスタッフ一同協力してサポートしていきたいと思っています。



明仙フィールドのWBGT測定後、結果を記入しています

～仙台大学教職員の共通理解事項～

仙台大学の「建学の精神」、「基本理念」、「使命・目的」

建学の精神

「実学と創意工夫」

仙台大学の経営母体である学校法人朴沢学園(明治12年開設)の学園創始者は、建学の精神として「実学と創意工夫」を掲げ、「創意工夫と先見性をもって実学を志し、実学に根ざした人格形成と人材育成を図る」ことをもって先進的な女子教育を行い、寺子屋方式に代え一斉教授法を導入し明治時代の裁縫教育に一大革新をもたらした。

その考え方は、体育系単科大学として昭和42年に開学した本学にも受け継がれ、人格形成の要素である体育・徳育・知育のうち「体育」に教育・研究の重点を置きつつ、実学と創意工夫に根差した広い教育研究領域を探索することに継承されてきた。なお、建学の精神の意図するところについては、開学時の第1回入学式・初代学長告辞にも「社会で充分活動できるための智識と技能を鍛えた心身ともに健康である人間をつくること」であり、仙台大学は、企業等における健康管理・健康指導の企画・実施担当者の育成、各種の運動機構等における実技指導者、ならびに学校体育の指導者を養成することを目的としております」と端的かつ明確に示されている。

基本理念

「スポーツ・フォア・オール」

仙台大学は、昭和42年、単一学部・単一学科で開学した。その後、平成7年度以降、順次学科を増設し、現在では6学科構成としている。また、学科増設に加え平成10年度には大学院スポーツ科学研究科(修士課程)も新設している。こうした教育研究領域の拡大に伴い建学の精神を基盤に据えつつ、大学の新たな基本理念として定めたのが「スポーツ・フォア・オール」である。

「スポーツ・フォア・オール」とは文字通り「スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に」を、すなわち「乳幼児から元気なお年寄りはもちろん、寝たきりのお年寄りまで。そして、性別や障がいの有無を問わず、トップアスリート、生活の中での楽しみや健康の励みとしてスポーツをする人、スポーツをみる人が好きな人、スポーツをささえる人などすべての人を対象としてスポーツを科学的に探究すること」を意味している。

使命・目的

基本理念を踏まえた仙台大学の使命・目的は、仙台大学学則第2条および仙台大学大学院学則第2条にそれぞれ示している。

■仙台大学学則 第2条

本学は、体育・スポーツ、健康福祉、スポーツ栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する諸科学を教授研究し、当該分野における指導者としての専門的知識と技能を体得させるとともに、高い識見と広い視野とをもって、社会の指導的な役割を果し得る有能な人材を育成することを目的とする。

■仙台大学大学院学則 第2条

本大学院は、広い視野に立って、体育・スポーツ、健康福祉、運動栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する学術の理論と応用を教授研究し、当該分野における高度の専門的な職業等を担うための卓越した能力を培い、もって体育・スポーツ及び健康分野の発展に寄与する有為な人材を育成することにより、広く社会に貢献することを教育研究上の目的とする。

その他 (リンクを貼っていますので、項目をクリックして閲覧ください)

■人材の養成に関する目的その他教育研究上の目的(仙台大学学則別表第一)

■3つのポリシー ①学部 ②大学院

③体育学科 ④健康福祉学科 ⑤スポーツ栄養学科

⑥スポーツ情報マスメディア学科 ⑦現代武道学科 ⑧子ども運動教育学科

■朴沢学園中期経営計画

■事業計画

Monthly Report

2022模擬授業ワークショップ「せんだい実習」を開催



集合写真

9月10日、11日の2日間にわたり、2年目となる模擬授業ワークショップ「せんだい実習」を宮城教育大学とともに開催いたしました。この実習は、両大学の保健体育科教諭を目指す学生を対象に、授業研究を通して授業づくりに求められる実践的な力を育むことを目指して実施したものです。今年は本学の震災復興記念プールを会場にして、本学からは教職を目指す学生で構成する「チーム教授」の学生20名と本学ならびに宮城教育大学の教職員5名、さらには県内外より公立小中学校の現職教員4名（仙台市小学校、大河原町小学校、福島県白河市小学校、山形県酒田市中学校）が参加し、熱心に声かけをしていただきました。

今年度の内容としては、着衣のまま水に落ちた場合の対処の仕方について安全への理解を一層深めるために「水泳」（自己保全能力）をテーマとした模擬授業を学生が実施し、模擬授業後には検討会を設け、授業の成果と課題について互いの学生・教職員と共に分析検討を行い、さらには指導助言として学習指導要領作成にも携わられている山形県立上山明新館高等学校の佐藤教頭先生より講話をいただくなど、たいへん有意義な学びへの繋がりとりました。

この取り組みは、宮城県ならびに東北地区の体育科教育を担える教員の育成に向けて継続していくこととしています。

<教職支援課>



実習中の様子

<目次>

・2022模擬授業ワークショップ「せんだい実習」を開催	1
・「仙台大学DX人材育成プログラム」修了式 ・令和4年度9月期 仙台大学「卒業証書・学位記」授与式を挙行 ・青森県と就職支援に関する協定を締結しました	2
・柴田町運動・スポーツ習慣化促進事業「シン・町ジム」を開始しました ・桐蔭横浜大学とスポーツ情報サポート研究会による交流会を開催！	3
・3年振りに本学を会場に令和4年度体育科・保健体育科研修会を実施 ・丸森ひまわりこども園、保育研究大会で優秀発表施設に選出	4
・令和4年度仙台大学同窓会根室・釧路支部総会を対面開催 ・仙台大学大学院の紹介動画を制作しました	5
・アスリート必見！アメリカの大学ってどんなところ？Part. 2	6
・大会結果／JOCジュニアオリンピックカップ 全日本ジュニア柔道体重別選手権大会 52kg級で中島幸徳が3位入賞 ・柔道部／東京五輪女子52kg級金メダルの阿部詩選手が本学で合宿	7
・仙台大学が天皇杯ファイナルラウンドへの切符を掴む	8
・「高校スポーツの安全を守る」Vol.53	9

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報課までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報課までご一報ください。

仙台大学 広報課

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

「仙台大学DX人材育成プログラム」修了式

9月15日(木)に「仙台大学DX人材育成プログラム」の修了式がオンライン形式で執り行われました。このプログラムは、8月に文部科学省が推し進める「数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル)」として認可されたものです。

式では高橋学長から、「国がデジタル人材を養成する背景には、社会が既にそうになっているからであり、本学もその流れに乗って、先ずはリテラシーレベルを整備したところです。今回の皆さんの成果を知識に変えて、更に学びを深めてほしい」と激励の言葉が送られ、学生たちは今後の社会生活におけるデータサイエンスの重要性を再認識していました。

修了証の授与は、プログラムに因んで、本学では初の試みとなるデータ配布で実施され、学生236名に対して各々の修了証(PDF)が一斉メールで渡されました。



令和4年度9月期 仙台大学「卒業証書・学位記」授与式を挙行

9月26日(月) 本学A棟2階大会議室で令和4年度9月期 仙台大学「卒業証書・学位記」授与式を挙行し、体育学部2名(体育学科1名、スポーツ栄養学科1名)及びダブルディグリー制1名、並びに大学院1名の4名が新たな一歩を踏み出しました。

高橋仁学長からは「これから思い通りにならないことも待ち受けていると思いますが、それは誰にでもあることで、それを乗り越え、社会人として成長して下さい」とのはなむけの言葉が送られました。

また、ボブスレー競技において国際大会に日本代表として出場し、活躍したことにより学長賞を受賞した金子慶輝さん(大学院・スポーツ科学2年)は「大学3年からボブスレー競技を始め、多くの方々に支えられて北京五輪を目指してきたことは貴重な経験となりました」と感謝の言葉を述べました。



青森県と就職支援に関する協定を締結しました

9月21日(水) 青森県庁で青森県と就職支援に関する協定を結びました。

この協定は本学の青森出身の学生及びその保護者に対して、青森県内の企業情報や奨学金の返還支援制度に関する情報を提供し、地元就職の促進を図ることを目的としています。

高橋仁学長は「青森で頑張りたいという学生も多いので、学生の希望に応えるような就職支援情報をしっかりと発信していきたい」と述べました。



協定書に署名した三村申吾青森県知事(左)と高橋仁学長

柴田町運動・スポーツ習慣化促進事業「シン・町ジム」を開始しました



9月4日（日）より本学トレーニングセンターで柴田町運動・スポーツ習慣化促進事業「シン・町ジム」を開始いたしました。「シン・町ジム」は2019年に開催された「健康タウンしばたプロジェクト+2019」を引き継ぎ、柴田町より委託を受けた事業になります。

本事業は“あなたの町ジム”をモットーに柴田町民及び在勤の方々へトレーニングセンターを開放し、運動を始めるきっかけづくりや運動の継続を促します。今年度は対象年齢を30歳から概ね60歳までとし、これまでスポーツに馴染みのなかったビジネスパーソンの方々を中心にご参加いただいております。期間は9月4日から12月11日までの期間で、計8回の開催です。

9月4日と9月11日の学生によるきつねダンスのプログラムでは、参加者と学生が一緒になって踊り、その後の筋力トレーニング教室やストレッチポール教室などでも、多くの笑顔が見られ、終始和気あいあいとした雰囲気のなか皆で汗を流しました。

3回目以降も町民の方々へ運動の楽しさを伝え、ひとりでも多くの方に運動を続けていただけるよう各種プログラムを実施いたします。

<スポーツ健康科学研究実践機構>

桐蔭横浜大学とスポーツ情報サポート研究会による交流会を開催！



8月31日（水）に本学のスポーツ情報サポート研究会に所属している学生と、桐蔭横浜大学のスポーツ情報戦略を学んでいる学生同士でオンライン交流会を行いました。今回の交流会は、①大学・学年・競技の枠を超えて交流を図る、②多様なものの見方と考え方に触れる、③専門外の競技分析を通して視野を広げることを目的として行いました。

はじめはお互い緊張の面持ちで自己紹介をしていましたが、分析ソフト「SPLYZA Teams」を活用した、メインのグループワークで卓球の分析に取り組む中では、活発にディスカッションをする姿が見受けられました。

交流会終了後のアンケートには、「最初は全く話せずに終わってしまうと考えていたが、想像以上に様々な話のできたのでとてもいい経験になった。」という感想や、「さらに深いところまでお互いを知り、活動を共有できたら面白いと思う。」といった感想を書いていました。

今回の交流会は、昨年度まで本学科の教員として在籍されていた溝上先生（現在は桐蔭横浜大学の教員として勤務）との繋がりで実現しました。今後も継続的に交流を行い、お互いの学びの深化に繋げていければと考えています。

<スポーツ情報サポート研究会>

3年振りに本学を会場に令和4年度体育科・保健体育科研修会を実施



9月15日、21日の2日間にわたり、宮城県教育委員会主催の「令和4年度体育科・保健体育科研修会(小学校)(中・高等学校)」が本学を会場として3年振りに行われました。

県内の小中学校、高校の若手や中堅の教員57人に本学の学生が(15日:13人、21日:18人)加わり、グループに分かれて意見を交換しました。

この研修会の狙いは、本学の先生方から最新の指導法と知識を学ぶこと、同じ体育を指導する立場として授業づくりについての情報交換をすること、ICT機器活用の視点を取り入れた授業づくりを演習することを通して、受講者一人一人の専門性を高めるとともに、授業力の向上にあります。また、学生は現職教員との協働活動や話し合いを通して、具体的な教師像を感じることができ、キャリア形成の場として活用しました。

今年度の内容は、15日に宮崎利勝准教授による「小中高の系統性を踏まえた授業づくり～陸上競技(跳躍の運動)の授業づくり～」。小学校を対象に高崎義輝教授、郡山孝幸教授、入澤裕樹准教授による「児童の運動意欲が高まる指導法～体づくり運動「スポーツテンカ」を通じて～」。中高を対象に川戸湧也講師による「生徒の運動意欲が高まる指導法・教材の工夫～武道～」。

21日に石丸出穂准教授の「小中高の系統性を踏まえた授業づくり～球技(ネット型)の授業づくり～」。

そして講義・演習で学んだ内容も踏まえて、学習指導案の作成が行われました。

今回の研修会に参加した学生は教員が努力する姿を見てモチベーションを更に高め、指導案作り等の指導を受けるなどして教職への理解を深めました。

<教職支援課>



丸森ひまわりこども園、保育研究大会で優秀発表施設に選出

本学では地域連携事業の一環として、丸森町社会福祉協議会 丸森たんぽぽ・ひまわりこども園を対象に幼児の体力向上事業を行っており、子ども運動教育学科の原田健次教授による園児・教職員を対象とした運動あそび指導や園児の生活リズム調査アンケート等、例年継続して支援を実施しています。

そしてこのたび、令和4年度宮城県保育研究大会及び北海道・東北ブロック選考会において、丸森ひまわりこども園『笑顔と歓声にあふれ、いきいきと遊ぶ子ども～健康な心と体を家庭とともに育てる「ちゃれんじかど」の試み～』が優秀発表に選出され、全国保育研究大会に出場することとなりました。

保育研究大会は、全国保育協議会の主催で開催されており、現在の保育をめぐる情勢をふまえ、保育施設の社会的な意義・役割について認識を深め、多様なテーマでの効果的な実践研究を共有し、学び合うことにより、今後の保育の資質向上を目指すことが目的です。

今年度の全国大会は10月20日に山形県で開かれ(オンライン)、出場の24施設中、北海道・東北ブロックからは3施設のみの出場となります。その3施設のなかに、丸森ひまわりこども園が選ばれました。



令和4年度仙台大学同窓会根室・釧路支部総会を対面開催

本年度の仙台大学同窓会根室・釧路支部総会は、9月11日（日）に北海道標津町海の公園「標津番屋」を会場に対面にて開催されました。総会には、小島淑子同窓会会長、大学より朴澤泰治理事長、高橋仁学長、そして子ども運動教育学科の北海道標津町研修で学生を同町に受け入れていただいている御縁から、久能和夫教授と柴田も出席しました。

総会の冒頭で「同窓生の強い絆を感じる」と朴澤理事長が挨拶すると、高橋学長も「大学としても北海道との絆をより強くしたいと思い、この地に来ました」と熱い思いを同窓生の皆さんにお話になり、小島会長からは、「同窓会の活性化を目指し、皆さまと手を取り合って、その一歩を踏み出したい」と希望に満ちた御言葉が述べられました。久しぶりの対面での開催に参加者の皆さんの語りも熱く、「絆の強まり」をひしひしと感じるひと時でした。

コロナ禍の中、最善の方法を見出して対面での実施を実現してくださった支部の皆様、ありがとうございました。そして、在学生の学外研修の受け入れや教員の研究支援にも、惜しみない愛情を注ぎ続けてくださる標津町の林良彦様（8期生）に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。
＜子ども運動教育学科 教授 柴田千賀子＞



集合写真



お誕生日が近い理事長へ御祝いの一コマ

仙台大学大学院の紹介動画を制作しました

このたび仙台大学大学院の紹介動画が完成し、本学YouTube公式チャンネルで公開中です。

本大学院スポーツ科学研究科は、体育・スポーツや健康分野で活躍できる専門的指導者の育成を目指し、2年コース9領域（スポーツコーチング、トレーナー、スポーツマネジメント、健康福祉、運動・スポーツ栄養学、スポーツ情報・マスメディア、現代武道、子ども運動教育、保健体育科教育）と、社会人向けの1年コース3領域（学校体育、スポーツプロモーション、健康体力支援）から構成されています。

今回の動画では、2年コース、1年コースで学ぶ現役生と修了生のインタビューを中心に、本大学院の特色や学びについてご紹介していますのでぜひご覧ください。

＜大学院事務課＞



アスリート必見！アメリカの大学ってどんなところ？Part. 2

本学トレーニングセンターのアシスタント・ストレンクス&コンディショニング（以下S&C）コーチの星谷勇佑です。今回は、私が研修に来ているノースダコタ州立大学（以下NDSU）のスポーツを取り巻く環境について紹介したいと思います。アメリカでは大学スポーツが日本のプロスポーツと同じくらい盛り上がっています。それに伴ってスポーツ施設やスタッフも充実しています。そんなアメリカの大学ならではのスタジアムとS&Cコーチという専門職について紹介していきます。

Baseball Stadium（画像1）

最大収容人数は4,419人、総工費は約6億円。バックスクリーンは電光掲示板で、LEDモニターからは選手の映像が映し出されます。また、バックネット裏にはファストフードやアイスなど色々な売店が並んでいます。夏の期間は地元のプロチーム（日本でいう独立リーグ）もこのスタジアムで試合を行い、週末になると大勢の地元ファンが押し寄せとても盛り上がります！

Football Stadium（画像2）

最大収容人数25,000人。総工費50億円。建物と駐車場を含めた総面積は東京ドーム約4個分です。ノースダコタ州は積雪量が多いためこのスタジアムはドーム式になっており、グラウンドは人工芝になっています。NDSUのアメリカンフットボール部は全米TOPレベルの強さを誇り、その試合を見るために多くのファンが訪れ、毎年10万人以上の来場者数を記録しています。また、人工芝は全面取り外し可能なのでオフシーズンには著名なミュージシャンが訪れコンサートも行っています。

S&Cコーチ（画像3）

設備の充実はとても大事ですが、そこに携わるスタッフがいなければ成り立ちません。

今回、私の研修先となったのは、全ての部活動のトレーニング指導（主にウェイトトレーニング）を行い、厳しいシーズンを戦い抜くための身体づくりをサポートするS&C部門です。指導を仰いだNDSUのS&Cコーチは、MLBやNFLといったプロリーグに何人もの選手を送り出してきた経歴を持つプロフェッショナルでした。こうしたスタッフの指導のもと、学生アスリートは日々成長していています！



1. Baseball Stadium



2. Football Stadium



3. S&Cコーチら

仙台大学では複数の海外の大学と提携をしているので、在学時にはアメリカに限らず様々な国へ研修・短期留学に行き、多くの学びを得ることができます。また、今回の私がそうでしたが、仙台大学では卒業生に向けた先進的な育成制度も設置しており、海外研修や本学の多数の部活動に対する指導を通してS&Cコーチとして更なるレベルアップをはかることで、その後のキャリアに繋げることができます。今回のレポートで興味を持ってくださった皆さんはぜひ一度仙台大学にいらしてください！

<新助手 星谷勇佑>

大会結果／JOCジュニアオリンピックカップ 全日本ジュニア柔道体重別選手権大会 52kg級で中島幸穂が3位入賞



左から銅メダルを獲得した中島幸穂（現代武道学科2年）と南條和恵監督



表彰式の様子

JOCジュニアオリンピックカップ全日本ジュニア柔道体重別選手権大会が9月10日、11日に埼玉県武道館で開催されました。

本大会は各地区の予選を勝ち上がった20歳以下、各階級（7階級）19名で杯を争う大会です。

本学からは男子2名、女子4名が東北地区代表として出場しました。

その中で、52kg級に出場した中島幸穂（現代武道2年）は3回戦で第一シードの選手に一本勝ちを収めて準決勝に進出しました。準決勝戦では、お互いがポイントを取り合う試合内容でしたが、あと一步の差で敗退をしました。気持ちを入れ替えて臨んだ3位決定戦では、優勢勝ちを収め、見事銅メダルを獲得しました。

高校生時代の最高成績が千葉県大会2位の彼女が、全日本の扉を開いた瞬間でした。

<柔道部>

柔道部／ 東京五輪女子52kg級金メダルの阿部詩選手が本学で合宿



集合写真



阿部選手との乱取

東京五輪の柔道競技女子52kg級で金メダルを獲得した阿部詩（日体大4年）選手が、10月6日から開催される世界柔道選手権大会（ウズベキスタン・タシケント）に向けた最終の調整合宿として9月20日から23日の間、本学柔道部の稽古に参加しました。

期間中は他の所属選手の参加もあり、柔道部員においては 一週間後に控える全日本学生体重別選手権大会（日本武道館）に向けて大きな刺激をいただきました。

また、高橋学長には、阿部選手への激励を兼ねて道場へご登場いただき、熱の入った阿部選手の稽古を見学していただきました。

世界選手権大会での阿部選手の健闘を祈るとともに、我々も全日本大会への準備に入りたいと思います。

<柔道部>

仙台大学が天皇杯ファイナルラウンドへの切符を掴む



優勝を果たした仙台大学

令和4年度天皇杯東北ブロックラウンドが9月10・11日(日)に福島トヨタクラウンアリーナで開催されました。この大会は全10チームによるトーナメント方式で行われ、本学から春のリーグ戦で優勝し、推薦枠を獲得した「仙台大学」と県予選を突破した「仙台大クラブ」の2チームが出場しました。共に初戦を勝利し、準決勝では本学同士が対戦しました。フルセットまでもつれる好ゲームになりましたが、仙台大学が勝利しました。

仙台大学は続く決勝でも、勢いそのままに山形選抜に勝利し、12月に開催される天皇杯ファイナルラウンドの切符を掴みました。

結果は以下の通り

初戦

仙台大学 2 (25 - 18、28 - 26) 0 福島

仙台大クラブ 2 (23 - 25、25 - 23、25-20) 1 チーム一庵

準決勝

仙台大学 2 (25 - 15、19 - 25、25 - 14) 1 仙台大クラブ

決勝

仙台大学 2 (33 - 31、13-25、25-21) 1 山形選抜

<男子バレーボール部>

「高校スポーツの安全を守る」Vol. 53

助手 浅野 勝成

トレーニングで身体に負荷をかけることを続けていくと身体はその負荷に適応します。一方で、軽くこなせる負荷でトレーニングをしていると狙った適応を引き起こせません。そのため、自分がこなせる負荷よりも少し高い負荷で行うことで、狙いとする体力要素の適応を誘発できます。これを過負荷の原理と言います。そして過負荷の原理に基づいてトレーニングを続けていくと、身体はその過負荷に適応します。それが筋力などの体力要素の向上となります。一方で、同じ負荷でトレーニングを延々と続けていけば、体力の更なる向上は期待できません。そのため、適応の段階を見極めて負荷を徐々に上げていく必要があります。これを漸進性の原則と言います。これら二つをまとめて漸進性過負荷の原則とも言います。シンプルに言うと、少しずつ負荷を上げていって身体の適応を引き起こしていくということで、この原則を軸にトレーニング計画を考えます。

漸進性過負荷の原則を軸にしたトレーニングを行うのは、選手からするとチャレンジングです。チャレンジングであるがゆえに、不安に駆られる者もいます。例えば、求められる拳上重量が5kg増えると、“この重さは無理だよ・・・”というような雰囲気を出す者が出てきます。そういった状況下で選手に言うことはいつも同じで、“無理と思うから無理であって出来ると思えば出来る”や“その重さを軽いと思えば出来る”などを言います（もちろん、フォームを見て明らかに危ない場合は下げますし、重量アップの指示も出しません）。それでいざチャレンジしてみると、実際に出来て選手自身も驚きます。このように、チャレンジを後押しすることと成功体験を積ませることも大事にして、身体的・精神的な成長もサポートするよう指導にあたります。

特異性の原理というものもトレーニングを行ううえで抑えておきたい原理です。これは、狙った適応を求めるなら、それに応じたトレーニングを行う必要があることを意味します。しかし、この特異性の原理は間違った解釈でトレーニングをされている場合もあります。間違った解釈とは、キネマティクスだけを見て、キネティクスを見ていない場合に多いです。キネマティクスは「ヒトの動作をみるもの」で角度や速度などをみるもの、キネティクスは「ヒトの動作を生み出すための原因をみるもの」で力発揮をみるものとなります。つまり、キネマティクスを変えるには、その原因となるキネティクスを変える必要があります。このことから、競技動作に負荷を与えて鍛えるというキネマティクスだけで判断したトレーニングは特異性の原理に基づいてないです。例として、やり方次第ですが、加速力を高めたいからゴムチューブで引っ張って走るなどです。その動作の質を高めるにはキネティクス、つまりは力発揮を高める必要があります。そして力発揮を高めるには、正しいフォームと負荷（漸進性過負荷の原則に基づく負荷）で構成されるウエイトトレーニングを行う事でケガなく効果的に達成できます。

この特異性の原理を生徒に理解してもらうのは結構難しいですが、理解できるとトレーニングを行う意味が深く分かるようになり、結果として取り組み方も良い方向に変化します。トレーニング指導において、チャレンジを後押しするだけでなく理論的なことも理解できるようサポートしていくことも大切にしていますが、まだまだ力不足な所が多いため、今後も研鑽を積んでいきたいと思えます。

～仙台大学教職員の共通理解事項～

仙台大学の「建学の精神」、「基本理念」、「使命・目的」

建学の精神

「実学と創意工夫」

仙台大学の経営母体である学校法人朴沢学園(明治12年開設)の学園創始者は、建学の精神として「実学と創意工夫」を掲げ、「創意工夫と先見性をもって実学を志し、実学に根ざした人格形成と人材育成を図る」ことをもって先進的な女子教育を行い、寺子屋方式に代え一斉教授法を導入し明治時代の裁縫教育に一大革新をもたらした。

その考え方は、体育系単科大学として昭和42年に開学した本学にも受け継がれ、人格形成の要素である体育・徳育・知育のうち「体育」に教育・研究の重点を置きつつ、実学と創意工夫に根差した広い教育研究領域を探索することに継承されてきた。なお、建学の精神の意図するところについては、開学時の第1回入学式・初代学長告辞にも「社会で充分活動できるための智識と技能を鍛えた心身ともに健康である人間をつくること」であり、仙台大学は、企業等における健康管理・健康指導の企画・実施担当者の育成、各種の運動機構等における実技指導者、ならびに学校体育の指導者を養成することを目的としております」と端的かつ明確に示されている。

基本理念

「スポーツ・フォア・オール」

仙台大学は、昭和42年、単一学部・単一学科で開学した。その後、平成7年度以降、順次学科を増設し、現在では6学科構成としている。また、学科増設に加え平成10年度には大学院スポーツ科学研究科(修士課程)も新設している。こうした教育研究領域の拡大に伴い建学の精神を基盤に据えつつ、大学の新たな基本理念として定めたのが「スポーツ・フォア・オール」である。

「スポーツ・フォア・オール」とは文字通り「スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に」を、すなわち「乳幼児から元気なお年寄りはもちろん、寝たきりのお年寄りまで。そして、性別や障がいの有無を問わず、トップアスリート、生活の中での楽しみや健康の励みとしてスポーツをする人、スポーツをみる人が好きな人、スポーツをささえる人などすべての人を対象としてスポーツを科学的に探究すること」を意味している。

使命・目的

基本理念を踏まえた仙台大学の使命・目的は、仙台大学学則第2条および仙台大学大学院学則第2条にそれぞれ示している。

■仙台大学学則 第2条

本学は、体育・スポーツ、健康福祉、スポーツ栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する諸科学を教授研究し、当該分野における指導者としての専門的知識と技能を体得させるとともに、高い識見と広い視野とをもって、社会の指導的な役割を果し得る有能な人材を育成することを目的とする。

■仙台大学大学院学則 第2条

本大学院は、広い視野に立って、体育・スポーツ、健康福祉、運動栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する学術の理論と応用を教授研究し、当該分野における高度の専門的な職業等を担うための卓越した能力を培い、もって体育・スポーツ及び健康分野の発展に寄与する有為な人材を育成することにより、広く社会に貢献することを教育研究上の目的とする。

その他 (リンクを貼っていますので、項目をクリックして閲覧ください)

■人材の養成に関する目的その他教育研究上の目的(仙台大学学則別表第一)

■3つのポリシー ①学部 ②大学院

③体育学科 ④健康福祉学科 ⑤スポーツ栄養学科

⑥スポーツ情報マスメディア学科 ⑦現代武道学科 ⑧子ども運動教育学科

■朴沢学園中期経営計画

■事業計画

Monthly Report

2年ぶりに東北こども博を開催 ～スポーツと音楽で子どもたちを笑顔に～



当日の様子

10月8日（土）本学を会場に「2022東北こども博」を開催しました。

このイベントは東日本大震災に対する復興の一環として2011年10月から「子供も大人も、全ての人々に笑顔をもたらすようなイベントを創り上げること」を合言葉に開催し、今年で10回目（2019年は台風の影響で中止、2021年は新型コロナの影響で中止）を迎えます。

コロナ禍以前は、2日間で約2万人弱が参加するイベントでしたが、今年は人数を1,200名程度に制限し、事前申込制としました。

各施設ではストライダーやニュースポーツ、リズムダンス、レクリエーション等の様々な体験コーナーや仙南&富谷市&本学マーチングバンド部による合同演奏会を実施し、来場者約1,200名が笑顔で楽しみました。

来場者からは「触れたことがない、スポーツも楽しむことができ、学生の皆さんも優しい方ばかりで、とても楽しい時間が過ごせました。また来年も来たい」、「親子遊びと働く車の子ども免許証制作・警察車両乗車が楽しかった」、「コロナ禍で、お祭りなどに行けてなかったのでこのようなイベントに参加できて楽しかった」など、多くの感想を頂きました。

次年度は、新型コロナが収束して、通常規模で開催できることを願うばかりです。



目次

・2年ぶりに東北こども博を開催 ～スポーツと音楽で子どもたちを笑顔に～	1
・韓国国立体育大学校総長ご来訪 ～令和4年度仙台大学名誉特別功労教授授与式を挙行～	2
・NZカンタベリー大学国際交流課職員ジェームズ・ワグホーン氏来訪 ・教員を目指す学生を対象に「教探塾」をスタート	3
・「日本水泳・水中運動学会2022年次大会」で渡邉泰典准教授らの研究チームが研究奨励賞を受賞 ・令和4年度 学位論文予備審査会の開催について	4
・体も心も軽くなる！ヨガ体験授業 ・もっと歩きたい！ノルディックウォーキング体験	5
・2022年度全日本学生柔道体重別選手権大会 女子52kg級で中島幸穂が3位入賞 ・2年ぶりに日本選手権東北ステージ優勝／男子ハンドボール部 ・16年連続リーグ優勝！21大会連続インカレ出場／男子サッカー部	6
・秋リーグ全勝優勝飾る／男子バレーボール部 ・2年ぶりのリーグ戦優勝を報告／硬式野球部 ・高木環さん（スポーツ栄養1年）が女子駅伝ブロック発足後、初の全国大会へ	7
・「高校スポーツの安全を守る」Vol. 54	8

学生の活躍や、取り組みなどを
ご存知でしたら広報課までお寄せ
ください。

Monthly Reportで紹介する他、
報道機関にも旬な話題を提供して
参ります。

本誌へのご意見・ご質問等が
ありましたら広報課までご一報く
ださい。

仙台大学 広報課

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

韓国国立体育大学校総長ご来訪 ～令和4年度仙台大学名誉特別功勞教授授与式を挙⾏～



左から高橋学長、朴澤理事⒓、安総長、陸教授、尹教授

9月28日（水）、LC棟で韓国国立体育大学校の安 容奎（アン ヨンギュ）総長への仙台大学名誉特別功勞教授授与式を挙⾏しました。

韓国国立体育大学は1977（昭和52）年設立の韓国唯一の体育大学で、エリート選手及び多くの優秀なスポーツ指導者を輩出している大学です。本学とは2008年に国際交流協定を締結し、これまで学生の短期留学、女子柔道部と合同合宿、本学50周年記念行事への教員及び学生の招へい等、両学の交流を深めてきました。

今回の授与式には韓国国立体育大学校より安 容奎（アン ヨンギュ）総長、陸 調永（ユク ジョヨン）教授、尹昌善（ユン チャンソン）教授が来訪。はじめに朴澤泰治理事⒓が「仙台大学の大きな財産である貴大学との交流を実現できたのは、安総長のご尽力のお陰であり、今後も両大学の交流がますます拡大・発展していくことを祈念いたします」と感謝の意を表し、安総長は「本日から私は名誉教授として仙台大学の家族となります。両校が世界を引⌒張る最高の大学になれますよう、精一杯努力して参ります」と挨拶しました。

式終了後は、現代武道学科の学生など約50名に、安総長による「韓国の体育環境と韓国体育大学の役割について」、陸教授による「Body Action Therapy」の講演が行われました。

また、当日の午後、アスレティックトレーニングルーム、剣道場、柔道場及び体操場などの施設見学などを行い、29日（木）には、岩手県にある中尊寺を訪問し、世界遺産に登録されている金色堂などを見学しながら日本の歴史と文化を研修されました。

安総長は、帰国に際して「今後、仙台大学との教職員及び学生間の国際交流、また共同研究などをますます進⾏するよう願っています」というメッセージを寄せられました。

コロナ禍で国際交流機会も少なくなったため、今回の韓国国立体育大学校の安総長の来訪は貴重な国際交流の機会となりました。

<国際交流課>



NZカンタベリー大学国際交流課職員ジェームズ・ワグホーン氏来訪

10月13日（木）に、ニュージーランド・カンタベリー大学のジェームズ・ワグホーン氏（国際交流課職員・学生サービス・コミュニケーションリクルーター）が来訪しました。

本学は昨年7月16日にカンタベリー大学と連携協定を締結しておりましたが、新型コロナウイルスの影響による渡航制限等もあり、今回が初の先方からの来訪となります。

午前、仙台大学附属高等学校の校舎を見学しながら授業参観し、昼食では明成高校食文化創志科の生徒が準備した郷土料理を食してもらい、宮城の郷土料理に舌鼓をうっていただきました。

午後は本学に移り、キャンパスの見学と情報交換会を行い、ジェリー・パラング准教授から、マオリ族伝統の挨拶で歓迎を受けました。またニュージーランドにあるCCELへの留学を希望している学生が、来年7月からカンタベリー大学で開講する「スポーツコーチング」の講義への参加希望をワグホーン氏に英語で伝え、ワグホーン氏からは学生へ記念のUCシャツが贈られました。

その後の本学クリケット部との交流では、クリケットが趣味であるワグホーン氏はクリケットが仙台大学で定着していることに驚かれ、喜びの言葉を交わし、最後に「関係者と学生の皆さんにカンタベリー大学を是非訪問してください」と述べました。

<国際交流課>



教員を目指す学生を対象に「教採塾」をスタート



本学は毎年、教員になりたいという目標を持っている学生のために、「教採塾」を開設しています。

ここでは年間を通じて、専門知識を有し教育現場で豊富な経験を持つ教員の的確な助言や実技、模擬授業の実践的な練習、同じ教員を目指す他大学との交流など様々な活動を行っています。

今年度の「教採塾」開始式は10月18日（火）に1年生、19日（水）は2・3年生を対象に本学内で行われ、約200人が参加しました。

高橋仁学長は「先輩方の勉強の仕方や先生方のアドバイスを参考にしながら一人でも多くの方が教師として活躍できるように応援しています」と激励した。また、チーム教採の前チームリーダーで今年度、宮城県の教員採用試験で現役合格した大沼明美さん（スポーツ栄養4年）は「仙台大学には、いろんな種目を専門に行ってきた人がたくさんいるので、学生同士で得意な種目について助言したり、苦手種目を教えてもらうなどお互いに共有できることがチーム教採の魅力の一つ」と話してくれました。

「日本水泳・水中運動学会2022年次大会」で渡邊泰典准教授らの研究チームが研究奨励賞を受賞



このたび本学、渡邊泰典准研究チームが、10月8・9日（日）の両日、東京女子体育大学を会場に開催されました「日本水泳・水中運動学会2022年次大会」で、研究奨励賞を受賞しました。

長年、溺水は世界的課題として認識され、世界の各機関がその改善に取り組んでいます。

近年、国際的な水泳教育の考え方では、水難時、水中で危険を回避するために泳ぐことが溺死を避けるために必要な場合があること、冷水への対処として意図的に泳いで熱を産生するという戦略が必要な場合があることが少しずつ認識され始めています。

一方、我が国の安全教育としての着衣泳では、「泳がずに浮いて待つ」ことが強調されるケースが散見されます。しかしながら、警察庁が毎年6月に公表する報告書で、中学生以下の子どもたちの溺水死亡事故の約半数が河川で発生することが示されており、果たして浮いて待つことを強調する教育内容だけで良いのかについて再考する必要があります。

渡邊泰典准教授らの研究チームは、9月中旬の岐阜県長良川をフィールドに、実際に人が河川の水に浸水した時の深部体温の変化を調査しました。検証の結果、水温19～20℃程度では、手足を動かして移動することが、何もせずに救助を待つより、体温低下を軽減する可能性が示されました。今回の結果が、すなわち、泳いだ方がよいことの根拠にはなりません、少なくとも、ペットボトルを抱えてただ浮くことを教える教育内容ではなく、呼吸確保や体温低下の軽減のために、手足を動かすという選択肢があることを裏付ける資料になるかもしれません。

【研究奨励賞】

「河川での水難における行動選択の違いが水難者の深部体温に及ぼす影響」

渡邊泰典（仙台大学）、稲垣良介（岐阜聖徳学園大学）、森山進一郎（東京学芸大学）

令和4年度 学位論文予備審査会の開催について

10月11日（火）から14日（金）まで今年度修了予定である13名の院生を対象とした学位論文予備審査会を開催しました。

この予備審査会は、教職員、院生、学生に公開され、傍聴者の中には、発表内容や教員からの質問などを熱心にメモする姿も見受けられました。

今回の発表者である、修了予定の院生は、引き続き1月の学位論文審査会に向けて取り組んでいきます。

<大学院事務課>



体も心も軽くなる！ヨガ体験授業



10月6日、健康福祉学科2年生対象に「ヨガ体験授業」を行いました。この授業は健康支援・介護予防演習として毎年実施され、今年で7回目です。

健康福祉学科卒業生の中村孝子講師（2001年度卒・インド中央政府公認ヨガインストラクター）の指導のもと、静かに呼吸し体を動かしたり、筋力アップにもなるポーズをしたりしました。講師から、「大地を踏みしめるように、自分と向き合う時間にしましょう」などの声かけもあり、集中する時間を経験できました。

学生からは「体も心も非常に軽くなり、とても驚いた」、「自分と向き合う貴重な時間をもてた。先生の声かけやゆったりとした音楽など全てが癒しだった。」、「ヨガは初めてだったが、自分でも続けたい」、「体が硬くても、体を伸ばせて気持ちよかった」「久しぶりにとてもリラックスし、不安が解消された」などの感想が寄せられました。

今後も、引き続き、健康運動指導方法の実際を学んでいきます。

<健康福祉学科>

もっと歩きたい！ノルディックウォーキング体験



10月20日（木）、健康福祉学科2年生がノルディックウォーキング（NW）を体験しました。講師は、同学科卒業生の星勝久さん（国際NWナショナルトレーナー）で、健康運動指導の実際に触れました（健康支援・介護予防演習の一環）。

秋晴れの空の下、ポールを使い方を学び、準備体操を行い、早速、大学付近の自然散策路をNWで歩きました。

学生からは「上半身も使うウォーキングで新鮮だった」、「風が気持ち良く、足の疲れもなく、もっと歩きたいと感じた」、「ポールを押す推進力で、坂道も楽だった」等の感想や、今回実践した以外の歩き方やポールの価格等の質問が寄せられました。

講師からも「NWは通常歩行よりエネルギー消費が多く、また、必ず地面にポールが着いているため高齢者などでも安心感が得られます。これを機会に、関心をもっていただけると幸いです」とコメントをもらいました。

今後も、心身の健康につながる運動を学びます。

<健康福祉学科>

2022年度全日本学生柔道体重別選手権大会 女子52kg級で中島幸穂が3位入賞

2022年度全日本学生柔道体重別選手権大会が10月1日、2日（日）に日本武道館で開催されました。

本大会は年間を通じて行われる学生3大会のひとつであり、各地区（9地区）の予選を勝ち上がった男女7階級の個人戦で行われる大会です。

東京五輪の準備で使用ができなくなった日本武道館での開催は2018年以来となります。

本学からは男子7名、女子17名が東北地区代表として出場しました。

その中で、9月に行われた全日本ジュニア大会で3位入賞を果たした52kg級の中島幸穂（現代武道学科2年）が、今大会においても3位に入賞しました。

そのほかに女子70kg級の新名彩乃（現代武道学科2年）、女子78kg超級の田井知亜季（現代武道学科3年）がベスト8に入賞しました。

男子は女子と比べて各階級の出場人数が多く、上位入賞にはこれまで厳しい戦いを強いられていましたが、今回は60kg級の檜垣大地（健康福祉学科3年）が1、2回戦を勝利して男子としては久しぶりのベスト16という結果を残しました。

<柔道部>



3位入賞した中島選手

2年ぶりに日本選手権東北ステージ優勝／男子ハンドボール部

10月22日、23日（日）に宮城県加美町にて開催された、第74回日本選手権大会東北ステージ兼第59回東北総合ハンドボール選手権大会において、男子ハンドボール部が優勝を果たし、12月7日から山口県周南市で開催される日本選手権本選への出場権を獲得しました。

今大会の優勝は、2年前に51年ぶりの復活優勝を果たして以来、2年ぶり3回目となります。

今大会は、2日間で4試合を行うハードスケジュールでしたが、終始安定した試合展開で全試合勝利を収めることができました。

日本選手権は国内最高峰の大会として位置づけられており、国内トップの24チームで競うトーナメント戦です。東北地区代表として全力を尽くしますので、応援よろしくお願いします。

<男子ハンドボール部>



優勝に喜びの部員たち

16年連続リーグ優勝！21大会連続インカレ出場へ/男子サッカー部

東北大学サッカーリーグ後期第4節が10月24日（月）に岩手県・遠野運動公園で行われ、富士大学に6-0で勝利を収め、リーグ戦残り1試合を残して16年連続となるリーグ優勝を決めました。

この結果を受けて12月に開催予定の全日本大学サッカー選手権大会（インカレ・21大会連続38回目）への出場権を獲得しました。



秋リーグ全勝優勝飾る／男子バレーボール部

男子バレーボール部が9月から行われた東北大学バレー2022年秋季リーグで全勝優勝を果たしました。

最終戦は10月16日(日)に聖和学園短期大学を会場に東北公益文科大学と対戦しました。

●結果は以下の通り

16日 仙台大学 3 (25-14、25-22、25-22) 0 東北公益文科大学

最上級生の似内滉斗(体育4年・オポジット)と小野寺隼人(体育4年・セッター)がチームを牽引しました。またベンチメンバー全選手が要所で活躍し、チーム一丸となって勝利を収めました。



今後、男子バレーボール部は11月28日から東京都で開催される全日本インカレに東北の代表として出場します。

引き続き、仙台大学男子バレーボール部の応援をよろしくお願いいたします。

<男子バレーボール部>

2季ぶりのリーグ戦優勝を報告/硬式野球部

9月3日(土)～10月11日(火)に仙台市・東北福祉大学野球場で開催された令和4年度仙台六大学野球秋季リーグ戦で2季ぶり8度目の優勝を果たした硬式野球部が10月14日(金)に朴澤泰治理事長と高橋仁学長へ優勝報告をしました。

小笠原悠介主将(体育4年)は「今年も明治神宮野球大会に出場するには、チームとしてもまだまだ成長する必要があると思うので、しっかり練習して東北地区代表決定戦に臨みたいと思います」と意気込みを話してくれました。

今後、硬式野球部は10月29・30日(日)に仙台市民球場で開催される第53回明治神宮野球大会・第14回東北地区大学野球代表決定戦に出場し、2年連続となる全国大会への出場を目指します。



左から森本吉謙監督、朴澤泰治理事長、佐々木駿一主務(スポーツ情報マスメディア4年)小笠原悠介主将(体育4年)、高橋仁学長

高木環さん(スポーツ栄養1年)が女子駅伝ブロック発足後、初の全国大会へ

陸上競技部の高木環さん(スポーツ栄養1年)が10月30日(日)宮城県仙台市で行われる第40回全日本大学女子駅伝対校選手権大会に東北学連チームの2区(3.9km)として出場することが決まりました。

大会に向け、高木さんは「初めて走る全日本大学女子駅伝ですが、自分の得意とする登りをうまく利用し、たくさんの方からの応援に感謝しながら最後まであきらめないで走り切ります。少しでもチームに貢献できるよう頑張ります」と意気込みを話してくれました。

今回の選出は2021年4月に陸上競技部女子駅伝ブロック発足後、初の全国大会出場となり、大きな一歩を踏み出しました。

なお当日は、12時30分頃に仙台育英学園前(総合運動場側)からスタートする予定です。応援よろしくお願いいたします。



10月12日(水)高橋仁学長(左)へ東北学連チームの選考メンバーに選出されたことを報告する高木さん(スポーツ栄養1年)

「高校スポーツの安全を守る」Vol. 54

助手 白坂 広子



9月29日、仙台大学附属明成高校の福祉未来創志科3年生に「外傷の応急処置」について講習を行いました。

内容は出血の手当て、打撲・捻挫・骨折の場合の手当て、松葉杖の使い方、回復体位のやり方、そして搬送方法を講習しました。

出血の手当てでは直接圧迫止血、間接圧迫止血、そして鼻血への対応でした。間接圧迫止血は少し難しいところもあったようですが、上腕動脈を触診し圧迫して橈骨静脈がふれなくなったことが確認できたときの生徒たちは満足げな顔をしていました。また、打撲・捻挫・骨折の手当てはRICE処置についておさらいをし、松葉杖の使い方では階段の上り方や降り方を実技をとおして学びました。回復体位はペアを組んで傷病者役と救助者役に分かれて実技を学び、どうしてこの体勢がいいのかを考えながら行い

ました。搬送方法では傷病者を仰向けに起こしてから担架へ乗せ、声を掛け合いながら目的地へ運ぶという一連の流れをグループごとに行いました。うつ伏せで倒れている人、横向きに倒れている人など、状況が違う場合の搬送も行いました。

授業で学んでいますが実技で行うことは初めてだったので、生徒たちはみんな真剣に、そして楽しみながら受講していました。

スポーツ現場と介護現場では全く違いますが、外傷処置方法に大きな違いはありません。悪化させないように、適切な処置で対応する、これは共通です。人の命にかかわる職場での必要な技術になりますので、実技でしっかりと学んでほしいという先生方の思いから実現した授業でした。内容について先生方にも満足頂けたようで、これからも続けていく予定です。

～仙台大学教職員の共通理解事項～

仙台大学の「建学の精神」、「基本理念」、「使命・目的」

建学の精神

「実学と創意工夫」

仙台大学の経営母体である学校法人朴沢学園(明治12年開設)の学園創始者は、建学の精神として「実学と創意工夫」を掲げ、「創意工夫と先見性をもって実学を志し、実学に根ざした人格形成と人材育成を図る」ことをもって先進的な女子教育を行い、寺子屋方式に代え一斉教授法を導入し明治時代の裁縫教育に一大革新をもたらした。

その考え方は、体育系単科大学として昭和42年に開学した本学にも受け継がれ、人格形成の要素である体育・徳育・知育のうち「体育」に教育・研究の重点を置きつつ、実学と創意工夫に根差した広い教育研究領域を探索することに継承されてきた。なお、建学の精神の意図するところについては、開学時の第1回入学式・初代学長告辞にも「社会で充分活動できるための智識と技能を鍛えた心身ともに健康である人間をつくること」であり、仙台大学は、企業等における健康管理・健康指導の企画・実施担当者の育成、各種の運動機構等における実技指導者、ならびに学校体育の指導者を養成することを目的としております」と端的かつ明確に示されている。

基本理念

「スポーツ・フォア・オール」

仙台大学は、昭和42年、単一学部・単一学科で開学した。その後、平成7年度以降、順次学科を増設し、現在では6学科構成としている。また、学科増設に加え平成10年度には大学院スポーツ科学研究科(修士課程)も新設している。こうした教育研究領域の拡大に伴い建学の精神を基盤に据えつつ、大学の新たな基本理念として定めたのが「スポーツ・フォア・オール」である。

「スポーツ・フォア・オール」とは文字通り「スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に」を、すなわち「乳幼児から元気なお年寄りはもちろん、寝たきりのお年寄りまで。そして、性別や障がいの有無を問わず、トップアスリート、生活の中での楽しみや健康の励みとしてスポーツをする人、スポーツをみる人が好きな人、スポーツをささえる人などすべての人を対象としてスポーツを科学的に探究すること」を意味している。

使命・目的

基本理念を踏まえた仙台大学の使命・目的は、仙台大学学則第2条および仙台大学大学院学則第2条にそれぞれ示している。

■仙台大学学則 第2条

本学は、体育・スポーツ、健康福祉、スポーツ栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する諸科学を教授研究し、当該分野における指導者としての専門的知識と技能を体得させるとともに、高い識見と広い視野とをもって、社会の指導的な役割を果し得る有能な人材を育成することを目的とする。

■仙台大学大学院学則 第2条

本大学院は、広い視野に立って、体育・スポーツ、健康福祉、運動栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する学術の理論と応用を教授研究し、当該分野における高度の専門的な職業等を担うための卓越した能力を培い、もって体育・スポーツ及び健康分野の発展に寄与する有為な人材を育成することにより、広く社会に貢献することを教育研究上の目的とする。

その他 (リンクを貼っていますので、項目をクリックして閲覧ください)

■人材の養成に関する目的その他教育研究上の目的(仙台大学学則別表第一)

■3つのポリシー ①学部 ②大学院

③体育学科 ④健康福祉学科 ⑤スポーツ栄養学科

⑥スポーツ情報マスメディア学科 ⑦現代武道学科 ⑧子ども運動教育学科

■朴沢学園中期経営計画

■事業計画

Monthly Report

SENDAI UNIV.
PUBLIC RELATIONS

Vol.199 / 2022 .NOV

(月1回発行)

仙台89ERSのゲームスポンサーとして会場を盛り上げました



ダンスパフォーマンスで会場を盛り上げたDANDANCE&SPORTS実行委員会

プロバスケットボールリーグB.LEAGUE B1・東地区に所属している仙台89ERSの第7節・川崎ブレイブサンダース戦が 11月27日(日)に仙台市太白区のゼビオアリーナ仙台で行われ、本学がゲームスポンサー「SPORTS FOR ALL 仙台大学デー」として協賛しました。

会場内に本学のブースを複数設置。本学の特徴ある学科による催しを提供しました。どなたでも参加できるeスポーツ体験コーナー(NBAゲーム)や子どもを対象とした子ども運動教育学科の学生による「おりがみメダル」制作コーナー、スポーツ栄養学科の管理栄養士が監修した「ナイナーズ弁当2022-23」の紹介ブース、仙台大学附属明成高校出身の八村塁選手(NBA)と山崎一渉選手(ラドフォード大学)、菅野ブルース選手(エルスワース・コミュニティカレッジ)の等身大パネル設置、また、ハーフタイムには学生によるダンスパフォーマンス*を披露し、会場を盛り上げました。

試合は仙台89ERSが4Qの逆転劇で勝利し、MVP賞のプレゼンターをクリケット女子日本代表の岩崎桜奈選手(体育3年)と鹿野あかり選手(職員)の2名が務めました。

*ダンスパフォーマンスは、令和5年2月18日(金)に大河原町えずこホールで開催する「DAN DAN DANCE & SPORTS 19th」でも披露されますので、そちらも是非、ご来場ください。



MVP賞のプレゼンターをクリケット女子日本代表の2名



大人気だった子ども運動教育学科の学生による「おりがみメダル」制作コーナー

目次

・仙台89ERSのゲームスポンサーとして会場を盛り上げました	1
・令和4年度修士論文研究計画発表会を開催しました ・戴准教授の「柔術狂時代」がサントリー学芸賞を受賞 ・キャロウェイゴルフ株式会社様より、ゴルフ教材を寄附して頂きました	2
・令和4年度 地域防災人材育成プログラム ・バドミントン部男子、東北リーグ10季ぶり準優勝	3
・女子クリケット国際大会「クリケット女子東アジアカップ2022 日本代表対香港代表戦」で本学から2名が出場	4
・21年ぶりに全日本インカレ勝利!! / 女子ハンドボール部 ・女子バレーボール部 / 東北地区体育大会準優勝!	5

学生の活躍や、取り組みなどを
ご存知でしたら広報課までお寄せ
ください。

Monthly Reportで紹介する他、
報道機関にも旬な話題を提供して
参ります。

本誌へのご意見・ご質問等が
ありましたら広報課までご一報く
ださい。

仙台大学 広報課

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

令和4年度修士論文研究計画発表会を開催しました

今年度2年コースに入学した院生対象の、修士論文研究計画発表会を10月28日（金）に開催しました。

先日の学位論文予備審査会と同様に、教職員、院生、学生と希望者が傍聴できる会となっており、発表後のフリーディスカッションでは、予定時間を過ぎるほど、活発に意見交換がなされ、アドバイスをしっかりとメモする姿も見受けられました。

—発表した院生の感想—

今回発表してみて、自分なりにまとめてきたつもりではいたものの、漠然としていたところがあったと気づかされました。フリーディスカッションでは、研究の進め方や、発表資料のまとめ方等、具体的なアドバイスをいただき、今後の研究に活かしていきたいと思いました。



発表した院生の多くは、これから本格的に実験や実地調査等が始まります。今回いただいた意見を活かしつつ、1年後の学位論文予備審査会に向けて、限りある時間を有効的に使い、計画的に研究を進めていくことになります。
＜大学院事務課＞

藪准教授の「柔術狂時代」がサントリー学芸賞を受賞

この度、藪耕太郎准教授が第44回サントリー学芸賞を受賞しました。

同賞は毎年、前年1月以降に出版された著作物を対象に選考し、広く社会と文化を考える独創的で優れた研究、評論活動をされた方を顕彰しています。

また「政治・経済」「芸術・文学」「社会・風俗」「思想・歴史」の4部門に分かれており、藪准教授の『柔術狂時代—20世紀初頭アメリカにおける柔術ブームとその周辺』（朝日新聞出版）は「社会・風俗」部門での受賞となりました。

藪耕太郎准教授のコメント

武道の海外伝播史を、エスノセントリズムの陥穽から救い出し、文化の越境・交流・変容を巡る歴史的ダイナミズムに身を委ねて描く。その試みに評価を頂いた喜びと感謝に胸がいっぱいです。研究、出版、選考に関わる全ての皆様に、心よりお礼を申し上げます。



キャロウェイゴルフ株式会社様より、ゴルフ教材を寄付して頂きました

一般社団法人大学ゴルフ授業研究会様からご紹介を頂き、昨年12月にキャロウェイゴルフ株式会社様からゴルフ教材5セットの寄付を頂きました。

今年度の授業より活用させていただいております。ご厚意に、深く御礼申し上げます。



令和4年度 地域防災人材育成プログラム

10月29日（土）、30日（日）に、地域防災人材育成プログラム（主催：仙台大学、共催：尚絅学院大学、後援：名取市、柴田町）を開催しました。

1日目は、本学が連携協定を結んでいる尚絅学院大学とニュージーランドのカンタベリー大学の学生による3大学でのワークショップを行い、それぞれ災害ボランティアの活動の取組みについて情報交換を行いました。

本学からは、2011年の東日本大震災の際に避難所等でエコノミークラス症候群予防をお目的に行った健康体操指導と、コミュニティを作るために実施した茶話会の取組みを紹介しました。

カンタベリー大学からは、東日本大震災と同年2月22日にニュージーランド南島クライストチャーチ近くで発生したM6.3の大地震の際の、ボランティア等の活動が動画とあわせて紹介されました。

尚絅学院大からは、ボランティアチームTASKI（たすき）の活動として、閑上地区での伝承活動等について報告されたほか、新型コロナウイルスの拡大により、3年間の活動に制限があったため、ボランティア活動が十分にできておらず、活動経験を持つ学生がいないとの報告がなされました。

午後からは、演習形式で災害が発生する前から、発生後にできる活動について、学生同士で意見交換が行われ、盛会裏に終了しました。

また、2日目は柴田町民など6名にご参加いただき、佐藤修教授（スポーツ情報マスメディア学科長）による「自然災害と報道」と題した講演の他、山内明樹教授が地域防災についてゲームを通して考える演習、藤本晋也講師が、国土交通省が展開する「浸水ナビ」を活用して自身が住まう地区の防災について考える演習をそれぞれ実施しました。

参加者からは「貴重な経験談を聞くことができ、災害前の備えの必要性を再認識した」「今日学んだことを地域に戻って伝えたい」などといった声が寄せられました。

このプログラムは、今後、起こり得る災害に備え、地域で活躍できる人材を育成することを目的に、昨年度から実施しているものです。



バドミントン部男子、東北リーグ10季ぶり準優勝

11月6・7日（日）、仙台市・宮城野体育館にて東北学生バドミントン秋季リーグ戦が開催され、男子が2016年春以来10季振りに準優勝、女子も春に続いて3位となりました。

結果は以下の通り

男子（2勝1敗・準優勝）

仙台大学	3-1	東北学院大学
仙台大学	0-3	東日本国際大学
仙台大学	3-1	東北福祉大学

女子（1勝2敗・3位）

仙台大学	1-3	東日本国際大学
仙台大学	1-3	東北福祉大学
仙台大学	3-0	東北学院大学



男子は4年生が最後のリーグ戦で躍動しました。

初戦のトップシングルスに立った中島光人（健康福祉4年）が先制ポイントを挙げ、リーグ戦全体の流れを作りました。

エースの成田行磯（体育4年）は、4勝を挙げてチームの2勝に貢献しました。

成田と組んだ高山侑也（体育2年）、シングルス初出場の前田望夢（体育2年）もリーグ戦初勝利を挙げて来年度以降に期待が持てる結果となりました。

女子はエースの齋藤梓（スポーツ栄養1年）がシングルス3戦全勝と奮闘しました。

齋藤の次のポイントが課題となりますが、主将の吉田亜由美（体育3年）が春の3勝に続き、今回も1勝を挙げ、中村彩乃（スポーツ栄養3年）もリーグ戦初勝利を挙げました。

メンバーが残る来年度に上位進出を狙います。

今年度の試合も来月の新人戦を残すのみとなりました。

引き続き精進してまいります。

<バドミントン部>

女子クリケット国際大会「クリケット女子東アジアカップ2022 日本代表対香港代表戦」で本学から2名が出場

10月27日（木）から10月30日（日）に、大阪府貝塚市の市立ドローン・クリケットフィールドで、国際大会「クリケット女子東アジアカップ2022 日本代表対香港代表戦」が開催され、本学から岩崎桜奈選手(体育3年)と鹿野あかり選手(職員)の2名が日本代表選手として出場しました。

開催前夜には、開催地の貝塚市役所にてウェルカムパーティーが開催され、貝塚市長はじめ来賓の方々から日本・香港の両チームに激励の言葉がありました。

4日間の試合で日本代表は香港代表に4戦全敗してしまいましたが、3戦目、4戦目は善戦しました。特に4戦目はスコアが101対101と同点で終わり、延長戦の結果の惜敗でした。



岩崎選手は、国際大会初出場ではありましたが、初戦からレギュラーとして出場してくれました。

鹿野選手は既に日本代表メンバーとして海外での試合経験がある事、チーム内におけるレギュラーを確保している事も合わせ、堂々たるプレーを展開していました。守備ではキーパーというキャッチャーのポジションで的確な判断と堅守で大活躍しました。さらに、打撃では、3日目の試合で1試合に一人の選手が50ラン以上の得点を獲得するハーフセンチュリーを達成し、会場全体に大きな感動を巻き起こしてくれました。これは、チームジャパンにとっても本学のクリケット部にとっても歴史に残る快挙でした。

日本代表選手たちは、試合の合間に香港代表の選手たちと大阪を観光し、国際交流も十分に楽しめたようです。

イギリス発祥のクリケットは日本では人気・知名度とも高いとは言えないスポーツですが、世界的にはインドをはじめ旧英連邦諸国でサッカーやバスケットボールなどと並ぶ人気のスポーツです。

本学は日本では数少ないクリケット部がある大学です。一緒に世界を目指して取り組んでみませんか？



鹿野選手コメント

4日間、応援していただきありがとうございます。悔しい結果となりましたが、3年ぶりの国際大会が日本で開催されて私自身とても嬉しかったです。4戦4敗とチームとして納得いく結果にはなりませんが、来年にはW杯予選があるのでそれに向けてまた1から頑張っていきたいと思います。

仙台大学としても日本代表選手を1人でも多く輩出できるよう指導にも努めて参ります。

岩崎選手コメント

昨年は新型コロナウイルスの影響で国際大会が中止となり悔しい年となりましたが、今年は国際大会が日本で開催されてとても嬉しく思いました。初めての国際大会で緊張ばかりしてしまい、自分のプレーが発揮出来ず悔しい思いもありますが、レベルの高い選手とプレーできたことが嬉しく、そして楽しく試合ができ貴重な体験をさせていただきました。来年は、もっとレベルアップし、日本を代表する選手になれるよう練習に励んでいきたいです。



21年ぶりに全日本インカレ勝利！！／女子ハンドボール部

11月3日に愛知県（豊田市、刈谷市、岡崎市）にて開催された、高松宮記念杯男子第65回・女子第58回令和4年度全日本学生ハンドボール選手権大会において、女子ハンドボール部が2001年以来、21年ぶりに勝利し、ベスト16への進出を果たしました。

対戦相手の広島経済大学は、中四国ブロック2位のチームであり、実力は拮抗していましたが、ゴールキーパーの堺 夏美（体育4年）の堅守から、山崎 萌華（体育4年）が速攻を決めるなど、徐々にリードを広げることができました。

全日本学生ハンドボール選手権大会は学生最高峰の大会として位置づけられており、国内トップの男女それぞれ予選を経て出場した32大学で競うトーナメント戦です。

<女子ハンドボール部>



21年ぶりの勝利を挙げた女子ハンドボール部員

女子バレーボール部／東北地区体育大会準優勝！

11月5日（土）、6日（日）に本学第5体育館で3年ぶりに開催された2022年度東北地区体育大会バレーボール競技の部において、準優勝を納めました。

結果は以下の通り

<1日目：グループ戦>

仙台大学 2 (25-11, 25-9) 0 東北大学

仙台大学 2 (25-17, 25-19) 0 修紅短期大学

<2日目：トーナメント戦>

準決勝 仙台大学 2 (25-10, 25-12) 0 東北学院大学

決勝 福島大学 2 (25-20, 30-28) 0 仙台大学



本大会で4年生が引退となり、今シーズンが終了しました。今後も応援よろしくお願いします。

<女子バレーボール部>

川平キャンパスAT・S&Cレポート

「高校スポーツの安全を守る」Vol. 55

助手 高野 順平

10月から11月にかけては、高校スポーツも多くの大会が行われる時期で、川平キャンパスで勤務するアスレティックトレーナーも仙台大学附属明成高校の試合帯同を行いました。3年生にとっては、高校生活最後となる大会もあり、今年の3年生は入学当初から新型コロナの影響を一番受けた学年だったと思います。最近では、新型コロナの影響で学校自体が休校となることはなくなりましたが、部活動が数日中止という事もあり、まだまだコンディションをキープするのが難しい状況は続いております。それに加え、3年生が抜けた後は1・2年生だけのチームになり、チーム内での編成が変わったり、新人戦などの試合では以前より出場時間が長くなったりと、体への負担が以前より増える生徒も多く出てくる時期でもあります。川平ATルームでは仙台大学附属明成高校の特定研究指定部活動を対象に、定期的に傷害予防講習会を実施しており、最近行った講習会では、前期に報告があったスポーツ傷害の傾向を確認したり、4月に行った講習会で話した毎日のケアなどについて復習を行い、新チームでの新たな傷害予防に対する意識付けを行っています。



～仙台大学教職員の共通理解事項～

仙台大学の「建学の精神」、「基本理念」、「使命・目的」

建学の精神

「実学と創意工夫」

仙台大学の経営母体である学校法人朴沢学園(明治12年開設)の学園創始者は、建学の精神として「実学と創意工夫」を掲げ、「創意工夫と先見性をもって実学を志し、実学に根ざした人格形成と人材育成を図る」ことをもって先進的な女子教育を行い、寺子屋方式に代え一斉教授法を導入し明治時代の裁縫教育に一大革新をもたらした。

その考え方は、体育系単科大学として昭和42年に開学した本学にも受け継がれ、人格形成の要素である体育・徳育・知育のうち「体育」に教育・研究の重点を置きつつ、実学と創意工夫に根差した広い教育研究領域を探索することに継承されてきた。なお、建学の精神の意図するところについては、開学時の第1回入学式・初代学長告辞にも「社会で充分活動できるための智識と技能を鍛えた心身ともに健康である人間をつくること」であり、仙台大学は、企業等における健康管理・健康指導の企画・実施担当者の育成、各種の運動機構等における実技指導者、ならびに学校体育の指導者を養成することを目的としております」と端的かつ明確に示されている。

基本理念

「スポーツ・フォア・オール」

仙台大学は、昭和42年、単一学部・単一学科で開学した。その後、平成7年度以降、順次学科を増設し、現在では6学科構成としている。また、学科増設に加え平成10年度には大学院スポーツ科学研究科(修士課程)も新設している。こうした教育研究領域の拡大に伴い建学の精神を基盤に据えつつ、大学の新たな基本理念として定めたのが「スポーツ・フォア・オール」である。

「スポーツ・フォア・オール」とは文字通り「スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に」を、すなわち「乳幼児から元気なお年寄りはもちろん、寝たきりのお年寄りまで。そして、性別や障がいの有無を問わず、トップアスリート、生活の中での楽しみや健康の励みとしてスポーツをする人、スポーツをみる人が好きな人、スポーツをささえる人などすべての人を対象としてスポーツを科学的に探究すること」を意味している。

使命・目的

基本理念を踏まえた仙台大学の使命・目的は、仙台大学学則第2条および仙台大学大学院学則第2条にそれぞれ示している。

■仙台大学学則 第2条

本学は、体育・スポーツ、健康福祉、スポーツ栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する諸科学を教授研究し、当該分野における指導者としての専門的知識と技能を体得させるとともに、高い識見と広い視野とをもって、社会の指導的な役割を果し得る有能な人材を育成することを目的とする。

■仙台大学大学院学則 第2条

本大学院は、広い視野に立って、体育・スポーツ、健康福祉、運動栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する学術の理論と応用を教授研究し、当該分野における高度の専門的な職業等を担うための卓越した能力を培い、もって体育・スポーツ及び健康分野の発展に寄与する有為な人材を育成することにより、広く社会に貢献することを教育研究上の目的とする。

その他 (リンクを貼っていますので、項目をクリックして閲覧ください)

■人材の養成に関する目的その他教育研究上の目的(仙台大学学則別表第一)

■3つのポリシー ①学部 ②大学院

③体育学科 ④健康福祉学科 ⑤スポーツ栄養学科

⑥スポーツ情報マスメディア学科 ⑦現代武道学科 ⑧子ども運動教育学科

■朴沢学園中期経営計画

■事業計画

Monthly Report



SENDAI UNIV.
PUBLIC RELATIONS

Vol.200 / 2022 .DEC
(月1回発行)

仙台経済同友会と部活動支援に関する協定を締結



左から高橋仁学長、朴澤泰治理事長、小林英文代表幹事、深松努副代表幹事

仙台大学を設置する朴沢学園と仙台経済同友会は12月1日（木）、仙台市・仙台経済同友会会議室に於いて「部活動支援プロジェクトに係る連携協定」を結びました。

今回の協定は、仙台経済同友会が今年10月から推し進めている「部活動支援プロジェクト」に関して連携するもので、学生は体育系大学である本学で修得した専門知識を活かし、企業等に就職した後も競技指導者として関わることができ、一方、仙台経済同友会は同プロジェクトに欠かせない派遣指導者の人材確保に繋げることを期待するものです。

協定式には、仙台経済同友会から小林英文代表幹事（株式会社七十七銀行・取締役頭取）、深松努副代表幹事（株式会社深松組・社長）、本学園から朴澤泰治理事長、高橋仁学長が出席しました。

仙台経済同友会の小林英文代表幹事は「それぞれのスポーツ分野に秀でた学生たちに指導してもらうことで、生徒は競技力が向上し、企業にとっても新たな人材が供給されることは、とても悦ばしいこと」と話し、朴澤理事長は「スポーツを専攻領域とする大学として新たな道筋を作っていける」と今回の協定締結に期待しました。

協定締結を受けて、来年の2月には本学を会場としてプロジェクトに賛同する仙台経済同友会の会員企業による1回目の就職イベントを開催する予定です。

＜ 目 次 ＞

・ 仙台経済同友会と部活動支援に関する協定を締結	1
・ 第17回スポーツシンポジウムを開催 ・ 令和4年度 健康づくり運動サポーター認定証書授与式を挙行 ・ 第9回仙台大学学術講演会を開催	2
・ 「スポーツアナリストについて考える2022」スポーツ情報サポート研究会主催トークイベントを開催	
・ バドミントン部／岩沼市バドミントンスクール、小椋久美子さんと共演 ・ バドミントン部女子・新人戦にて女子シングルス優勝	3
・ 2022 Jeju cup International Judo Tournament 済州カップ国際柔道大会に出場、女子4階級と女子団体戦で金メダル獲得 ・ 手応え9位、全日本団体体操／男子チーム気を吐く	4
・ 第74回日本ハンドボール選手権大会（男子の部）／男子ハンドボール部 ・ 男子バレーボール部／活動報告	
・ 準硬式野球部が高橋学長へ大会等報告 ・ 佐々木琢磨職員が青森県褒賞、デーリー東北特別賞の受賞を報告 ・ 「高校スポーツの安全を守る」Vol.56	5

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報課までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報課までご一報ください。

仙台大学 広報課

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

第17回スポーツシンポジウムを開催

12月19日（月）18：00～19：30、仙台市青葉区のエルパーク仙台ギャラリーホールを会場に「第17回スポーツシンポジウム」（仙台市・河北新報社・仙台大学の共催）を開催し約90名が参加しました。

今回のシンポジウムは「女性の視点からスポーツの未来を探る」をテーマに、「監督が怒ってはいけない大会」の代表理事でスポーツキャスターの益子直美さん、バレーボール「リガーレ仙台」選手兼監督の佐藤あり紗さん、在仙女子アイスホッケーチーム「レディースラビッツ」コーチの鈴木あゆみさん、「マイナビレディース」企画営業課長の後藤早紀さんの4名をパネリストに、本学の弓田恵里香准教授をコーディネーターに実施しました。

主催者を代表し高橋仁学長が、対面での開催（去年はオンライン配信）に協力いただいた皆様に感謝の言葉を述べるとともに、東北地区の大学で初創設する「仙台大学女子硬式野球部」に触れ、シンポジウムの議論を今後の運営等の参考にさせて頂きたいと挨拶しました。スポーツを「する・みる・支える」という観点からパネリストがこれまで経験してきた指導方法や環境を紹介しつつ様々な課題に触れ、スポーツの楽しさの追求、女性スポーツの魅力や今後のスポーツのあり方について、活発な意見交換が行われ、会場からも質問が出て、パネリストと参加者が一緒になってこれからのスポーツの在り方を考えるイベントとなりました。



令和4年度 健康づくり運動サポーター認定証書授与式を挙行

12月15日（木）に健康づくり運動サポーターの認定証書授与式を挙行しました。

今年度は資格認定評価会で認定された初級14名（出席9名）に対して認定証書が授与されました。今回の認定者を含めこれまで延べ650名が本資格を取得してきました。

この資格取得には、講義受講と地域の運動教室での現場実習が必要となります。実際に地域の方々と関わりながら学生はコミュニケーション能力や指導力、ホスピタリティを身に付けます。

資格を取得した学生からは、「養成講座や現場実習で学んだことを今後の研究に活かしたい」「活動に参加して様々な人と関わることができた」「現場実習では運動プログラムはもちろんだが、場の雰囲気づくりの重要性を学べた」など、感想や今後の抱負を述べてくれました。

<健康づくり支援班>



第9回仙台大学学術講演会を開催

12月7日（水）B300教室で第9回仙台大学学術講演会を開催しました。

今年度は、東京都立大学人間健康科学研究科ヘルスプロモーションサイエンス学域教授の藤井宣晴先生を講師にお迎えして、「健康の鍵を握る骨格筋」をテーマにご講演をいただきました。

代謝・内分泌を介した全身性制御の分子基盤や骨格筋から分泌される生理活性物質「マイオカイン」の最新の研究から、運動による抗老化まで広くお話をいただきました。

最新の研究に触れる大変刺激的な学術講演会でした。



「スポーツアナリストについて考える2022」スポーツ情報サポート研究会主催 トークイベントを開催



12月18日（日）スポーツ情報サポート研究会は、会の知名度向上を目的として、XEBIO ARENA Active Spaceにてスポーツアナリストに着目した高校生向けのトークイベントを開催しました。遠方の方も参加できるようにハイブリット方式を採用し、YouTubeでのライブ配信も同時並行で行いました。当日は現地参加者29名、オンライン参加者34名と盛況のうちにイベントを終えることができました。

第1部では、石丸出穂准教授が自身の経験談を交えながら、主にバレーボールを題材にスポーツ分析の魅力について語り、スポーツ分析入門者向けの講演を行いました。第2部では普段から部活動でスポーツアナリストとして活躍している学生が登壇し、日々チームを情報戦略面でサポートする上で気を付けていることや、やりがいなど、様々なテーマに沿ってディスカッションを行いました。

イベント終了後に参加者へ依頼したアンケートでは、「現場レベルのもっとコアなところまで話を聞きたい」「仙台大学の卒業生でスポーツアナリストをしている人の話を聞きたい」等、次回開催に向けたご意見を頂戴しました。

【パネルディスカッションに登壇した学生のコメント】

須田翔大（スポーツ情報マスメディア学科4年）

最初は緊張していましたが、楽しくディスカッションをすることができました。まだまだ話したい事がたくさんあるので次回が楽しみです。

亀山優汰（スポーツ情報マスメディア学科3年）

スポーツアナリストとして人前に立つことが初めてだったのですが、自分の意見をしっかりと伝えることができたのでいい経験になりました。また、他の人とディスカッションしながら他競技のアナリストについても学ぶことができたので、今後の参考にしていきたいです。

松橋樹（スポーツ情報マスメディア学科3年）

当日は想像していたよりも多くのみなさんにきていただきとても嬉しく思います。私にとっては他競技のスポーツアナリストの活動内容、活動する上で気を付けていることなど普段聞くことができないことを聞くことができ、今後の活動に活かしていきたいと思いました。

企画運営を担当した新助手吉村より

イベントに参加してくださった皆様、ご参加くださりありがとうございました。日頃、各々の部活動でスポーツアナリストとして活躍している学生が、日々の活動を振り返り自分の言葉で伝えてくれました。学生にとっても貴重な学びの場になったと感じております。今後も様々な形で交流の場を作っていけたらと考えておりますので、引き続き研究会の活動を見守っていただけたら幸いです。

スポーツ情報サポート研究会では、スポーツアナリストを志す学生が日々の部活動で実践的な学びを通じて腕を磨いています。今後もSNSやHP等で情報を発信していきます。

<スポーツ情報サポート研究会>

バドミントン部／岩沼市バドミントンスクール、小椋久美子さんと共演

12月4日（日）、岩沼市総合体育館にて中学生対象のバドミントンスクールが行われました。北京オリンピック・女子ダブルスベスト8の小椋久美子さんの講習会がメインで、本学バドミントン部もアシスタントコーチという形で参加しました。

中学生たちは小椋さんとのシングルスや本学学生とのダブルスを楽しみました。

本学選手と小椋さんとのエキシビジョンマッチも開催され、中学生たちにとっては貴重な体験の1日となったようです。

本学学生の中には、岩沼でバドミントンを始め同じように講習会にて本学学生に教わったという学生がいます。このような地域の中のサステナブルな循環として大切にしていきたいと思います。

<バドミントン部>



バドミントン部女子・新人戦にて女子シングルス優勝

12月5日～8日、仙台市・宮城野体育館にて東北新人学生バドミントン選手権大会が開催されました。

全国大会へ繋がらない大会ではありますが、1・2年生のみ参加の大会ということで同世代の中での順位関係を見極める重要な大会と言えます。そのような大会において、本学バドミントン部女子が各種目上位入賞を果たしました。

結果は以下の通り

女子シングルス

- 優勝 齋藤梓（スポーツ栄養1年）
- 8強 中村彩乃（スポーツ栄養2年）
- 8強 木村瑞紀（体育2年）

女子ダブルス

- 3位 相澤栞里/齋藤梓（子ども運動2年/スポーツ栄養1年）
- 8強 中村彩乃/鎌田美来（スポーツ栄養2年/体育1年）
- 8強 渡邊莉那/三澤華恋（健康福祉2年/子ども運動1年）

女子団体：3位

メンバー

- 中村彩乃（スポーツ栄養2年）
- 木村瑞紀（体育2年）
- 阿部理子（健康福祉2年）
- 相澤栞里（子ども運動2年）
- 齋藤梓（スポーツ栄養1年）



エース齋藤が東北制覇を果たしました。先の秋季リーグ戦においても他校のエース格上級生を倒し、本大会の優勝候補筆頭となっていました。その重圧に屈することなく実力を示しました。本学としては4年ぶりの同種目制覇となります。

ダブルスは普段のペアではなく相澤と急造で組みました。準々決勝は逆転勝利、準決勝も同じように粘りましたが、ファイナルゲーム18本で敗退しました。

女子はこの3年間、インカレに出場できていません。来年度はインカレ出場を目標に活動していくこととなります。何としても、団体、シングルス、ダブルス全てで出場権を獲得していくことと、全日本学生ミックスダブルス選手権にも出場できるように精進してまいります。

<バドミントン部>

2022 Jeju cup International Judo Tournament 済州カップ国際柔道大会に出場、女子4階級と女子団体戦で金メダル獲得

韓国の済州（チェジュ）島において3年ぶりに開催された国際柔道大会に、本学とつながりが深い鄭成淑（チョン・ソンスク）氏のご配慮を受けて、出場をすることができました。

この大会は12月5日から8日の4日間、様々なカテゴリー（小学生からベテランの部）で実施されています。

大学生の部に出場した男子2名と女子6名は、初めて出場する国際大会で、日本と異なるスタイルの外国人選手との対戦に緊張もありましたが、各々が力を出し切り善戦をしました。

その中で、以下の4名が金メダルを獲得しました。

女子48kg級：小池優芽（体育1年生）

女子52kg級：中島幸穂（現代武道2年）

女子57kg級：坂口千桜（スポーツ栄養2年生）

女子70kg級：上野理花（現代武道3年生）

女子団体戦：金メダル



今回の経験をこれからの活動に生かせるよう、さらに精進したいと思います。
＜柔道部＞

手応え9位、全日本団体体操／男子チーム気を吐く

体操の全日本団体選手権が12月11日（日）、福井県鯖江市内で行われ、本学男子陣は9位に食い込みました。社会人、大学、高校の各カテゴリーで今年上位となった強豪ばかり計15チームが出場。このうち大学勢で5位、全体でも1けた順位であり十分健闘に値します。

大会は6人がエントリーし各種目3人の演技による6種目の合計得点で覇を競います。総合得点で本学は245.328。1位徳洲会クラブとの差は12.934でした。大学勢においては鹿屋体大、順大、日体大、筑波大に次ぐ成績。

種目の中で特筆すべきは跳馬です。本学がマークした44.666は全体で堂々トップ。胸を張れます。けん引したのは今年の全日本インカレで跳馬を制した岩澤将英（体育3年）。高難度の技をこなして着地もピタリ。最高得点15.300をたたき出しました。



大会終了後、互いの健闘をたたえ合った本学チーム＝サンドーム福井

チームの演技を見守った鈴木良太監督は「手応えを得た大会だった。所々小さなミスはあったが、各種目で目立ったミスがなかった。特に跳馬は良くて高得点につながってくれた。みんな、自信になったと思うし、これをぜひ次年度につなげてほしい」と期待を寄せました。

岩澤のほか本学の出場メンバーは次の通り。（エントリー順、所属は全て体育学科）

青木龍斗（2年）佐々木郁哉（同）浅山侑大（1年）吉田求（同）蛭町祐太（3年）

＜体操競技部＞

第74回日本ハンドボール選手権大会（男子の部）／男子ハンドボール部

12月7日（水）に山口県周南市で第74回日本ハンドボール選手権大会（男子の部）の1回戦が行われ、本学男子ハンドボール部は、東北地区代表として出場しました。

1回戦の相手は、伊藤峻（R3年度体育学科卒）が所属している、琉球コラソン（日本リーグ所属）でした。試合は、本学が先制点を挙げたものの、相手のアグレッシブなディフェンスに攻めどころを見出せず、前半を9-25で折り返しました。ハーフタイムに修正点を整理し、後半は相手に怯むことなく、攻め続けましたが試合は23-47で敗れました。しかし小池凜（体育3年）が1人で9得点するなど、国内トップリーグのチーム相手に堂々と渡り合いました。

国内最高峰の大会ということもあり、素晴らしい会場や競技運営の中で試合を行うことができ、チームにとって、大きな経験を得ることができました。また来年、この場所に帰って来ることができるように、トレーニングに励みます。

引き続き男子ハンドボール部の活躍にご期待ください。
＜男子ハンドボール部＞



本学卒業生、琉球コラソンの伊藤峻（真ん中水色ユニフォーム）と男子ハンドボール部員

男子バレーボール部／活動報告

○全日本インカレ惜しくも2回戦敗退／男子バレーボール部

バレーボールの大学日本一を決める第75回秩父宮賜杯全日本大学男子選手権大会（全日本インカレ）が11月29日（火）から東京都・武蔵野の森総合スポーツプラザで開催されました。

29日（火） 1回戦 対 専修大学
仙台大学 3（16-25、25-23、23-25、25-19、15-8） 2 専修大学

30日（水） 2回戦 対 長崎国際大学
仙台大学 0（21-25、25-27、22-25） 3 長崎国際大学大学

4年生が軸となり、今まで培ってきた実力を発揮し、関東1部6位の強豪である専修大学に競り勝ち、5年ぶりに1回戦を突破しましたが、2回戦で惜しくも敗れました。



○V1所属のジェイテクトSTINGSに惜敗／天皇杯ファイナルラウンド

令和4年度天皇杯・皇后杯全日本選手権大会ファイナルラウンドが12月9日（金）から東京都・武蔵野の森総合 スポーツプラザで開催されました。

本学男子バレーボール部は1回戦でV1リーグに所属するジェイテクトSTINGSと対戦し、リードする場面や競り合う場面も作りましたが、惜しくも敗れました。

結果は以下の通り
9日（金） 1回戦
仙台大学 0（21-25、19-25） 2 ジェイテクトSTINGS



今大会が4年生にとって最後の大会でしたが、全力を尽くし、終えることができました。
今シーズンも仙台大学男子バレーボール部を応援していただきありがとうございました。

＜男子バレーボール部＞

準硬式野球部が高橋学長へ大会等報告

11月28日（月）に準硬式野球部員が学長室を訪れ、高橋学長に大会報告を行いました。

準硬式野球部は東北地区春季リーグで優勝を果たすとともに、11月19-20日に福岡県で開催された第40回全日本大学9ブロック対抗準硬式野球大会では、東北代表として6名の選手を輩出するなど活躍しています。また東北地区秋季リーグでは5位に終わったものの2名がベストナインに輝いております。

高橋学長は、学生同士が協力し合って部活動の運営を行い、その状況下で結果を出していることに、たいへん感心するとともに、準硬式野球部の今後の更なる活躍を期待し、激励しました。

○学長報告した準硬式野球部員

杉田 瞬人さん（スポーツ栄養3年：主将）

佐藤 拓也 さん（健康福祉3年：東北代表）

大原 健我さん（健康福祉3年：東北代表）

小林丈流さん（体育2年：東北代表）

古川 翔馬さん（体育2年：秋季リーグ戦ベストナイン・東北代表）

佐藤 柊斗さん（健康福祉2年：秋季リーグ戦ベストナイン・東北代表）

齊藤 伊吹さん（健康福祉2年：東北代表）



佐々木琢磨職員が青森県褒賞、デリーー東北特別賞の受賞を報告

12月21日（水）に佐々木琢磨職員（本学0B）が青森県褒章およびデリーー東北特別賞を受賞したことを高橋仁学長へ報告しました。

佐々木職員は今年5月にブラジルで開催されたデフリンピックの陸上男子100メートルでアジア人初の金メダルを獲得しました。今回の受賞はともにその功績が讃えられての受賞となります。

佐々木職員は「このような賞を頂けたのも、私一人だけではなく、コーチの名取教授や多くの方に支えられたからだと思います。来年は今年以上に活躍できるよう頑張りたい」とさらなる飛躍を誓い、高橋学長は「陸上日本代表としてだけではなく、青森県の代表としてこれからも頑張っている」と激励しました。



左から高橋学長、佐々木職員、増子臨時職員（手話通訳者）

川平キャンパスAT・S&Cレポート

「高校スポーツの安全を守る」Vol.56

助手 今野 桜

本格的に寒さが厳しくなり、12月に入ってから川平キャンパスでも雪が降る日が続きました。気温が下がり始めた11月～12月にかけて、川平ATルームでは今年度第3回目のスポーツ傷害予防講習会を実施しました。

今回の講習会ではコンディショニングとこれからの時期に気を付けて欲しいことについて話をしました。まず生徒達には今年4月から現在までの振り返りをして、それぞれ良かった点・悪かった点を考えてもらいました。アスリートのコンディショニングに必要な運動・栄養・休養のバランスがきちんととれていた人もいれば、日々の食事から栄養を十分に摂れていなかった人、身体を休ませるための時間を上手くとれていなかった人など様々でした。今年は4～5月に怪我の発生件数が多く、特に1年生が入学後に怪我をして離脱するケースが多くありました。高校生は年間を通して大会があり「オフシーズン」と言うものはありません。そのため、日々の身体のケアや睡眠、食事等を意識して行うことが、アスリートとして良いコンディショニングを保つためにはとても重要になってきます。これから更に寒さが増し、体調を崩しやすくなります。この冬の間にしっかり体づくりをして、来年度の高校総体でそれぞれの部活動が良い結果を残せるように、川平ATルームでは引き続きサポートを行っていききたいと思います。



～仙台大学教職員の共通理解事項～

仙台大学の「建学の精神」、「基本理念」、「使命・目的」

建学の精神

「実学と創意工夫」

仙台大学の経営母体である学校法人朴沢学園(明治12年開設)の学園創始者は、建学の精神として「実学と創意工夫」を掲げ、「創意工夫と先見性をもって実学を志し、実学に根ざした人格形成と人材育成を図る」ことをもって先進的な女子教育を行い、寺子屋方式に代え一斉教授法を導入し明治時代の裁縫教育に一大革新をもたらした。

その考え方は、体育系単科大学として昭和42年に開学した本学にも受け継がれ、人格形成の要素である体育・徳育・知育のうち「体育」に教育・研究の重点を置きつつ、実学と創意工夫に根差した広い教育研究領域を探索することに継承されてきた。なお、建学の精神の意図するところについては、開学時の第1回入学式・初代学長告辞にも「社会で充分活動できるための智識と技能を鍛えた心身ともに健康である人間をつくること」であり、仙台大学は、企業等における健康管理・健康指導の企画・実施担当者の育成、各種の運動機構等における実技指導者、ならびに学校体育の指導者を養成することを目的としております」と端的かつ明確に示されている。

基本理念

「スポーツ・フォア・オール」

仙台大学は、昭和42年、単一学部・単一学科で開学した。その後、平成7年度以降、順次学科を増設し、現在では6学科構成としている。また、学科増設に加え平成10年度には大学院スポーツ科学研究科(修士課程)も新設している。こうした教育研究領域の拡大に伴い建学の精神を基盤に据えつつ、大学の新たな基本理念として定めたのが「スポーツ・フォア・オール」である。

「スポーツ・フォア・オール」とは文字通り「スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に」を、すなわち「乳幼児から元気なお年寄りはもちろん、寝たきりのお年寄りまで。そして、性別や障がいの有無を問わず、トップアスリート、生活の中での楽しみや健康の励みとしてスポーツをする人、スポーツをみる人が好きな人、スポーツをささえる人などすべての人を対象としてスポーツを科学的に探究すること」を意味している。

使命・目的

基本理念を踏まえた仙台大学の使命・目的は、仙台大学学則第2条および仙台大学大学院学則第2条にそれぞれ示している。

■仙台大学学則 第2条

本学は、体育・スポーツ、健康福祉、スポーツ栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する諸科学を教授研究し、当該分野における指導者としての専門的知識と技能を体得させるとともに、高い識見と広い視野とをもって、社会の指導的な役割を果し得る有能な人材を育成することを目的とする。

■仙台大学大学院学則 第2条

本大学院は、広い視野に立って、体育・スポーツ、健康福祉、運動栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する学術の理論と応用を教授研究し、当該分野における高度の専門的な職業等を担うための卓越した能力を培い、もって体育・スポーツ及び健康分野の発展に寄与する有為な人材を育成することにより、広く社会に貢献することを教育研究上の目的とする。

その他 (リンクを貼っていますので、項目をクリックして閲覧ください)

■人材の養成に関する目的その他教育研究上の目的(仙台大学学則別表第一)

■3つのポリシー ①学部 ②大学院

③体育学科 ④健康福祉学科 ⑤スポーツ栄養学科

⑥スポーツ情報マスメディア学科 ⑦現代武道学科 ⑧子ども運動教育学科

■朴沢学園中期経営計画

■事業計画

Monthly Report

川平キャンパスが完成、川平地区第二期再整備事業の竣工式を挙行



竣工式後の集合写真

本学を設置する朴沢学園が進めてきた仙台市川平地区再整備事業の第二期工事が完了し、12月28日（水）に仙台大学川平キャンパスで竣工式が行われました。

式には朴澤理事長はじめとする学園関係者、岡校長などの仙台大学附属明成高校関係者、本学からは高橋学長、松本副学長らが出席して完成を祝いました。

既に完了している第一期工事で附属高校の新校舎と法人本部、本学川平キャンパスの一部が建設され、今回の第二期工事では、本学・附属高校共用の体育館、附属高校校舎とつなぐ連絡橋、本学の研究棟である「川平KMCH」が完成しました。

朴澤理事長は「半世紀前の計画に示されていた仙台大学の川平キャンパスとしての活用、そして仙台大学附属明成高校の新校舎による教育がいよいよこの地で実施できるところとなりました。川平KMCH（KAJIMA MEMORIAL CLUB HOUSEの略称=鹿島建設がグループの力を結集して建設）は、船岡KMCHともども、両キャンパスの「臍」に当たるエリアに配置しており、その活用は、まさに『新しい器に盛る、魂のこもった中身』の創生であり、7年間の高大接続教育を实践するべく、より一層の努力と精進を重ねて参ります」と決意を新たにしました。



外観



川平KMCH

＜ 目 次 ＞

・川平キャンパスが完成、川平地区第二期再整備事業の竣工式を挙行	1
・部活動の地域移行について島田達二氏が講義を行いました ・韓国光栄女子高等学校柔道部が本学柔道部と合同練習	2
・令和4年度学位論文審査会を開催しました ・本学広報誌「S.U.N. 32号」発行のお知らせ ・「高校スポーツの安全を守る」Vol. 57	3
・DANDANCE&SPORTS19th 開催のお知らせ	4

学生の活躍や、取り組みなどをご存知でしたら広報課までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありましたら広報課までご一報ください。

仙台大学 広報課

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

部活動の地域移行について島田達二氏が講義を行いました

1月16日（月）、東京ヴェルディ・バンバータアカデミー統括ヘッドコーチの島田達二氏に来学いただき「部活動とクラブチームにおける指導の違いから見る部活動の地域移行について」について講義をいただきました。

島田達二氏は元・高知高等学校硬式野球部監督で9回の甲子園出場へ導き、現在は2019年より、総合クラブ化を進める東京ヴェルディと提携し、部活動環境が縮小する中、地域クラブの受け皿としてアカデミー、スクールを運営しています。

講義は、ご自身が教員からクラブチームの指導者へ転職したきっかけや、部活動とクラブチームにおける現状と課題などご自身が経験し、感じたことを受講生へ話してくれました。

受講生からは「多種多様なクラブや部活動がある中、決断の多さが成長に大きな影響を持つことを知りました」、「これからの時代は自分たちの発想、想像が世の中のしくみを変えていくと感じました」、「地域クラブや部活動の実情が良く分かりました」などの感想があがっていました。



韓国光栄女子高等学校柔道部が本学柔道部と合同練習



ヒュン・スクヒ氏から指導を受ける本学学生

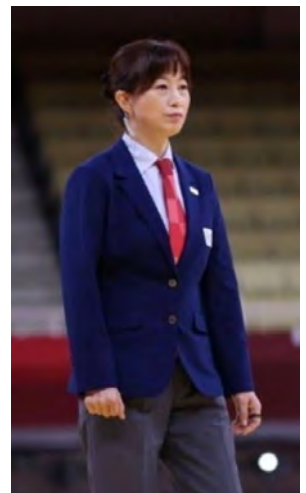


寝技の取組み練習

韓国の高校女子柔道でトップチームである韓国光栄女子高等学校柔道部が、本学柔道部と1月23日（月）～1月30日（月）の期間で合宿を行いました。

今回の合宿は韓国光栄女子高等学校の監督である、玄 淑姫（ヒュン・スクヒ）氏（1996アトランタ五輪52kg級銀メダリスト、2020東京五輪IJF公認審判員）と本学柔道部女子の南條和恵監督が現役時代からの交流により実現しました。

玄氏は「仙台大学柔道部の優れた寝技の技術や自主的に学ぶ姿勢を学ばせたい」と今回の合宿の目的を話し、本学柔道部女子主将の小坂愛美さん（現代武道3年）は「韓国の選手と実戦的な練習ができる貴重な機会。今後のレベルアップに繋げたい」と話してくれました。



ヒュン・スクヒ氏

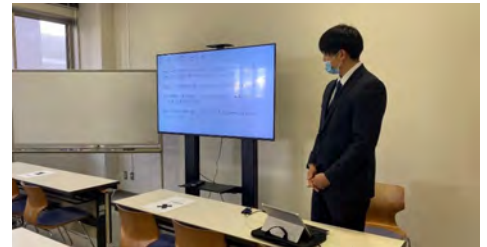
令和4年度学位論文審査会を開催しました

今年3月修了予定の大学院生10名を対象とした、学位論文審査会を1月17日～20日に実施しました。この審査会は、教職員、大学院生、学生に公開制で開催され、中には、来年度入学する学部学生が真剣なまなざしで傍聴する姿もありました。

審査を受ける大学院生は発表の後、審査員である教員からの質疑に応答しました。修士課程の集大成となる発表を前に、緊張し落ち着かない様子が多く見られましたが、終了後は緊張から解放され安堵した様子でした。

この後、論文審査を経て合格した大学院生は、大学院修士課程を修了することができます。

<大学院事務課>



本学広報誌「S. U. N. 32号」発行のお知らせ

本学の行事や教育研究活動および学生・同窓生に関わる課外活動の取り組みをお伝えしている広報誌「S. U. N. 32号」を発行しました。

今回は「卒業記念座談会：いま振り返る私たちのリアルな学生生活」や「女子駅伝ブロック設立の目的と今後の目標」といった内容を紹介していますので是非ご覧ください。



S. U. N. 32号

川平キャンパスAT・S&Cレポート

「高校スポーツの安全を守る」Vol. 57

助手 浅野 勝成

新年あけましておめでとうございます。高校の各競技では、年明けの1月には新人大会などが開かれます。その後の2～3月は公式戦や交流試合などが比較的少ないオフシーズン期となり、トレーニングに重点を充てる期間となります。また、新年度からの準備も進めていく時期でもあり、その中でも特に重点を置いているのが新入生へのトレーニング計画です。早い部活動では2月頃から高校の練習に参加するため、その際に自宅で行えるトレーニングの説明を行います。独自で作成した紙資料や動画資料の配布を行った上で説明を行います。主なトレーニング内容は、筋膜リリース、静的ストレッチ、およびモビリティドリルといった構成となり、関節可動域の増加と筋柔軟性の向上を目的とします。この背景として、入学以降にウエイトトレーニングを開始するに当たって、関節可動域の制限や筋柔軟性の不足がある場合だと正しいフォームの習得が難しく、結果としてウエイトトレーニングによる恩恵（最大筋力や筋パワーの向上など）を受けられない期間が長くなってしまいます。それでは、高校3年間という短い競技生活の中で十分に身体能力を高めることは難しくなってしまいます。そのため、入学時点もしくは入学後数か月以内に充分な関節可動域や筋柔軟性を有している状態が望ましいのです。高校3年間で有意義な競技生活を送ってもらえればという想いを込めて、新入生向けのトレーニング計画の作成を進めていきたいと思います。

DANDANCE&SPORTS19th 開催のお知らせ



DAN DAN DANCE & SPORTS

19th

#新しい時代の幕開け
#準備はできているか?

3年ぶりの えぞこホール開催決定!

ただいま、えぞこホール。

ぜひ会場にお越しください!!

2023.2.18 SAT
14:00開場 15:00開演
えぞこホール

DAN DAN DANCE & SPORTS 19th 実行委員長
健康福祉学科4年 千葉 史也 -fumiya chiba-

みなさんこんにちは! DAN DAN DANCE & SPORTS 実行委員会です!今年度で19回目を迎える本公演は、3年ぶりのえぞこホールでの開催に向けて、実行委員一同、力を合わせて準備を進めております。ぜひ会場にお越しいただき、心躍るひとときをお楽しみください! えぞこホールでお待ちしております!

●主催
仙台大学(研究支援部機構事務課)
DANDANCE&SPORTS実行委員会

●共催
えぞこホール(仙南芸術センター)
えぞこ芸術のまち創造実行委員会


最新の実行委員会の紹介動画や過去の公演など盛りだくさん!ぜひチェックしてくださいね♪

～仙台大学教職員の共通理解事項～

仙台大学の「建学の精神」、「基本理念」、「使命・目的」

建学の精神

「実学と創意工夫」

仙台大学の経営母体である学校法人朴沢学園(明治12年開設)の学園創始者は、建学の精神として「実学と創意工夫」を掲げ、「創意工夫と先見性をもって実学を志し、実学に根ざした人格形成と人材育成を図る」ことをもって先進的な女子教育を行い、寺子屋方式に代え一斉教授法を導入し明治時代の裁縫教育に一大革新をもたらした。

その考え方は、体育系単科大学として昭和42年に開学した本学にも受け継がれ、人格形成の要素である体育・徳育・知育のうち「体育」に教育・研究の重点を置きつつ、実学と創意工夫に根差した広い教育研究領域を探索することに継承されてきた。なお、建学の精神の意図するところについては、開学時の第1回入学式・初代学長告辞にも「社会で充分活動できるための智識と技能を鍛えた心身ともに健康である人間をつくること」であり、仙台大学は、企業等における健康管理・健康指導の企画・実施担当者の育成、各種の運動機構等における実技指導者、ならびに学校体育の指導者を養成することを目的としております」と端的かつ明確に示されている。

基本理念

「スポーツ・フォア・オール」

仙台大学は、昭和42年、単一学部・単一学科で開学した。その後、平成7年度以降、順次学科を増設し、現在では6学科構成としている。また、学科増設に加え平成10年度には大学院スポーツ科学研究科(修士課程)も新設している。こうした教育研究領域の拡大に伴い建学の精神を基盤に据えつつ、大学の新たな基本理念として定めたのが「スポーツ・フォア・オール」である。

「スポーツ・フォア・オール」とは文字通り「スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に」を、すなわち「乳幼児から元気なお年寄りはもちろん、寝たきりのお年寄りまで。そして、性別や障がいの有無を問わず、トップアスリート、生活の中での楽しみや健康の励みとしてスポーツをする人、スポーツをみる人が好きな人、スポーツをささえる人などすべての人を対象としてスポーツを科学的に探究すること」を意味している。

使命・目的

基本理念を踏まえた仙台大学の使命・目的は、仙台大学学則第2条および仙台大学大学院学則第2条にそれぞれ示している。

■仙台大学学則 第2条

本学は、体育・スポーツ、健康福祉、スポーツ栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する諸科学を教授研究し、当該分野における指導者としての専門的知識と技能を体得させるとともに、高い識見と広い視野とをもって、社会の指導的な役割を果し得る有能な人材を育成することを目的とする。

■仙台大学大学院学則 第2条

本大学院は、広い視野に立って、体育・スポーツ、健康福祉、運動栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する学術の理論と応用を教授研究し、当該分野における高度の専門的な職業等を担うための卓越した能力を培い、もって体育・スポーツ及び健康分野の発展に寄与する有為な人材を育成することにより、広く社会に貢献することを教育研究上の目的とする。

その他 (リンクを貼っていますので、項目をクリックして閲覧ください)

■人材の養成に関する目的その他教育研究上の目的(仙台大学学則別表第一)

■3つのポリシー ①学部 ②大学院

③体育学科 ④健康福祉学科 ⑤スポーツ栄養学科

⑥スポーツ情報マスメディア学科 ⑦現代武道学科 ⑧子ども運動教育学科

■朴沢学園中期経営計画

■事業計画

Monthly Report

仙台大学川平キャンパス・仙台大学附属明成高等学校新校舎・新体育館完成記念イベントを開催



明成高校現役生 対 明成OB親善試合

本学を設置する朴沢学園は川平地区再整備事業として約4年を経て附属高校の新校舎と法人本部、本学川平キャンパスの完成を迎え、2月18日（土）に仙台大学川平キャンパス新体育館で「仙台大学川平キャンパス・仙台大学附属明成高等学校新校舎・新体育館完成記念イベント」を開催しました。

完成記念式典では、朴澤泰治理事長が「体育・スポーツにDXという新しい取り組みを展開していき、高大7年間の接続した学びを踏まえた体育教員その他スポーツ指導者等の人材育成を図っていききたい」と挨拶し、次いで、高橋仁仙台大学学長及び岡邦弘明成高校校長が挨拶を行い、引き続き来賓を代表し、村井嘉浩宮城県知事代理の小野寺邦貢総務部副部長からご祝辞を頂きました。

式終了後に施設見学会が行われた後、新体育館でバスケットボール親善試合として仙台大学附属明成高等学校の現役生と卒業生が対戦しました。その際、新たに設置したAIカメラを使用し、本学スポーツ情報サポート研究会の学生がYouTubeで生配信も行いました。

また、ハーフタイムには、仙台大学新体操部による演技披露、また仙台大学附属明成高等学校男子バスケットボール部OB選手から寄せられたお祝いメッセージの披露、最後には、同じ卒業生の八村 塁氏の祝賀メッセージも披露され、出席した来賓、本学関係者、附属明成高校の生徒ら合わせ約1000人が魅了されました。



ハーフタイムショーで会場を魅了する
本学新体操競技部



実況（佐藤修スポーツ情報マスメディア学科
長）、解説（金田詳徳准教授）、ゲスト解説
（現役プロバスケットボールプレイヤーの3人）

＜ 目 次 ＞

・ 仙台大学川平キャンパス・仙台大学附属明成高等学校新校舎・新体育館完成記念イベントを開催	1
・ 仙台経済同友会、仙台大学による「業界研究セミナー（部活動支援賛同企業編）」を開催 ・ 楽天イーグルスアカデミー特別講義／株式会社楽天野球団とのアカデミックパートナーシップ協定	2
・ 第4回仙台カップ 全国女子学生柔道団体対抗大会を開催 ・ 2023東北バレーボールリーグ／新体制初の公式戦	3
・ 男子サッカー部/13年連続でJリーガー輩出！	4
・ 郷内翔さん（現武3年）がドイツ・オーストリア研修を報告 ・ 「高校スポーツの安全を守る」Vol. 58	5

学生の活躍や、取り組みなどを
ご存知でしたら広報課までお寄せ
ください。

Monthly Reportで紹介する他、
報道機関にも旬な話題を提供して
参ります。

本誌へのご意見・ご質問等が
ありましたら広報課までご一報く
ださい。

仙台大学 広報課

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

仙台経済同友会、仙台大学による「業界研究セミナー（部活動支援賛同企業編）」を開催

仙台経済同友会と本学園は昨年12月に部活動支援プロジェクトに係る連携協定を締結し、それに伴い2月22日（水）に「業界研究セミナー（部活動支援賛同企業編）」を開催しました。

同プロジェクトは、学生は体育系大学である本学で修得した専門知識を活かし、企業等に就職した後も競技指導者として関わることができ、一方、仙台経済同友会は同プロジェクトに欠かせない派遣指導者の人材確保に繋げることを期待するもので、今回の「業界研究セミナー（部活動支援賛同企業編）」では同プロジェクトに賛同する企業8社が、部活動に所属する3年生以下の本学学生100名に対し、入社後の部活動支援に関する体制や仕事内容などが紹介されました。

参加した男子バスケットボール部の鈴木雄音さん（体育3年）は「卒業後は競技を続けることは考えていませんでしたが今回の話を聞いて、教わってきたことを子供たちに伝えることができるプロジェクトにとっても興味がわきました」と話してくれました。

本学では仙台経済同友会と今後も部活動支援プロジェクトの関する企業の説明会を開催する予定です。



楽天イーグルスアカデミー特別講義／株式会社楽天野球団とのアカデミックパートナーシップ協定

1月24日（火）10：20～11：50のジュニアスポーツ指導論（体育学科コーチングコース開講）の講義内にて、「楽天イーグルスアカデミー特別講義」が行われ、約60名の学生が参加しました。

本講義は楽天野球団とのアカデミックパートナーシップに基づき、同球団のアカデミーでジュニア指導に関わる本学OBの講師をお招きし、現場での指導上のポイントや注意点をご指導いただきました。

受講した学生は「楽天野球団のアカデミーの方々言葉だけでなく、体を使って説明してくださったのでとても分かりやすく学ぶ事ができました。今日の講義でアカデミーに興味を持ったので、色々今日聞けなかった部分を調べてみようと思います。」「体の使い方などすごく細かく、わかりやすく説明してもらい、野球でのピッチング動作に繋がれるコアの部分、股関節の部分など勉強になりました。現役が終わったらコーチングに興味があるので話を聞けて面白かったです。」など、講師の先生の見本を交えながら的確な講義に多くの刺激を受けることができました。また、小中学生への指導法や、楽天イーグルスアカデミーでの実体験を踏まえた指導論なども学ぶことができ、非常に有意義な機会となりました。



第4回仙台カップ 全国女子学生柔道団体対抗大会を開催



2月15日（水）、16日（木）本学柔道場で「第4回仙台カップ 全国女子学生柔道団体対抗大会」を開催しました。

この大会は、2017年に本学の50周年記念大会として女子アスリート発掘・育成、ならびに女子柔道の振興を図ることを目的に開催され、今大会はコロナ禍の影響から3年ぶり4回目を迎えました。

5人制の団体戦となる今大会は13大学16チームが参加し、4グループによる予選リーグを勝ち抜いた上位2チームがQueenトーナメント、下位2チームがPrincessトーナメントへ進み、勝負を競い合いました。

開会式では高橋仁学長が「記憶に残る大会になるよう頑張ってください」と激励し、予選リーグ始まると白熱した試合が展開されました。本学柔道部は2チームが出場し、Aチームは予選リーグ3勝0敗でQueenトーナメントへ進みましたが、準決勝で龍谷大学に0-1のスコアで惜敗、気持ちを切り替えて臨んだ3位決定戦でしたが、日本大学に1-3で敗れ、5位となりました。またBチームは予選リーグ1勝2敗でPrincessトーナメントへ進み、準決勝で帝京科学大学B、決勝で大坂体育大学に勝利し、優勝しました。

本学女子柔道部の南條和恵監督は「3年ぶりに、本学でこのような大会を開催することができ、関係者の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。全国各地で我々と同じような思いを持ち、日々努力されている大学の指導者、選手がここ船岡に集まり切磋琢磨できたことを嬉しく思いました。大会期間中、学生たちの表情が試合ごとにたくましくなっていき、やってきたことが形になってきていることも感じました。また、審判員として参加した学生や、補助役員をしてくれた学生も勉強になったことと思います。キッズルームなど、ご協力いただきましたすべての皆様に感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました」と話してくれました。

2023東北バレーボールリーグ／新体制初の公式戦

2023東北バレーボールリーグが2月18日（土）から岩手県紫波町・OGALアリーナで開催されました。

この大会は「バレーボールを通じて地域を元気にする」ことを目的に、2週にわたり行われるバレーボールでは日本初の独立リーグとなる大会です。東北6県の男子選抜チームによるリーグ戦・決勝トーナメントが行われ、本学は宮城県代表「wolfies宮城」として出場しました。

18日（土）

予選リーグ1回戦 対 OWLS岩手

仙台大学 0（16-25、20-25）2 OWLS岩手



19日（日）

予選リーグ2回戦 対 青森ブランデュー弘前

仙台大学 2（25-21、23-25、25-22）1 青森ブランデュー弘前

予選リーグ3回戦 対 福島PEACHBOMBERS

仙台大学 2（25-20、24-26、25-23）1 福島PEACHBOMBERS

新体制になり初の公式戦で、全員に出場機会が与えられ、多くの選手の活躍が見られました。

次戦は3月4日（土）、5日（日）に岩手県紫波町・OGALアリーナで行われます。引き続き、仙台大学男子バレーボール部の応援をよろしくお願いします。

<男子バレーボール部>

男子サッカー部/13年連続でJリーガー輩出！

仙台大学史上最速Jチーム内定！得能草生（体育3年）が来季J2水戸ホーリーホックに加入内定およびJFA・Jリーグ特別指定選手に承認



【得能 草生（トクノウ ソウキ）プロフィール】

- ポジション： MF
- 生年月日：2001年11月7日（21歳）
- 身長/体重：165cm/68kg
- 出身：北海道札幌市
- チーム歴：
石狩フットボールクラブ→北海道コンサドーレ札幌U-15→青森山田高校→仙台大学

【コメント】

水戸ホーリーホックという素晴らしいクラブで幼い頃からの夢であるプロサッカー選手のキャリアをスタートできることを大変嬉しく思います。

今まで携わってくれた方々への感謝を忘れず、仙台大学サッカー部の価値を証明していけるような存在となり、そして少しでも早く水戸ホーリーホックの勝利に貢献できるよう一生懸命頑張ります。

応援よろしくお願いします。



石尾陸登（体育3年）がベガルタ仙台へ加入内定



【石尾 陸登（イシオ リクト）プロフィール】

- ポジション： DF
- 生年月日：2001年8月7日（21歳）
- 身長/体重：181cm/72kg
- 出身：岐阜県多治見市（※出生地は愛知県）
- チーム歴：
南姫FCジャーボア→JFAアカデミー福島U-15→JFAアカデミー福島U-18→仙台大学

【コメント】

自分の夢であるプロサッカー選手をベガルタ仙台で叶えることができ、とても嬉しく思います。ここまで支えてくれた家族やコーチ、関係者の皆様に感謝しながら精一杯頑張ります。そして、ベガルタ仙台の勝利に貢献できるように努力していきます。

応援よろしくお願いします。



郷内翔さん（現武3年）がドイツ・オーストリア研修を報告



オーストリア・ボブスレー・スケルトン協会と連携し、1月22日（日）～2月12日（日）にドイツ・オーストリア研修を行った、郷内翔さん（現在武道3年、ボブスレー・リュージュ・スケルトン部）が2月17日に高橋仁学長へ研修成果を報告しました。

この研修は、選手の育成・強化だけではなく、指導者養成やスポーツ設備や運営等に関する情報交換を目的に、今回はローカルトーナメントの出場及びワールドカップの帯同、トレーニング・コーチング研修に参加しました。

郷内さんは「競技がとても楽しかった。また、ワールドカップに出場する選手たちの活動や取り組みがわかってとても勉強になった」と話してくれました。

川平キャンパスAT・S&Cレポート

「高校スポーツの安全を守る」Vol.58

助手 白坂 広子

仙台大学川平キャンパス新体育館・研究棟（川平KMCH）完成記念式典

2月18日（土）、仙台大学川平キャンパス・仙台大学附属明成高等学校新校舎・新体育館完成記念イベントが行われました。当日は来賓が約180名と多くの方にお越しいただきました。私たち川平スタッフは施設案内を担当し、1階の健康増進研究実践室（プラクティカルラボ）及び地下のトレーニング研究実践室（トレーニングラボ）で実技を行い、2階Eラボへ映像配信をする、という授業スタイルのデモを披露しました。いくつかの質問やご感想をいただき、今後の運営の参考にしていきたいと考えています。



思い返せば昨年8月、まだ川平KMCHが鉄骨剥き出しのころに初めて内覧し、施設の概要の説明を受けました。高校生にスポーツ科学に関する多くの「気付き」を与え、大学で深くを学ぶ、という7カ年教育の始まりとなる川平KMCHの構想に、川平で高校生の成長に関わる業務を担っている身として、とても楽しみを感じました。来年から大学生のように高校生もiPadをそれぞれが持ち、授業で使用していきます。特にスポーツ創志科では、スポーツ科学の視点を1年時から取り入れ、自己の健康管理を習慣化させるため、ユーフォリア社のONETAPSPORTSを開始します。そしてスポーツ科学の様々な視点で体育授業を展開するため、プラクティカルラボにはノラクソン社ウルティウム筋電計・モーションセンサー、Visible Body社の3Dアトラス解剖図、インボディジャパンのInBody970、Precor社の有酸素トレーニング機器4台、そしてトレーニングラボには光電管、加速度計、ジャンプテスト、心拍モニターを導入しました。

来年から高校体育教員とさらなる連携と、強固な協力関係が必要となってきます。この川平KMCHの素晴らしい環境を最大限に活用し、頑張っていきたいと思っています。



2階Eラボ：映像配信



地下のトレーニング研究実践室
（トレーニングラボ）



1階の健康増進研究実践室
（プラクティカルラボ）

～仙台大学教職員の共通理解事項～

仙台大学の「建学の精神」、「基本理念」、「使命・目的」

建学の精神

「実学と創意工夫」

仙台大学の経営母体である学校法人朴沢学園(明治12年開設)の学園創始者は、建学の精神として「実学と創意工夫」を掲げ、「創意工夫と先見性をもって実学を志し、実学に根ざした人格形成と人材育成を図る」ことをもって先進的な女子教育を行い、寺子屋方式に代え一斉教授法を導入し明治時代の裁縫教育に一大革新をもたらした。

その考え方は、体育系単科大学として昭和42年に開学した本学にも受け継がれ、人格形成の要素である体育・徳育・知育のうち「体育」に教育・研究の重点を置きつつ、実学と創意工夫に根差した広い教育研究領域を探索することに継承されてきた。なお、建学の精神の意図するところについては、開学時の第1回入学式・初代学長告辞にも「社会で充分活動できるための智識と技能を鍛えた心身ともに健康である人間をつくること」であり、仙台大学は、企業等における健康管理・健康指導の企画・実施担当者の育成、各種の運動機構等における実技指導者、ならびに学校体育の指導者を養成することを目的としております」と端的かつ明確に示されている。

基本理念

「スポーツ・フォア・オール」

仙台大学は、昭和42年、単一学部・単一学科で開学した。その後、平成7年度以降、順次学科を増設し、現在では6学科構成としている。また、学科増設に加え平成10年度には大学院スポーツ科学研究科(修士課程)も新設している。こうした教育研究領域の拡大に伴い建学の精神を基盤に据えつつ、大学の新たな基本理念として定めたのが「スポーツ・フォア・オール」である。

「スポーツ・フォア・オール」とは文字通り「スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に」を、すなわち「乳幼児から元気なお年寄りはもちろん、寝たきりのお年寄りまで。そして、性別や障がいの有無を問わず、トップアスリート、生活の中での楽しみや健康の励みとしてスポーツをする人、スポーツをみる人が好きな人、スポーツをささえる人などすべての人を対象としてスポーツを科学的に探究すること」を意味している。

使命・目的

基本理念を踏まえた仙台大学の使命・目的は、仙台大学学則第2条および仙台大学大学院学則第2条にそれぞれ示している。

■仙台大学学則 第2条

本学は、体育・スポーツ、健康福祉、スポーツ栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する諸科学を教授研究し、当該分野における指導者としての専門的知識と技能を体得させるとともに、高い識見と広い視野とをもって、社会の指導的な役割を果し得る有能な人材を育成することを目的とする。

■仙台大学大学院学則 第2条

本大学院は、広い視野に立って、体育・スポーツ、健康福祉、運動栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する学術の理論と応用を教授研究し、当該分野における高度の専門的な職業等を担うための卓越した能力を培い、もって体育・スポーツ及び健康分野の発展に寄与する有為な人材を育成することにより、広く社会に貢献することを教育研究上の目的とする。

その他 (リンクを貼っていますので、項目をクリックして閲覧ください)

■人材の養成に関する目的その他教育研究上の目的(仙台大学学則別表第一)

■3つのポリシー ①学部 ②大学院

③体育学科 ④健康福祉学科 ⑤スポーツ栄養学科

⑥スポーツ情報マスメディア学科 ⑦現代武道学科 ⑧子ども運動教育学科

■朴沢学園中期経営計画

■事業計画

Monthly Report

 SENDAI UNIV.

PUBLIC RELATIONS

Vol.203 / 2023 .MAR

(月1回発行)

626名が旅立ち/令和4年度卒業式を挙行



高橋学長より卒業証書・学位記を受け取る子ども運動教育学科総代の佐々木さん

3月12日（日）、第五体育館で「令和4年度第53回卒業証書・学位記授与式並びに第24回大学院学位授与式」が行われ、体育学部615名（うち、体育学科319名、健康福祉学科100名、スポーツ栄養学科77名、スポーツ情報マスメディア学科37名、現代武道学科46名、子ども運動教育学科36名）及びダブルディグリー制1名、並びに大学院10名の修了生が新たな一歩を踏み出しました。

式は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学生と関係教職員のみで執り行いました。

高橋学長が「それぞれの道で『自己ベスト』をめざし、持てる力を存分に発揮し、悔いのない人生を歩んでいくことを願っています」と式辞を述べ、朴澤理事長が「この四年間の様々な経験を、貴重な財産として、社会で活躍されることを期待しています」と挨拶し、社会へ巣立つ卒業生と修了生を励ました。

また卒業生を代表し、現代武道学科の森龍之介さんが「4年間で培った知識や技術、精神、そして先生方からの数えきれない教を最大限に活かし、仙台大学であることに誇りを持ちつつ、決してくじけることなく確実に歩みを刻み、社会の一員として世の中に貢献できるよう、一層の努力をしてみたい」と謝辞を述べ、新たな飛躍を誓いました。

新しい門出を、教職員一同、心からお慶び申し上げます。

※ なお、LIVE配信された卒業式の様子は下記のQRコードよりご覧いただけます。



＜ 目 次 ＞

・626名が旅立ち/令和4年度卒業式を挙行	1
・認定龍澤寺こども園（岩手）と連携協定を締結 ・本学OBの南一輝選手が体操・W杯を「銀」を報告 ・令和4年度 仙台大学 履修証明プログラム「乳幼児運動あそび指導者育成プログラム」を修了しました	2
・健康福祉フォーラム「ICT/介護ロボットと歩む未来」を開催 ・令和4年度 介護実習・社会福祉援助技術現場実習 教育懇談会を開催しました	3
・【国際交流】イスラエル女子U23チームと合同合宿を実施/柔道部 ・日本バドミントン学会にて研究発表/林研究室	4
・ハワイ大学アスレティックトレーニング研修	5 ～ 6
・高橋 仁学長の韓国訪問および海外実習プログラム	7 ～ 12
・2023 ニュージーランド 被災地復興・スポーツ文化交流プログラム	13 ～ 15
・カンタベリー大学SVAのSNS（インスタグラム・フェイスブック）ではこの様子を収めた写真と感謝のメッセージが紹介されました ・「高校スポーツの安全を守る」Vol.59	16
退職される先生方からメッセージをお寄せ頂きました	17 ～ 18

学生の活躍や、取り組みなどを
ご存知でしたら広報課までお寄せ
ください。

Monthly Reportで紹介する他、
報道機関にも旬な話題を提供して
参ります。

本誌へのご意見・ご質問等が
ありましたら広報課までご一報く
ださい。

仙台大学 広報課

直通 0224 - 55 - 1802

Email kouhou@sendai-u.ac.jp

認定龍澤寺こども園（岩手）と連携協定を締結

3月23日（木）岩手県一関市で認定龍澤寺こども園と連携協定を締結しました。

認定龍澤寺こども園では令和3年度より本学の金賢植教授の指導の基に幼児の運動機能測定を行い、教育・保育の中に運動遊びを多く取り入れ未発達な運動機能を助長するような体育指導を行っています。こうした背景から今回の協定は、包括的な連携の下で相互に協力し、教育・保育の振興並びに人材育成と地域社会の発展に寄与することを目的としています。

協定式は、本学から高橋学長、松本副学長、原田子ども運動教育学科長が出席しました。

高橋学長は「教育や研究活動と一緒にを行うことで、通園する子供達がもっと身体を動かして運動したいと思えるように取り組んでいきたい」と挨拶し、塩竈園長は「40年前から体育の指導員がいればと願望を持っており、3年前に貴学の子ども運動教育学科1期生を採用してから、体づくりの実績においても素晴らしい成果が見られました。今回の協定で更に体育に長けたこども園になることを確信しています」と期待の言葉を述べられました。



本学OBの南一輝選手が体操・W杯を「銀」を報告

3月28日（火）に本学OBの南一輝選手（R4年3月体育学科卒・エムズスポーツクラブ）が来訪し、3月3日（現地時間）に行われた体操の種目別ワールドカップ・ドーハ大会のゆか運動でH難度の新技「ミナミ」を成功させ、見事、銀メダル獲得したことを高橋仁学長へ報告しました。

新技「ミナミ」は、抱え込み2回宙返り3回半ひねりで、大技である「リ・ジョンソン」にさらに半分ひねりを加えたもので、南選手は試合を振り返り「直前まで成功していなかったのが不安もありましたが、コーチが『大丈夫』と背中を押してくれたので攻めた演技をすることができました」と振り返りました。

また、卒業後も本学の体操場を練習拠点としている南選手は「周りの支えや、応援があつて完成することができた技」と感謝の言葉を述べました。

高橋学長は「南選手の世界で頑張る姿が、後輩たちの刺激となる。今後も頑張ってください」と激励しました。

なお、新技「ミナミ」は4月に開かれる世界体操協会審判会議で正式に決定される予定です。



令和4年度 仙台大学 履修証明プログラム「乳幼児運動あそび指導者育成プログラム」を修了しました

3月19日、令和4年度 仙台大学 履修証明プログラム「乳幼児運動あそび指導者育成プログラム」を修了しました。

修了式では、昨年の10月以降、約半年間のプログラムを履修した9名の履修生に対し、「履修証明書」が授与されました。授与後、一人一人が本プログラムを受講した感想等を述べた後、プログラムコーディネーターの原田子ども運動教育学科長より「本プログラムは、私自身、半年間とてもよい刺激になりました。ここでの学びをもとに、勇気をもって従来の自分を壊し、ブラッシュアップして欲しい」と挨拶しました。

9名の履修生の皆さん、今後のご活躍を期待致します。



健康福祉フォーラム「ICT/介護ロボットと歩む未来」を開催



健康福祉フォーラム（兼 第17回健康福祉研究会）を3月5日（日）に本学において開催しました（オンライン併用）。

今回は、2040年問題でも懸念される介護人材不足を念頭に「ICT/介護ロボットと歩む未来」のテーマで、体験型も取り入れフォーラムとしました。基調講演は、AIロボット開発のリーダーとして活躍されている東北大学の平田泰久教授による「未来で活躍する介護ロボットの開発—ムーンショット型プロジェクトの取り組み—」で、介護ロボット開発の現状と2050年に向けた方向性についてお話しいただきました。

シンポジウム「ICT/介護ロボットを活用した介護実践を考える」では、卒業生が運営する施設と大学との共同研究の紹介や介護ロボット活用の方向性に関する意見交換などをしました。また、介護ロボットブースでは電動車いす、移乗支援機器、睡眠モニタリング装置、認知症VRなど、仙台大学でも活用しているロボットを体験して頂きました。

卒業生、在校生、関係者など80名が参加し（オンラインは85名）、様々なコンテンツにより、人が行う介護、ロボットが行う介護の方向性や、介護の本質について考える機会になりました。また、卒業生、在校生、教職員の旧交もあたためられ、好評のうちに会を終えました。

<健康福祉学科>

令和4年度 介護実習・社会福祉援助技術現場実習 教育懇談会を開催しました



令和4年度 介護実習・社会福祉援助技術現場実習 教育懇談会を3月5日（日）本学LC棟で開催しました。

「令和4年度 介護実習・社会福祉援助技術現場実習 教育懇談会」は、介護福祉士養成のための介護実習と社会福祉士養成のための社会福祉援助技術現場実習の実習指導者へ、今年度の介護実習と社会福祉援助技術現場実習の実習結果や学生の学びについて報告し、次年度の実習計画について提案させていただく機会となっています。また、実習指導者より実習についてのご意見を伺い、次年度の実習についてご理解とご協力をいただくことを目的としています。

今回は介護実習施設の実習指導者9名、社会福祉援助技術現場実習施設の実習指導者6名、教員11名の計26名にご参加をいただきました。

令和4年度の実習報告ならびに令和5年度実習計画の報告後、介護実習では「COVID対策：5類移行に伴う実習運営について」、社会福祉援助技術現場実習においては「令和5年度新カリキュラムにおける『ソーシャルワーク実習』のあり方について」実習指導者と教員が情報交換を行いました。

新型コロナウイルス感染症下における実習や実習日誌におけるICTの活用などについて情報を共有することができ、実習指導者と教員の連携の重要性を感じる会となりました。

<健康福祉学科>

【国際交流】イスラエル女子U23チームと合同合宿を実施/柔道部



本学を平成21年度（2009年度）に卒業した田中美衣さんがコーチを務めているイスラエルU23チームの13名が、2月24日から本学柔道部と合同合宿（3月3日まで）を行いました。

イスラエルチームは2020東京五輪の男女混合団体種目において、銀メダルの日本に次ぐ銅メダルを獲得した強豪国です。田中さんはその結果に大きく貢献しました。

田中さんは、在学中に全日本学生体重別選手権大会において4年連続で決勝戦に進出し（そのうち2回が優勝）、卒業後の2010年に開催された世界選手権大会63kg級において銀メダルを獲得した実績があります。今回の来訪の目的は、イスラエルチームのウィークポイントである寝技の強化です。

期間中は本学の学生とともに、その課題克服に対して積極的に取り組んでいました。

今回の合宿を通じて、田中さんは「イスラエルチームのコーチを務めて6年目となりますが、今回はU23チームの課題である寝技の強化と国を代表して五輪を目指す自覚を持たせることが目的です。母校での合宿を通じて、日本の柔道を理解し、今後の成長の糧としてもらいたいです」と語ってくれました。

今回のメンバーから2028年ロス五輪、2032年ブリスベン五輪の代表選手が輩出する可能性が高く、選手達の活躍を祈願しています。

日本バドミントン学会にて研究発表／林研究室

3月5日（日）、日本バドミントン学会第6回大会が東京都立大学にて開催され、林研究室所属の学生が学会発表にのぞみました。

成田行磯（体育）

「学生バドミントン・男子シングルスにおけるラリー時間と休憩時間に関する検討～インカレ上位選手と東北地区選手の比較～」

須田翔大（スポーツ情報）

「バドミントン競技における新規スタッツの考案および有効性の検証」

佐藤倅心（健康福祉）

「バドミントン・ダブルスにおける前衛プレーの比較～前衛プレーにおける連続打球に関する考察～」

中島光人（健康福祉）

「バドミントン・ダブルスにおいて守備陣形から攻撃へ転じる有効なレシーブコースの考察」

学生演題が7題あった中、4題を仙台大学が占め、「バドミントンの研究発表数」という点では昨年に続き「日本一」となりました！

質問に対して「真っ白になってしまった」「うまく答えられなかった」という部分もあったようですが、それでも他大学の先生方とも交流をしてご指導いただき、良い経験となったとのこと。

このメンバーは、昨年3月（3年生時）の東京体育学会でのグループ研究の発表から研究活動がスタートし、これにて研究室の活動が終了となります。

教員、選手、研究者、一般企業とそれぞれの道は違いますが、この研究活動が卒業後の仕事に活かされることを期待しています。



ハワイ大学アスレティックトレーニング研修



令和5年2月20日から28日にかけて、ハワイ大学アスレティックトレーニング研修が実施されました。2003年から続いているこの研修もコロナ禍を経て3年ぶりに再開され、今年で31回目となりました。例年、本研修は2月にビギナーコース、9月にアドバンスコースが開催され全米公認のアスレティックトレーナー(NATABOC-ATC)の活動や専門的なスキルや知識を学ぶことができました。今までの研修は1週間ほどの短期間の研修のみでしたが、今年は新たな試みとして1か月の長期研修を設けました。長期研修には体育学科4年の山田莉久さん、短期研修には体育学科3年の齋藤美月さん、宮窪頸和さん、同2年の和久緋里さん、スポーツ栄養学科2年の小浜晴葵さん、同1年の近藤汰樹さん、体育学科1年の大石優希さん、工藤舞瑠さん、針生莉歌さん、本田真規さん、安井瀬七さんの計11名の学生たちが参加しました。引率者は、高橋仁学長、内野洋材助手、金藏弘佳助手の3名でした。

長期研修は令和5年2月11日～3月11日の日程で実施されました。参加した学生はハワイ大学のアスレティックトレーニングルーム(以下ATルーム)でアメリカンフットボールチームに付き現場実習をしました。朝5時半からATルームで練習の準備を手伝い、練習中はハワイ大学の学生AT達と選手の水分補給のサポートをし、午後はATルームでの選手のケアや治療などを学びました。アスレティックトレーナーの活動の起源はアメリカンフットボールにあり、参加した学生もその迫力や緊迫感に圧倒されながらも刺激を受けていました。英語が分からず苦戦していたところもありますが、自分ができることは全力でやっていこうと話をし、練習中は選手たちのサポートにグラウンドを駆け回っていました。その姿を見ていたATスタッフに、ハワイ大の学生AT達の「ロールモデル」にするとまで言っていただきました。さらに、全米公認アスレティックトレーナーの資格(NATABOC-ATC)を目指して修士課程に学ぶハワイ大学の学生たちが受講している田村薫里先生、白幡恭子先生のリハビリテーションのクラスにも参加しました。

その後、2月20日に高橋学長と内野先生の引率の下、短期研修の学生達と合流しました。翌日にハワイ大学教育学部学部長Dr. Murataと高橋学長が3年ぶりに再会されました。Dr. Murataからは、「この研修が再開されて非常に嬉しく思っている、今後も仙台大学との友好関係を築いていきたい」と言っていただきました。また、ハワイ大学Kinesiology and Rehabilitation Science(KRS)学科長Dr. Stickleyの教えるハワイ大学大学院の「献体解剖」のクラスの見学に行きました。テキストなどでしか確認できなかった人体の構造や筋肉の働きなど実際に見て学ぶことができ、日本では主に医学部などでしか実施されない献体解剖の授業は非常に貴重な経験となりました。



研修2日目はハワイ大学ATプログラムコーディネーターである大庭有希也先生とのワークショップがありました。大庭先生がどのような経緯でATCを目指したのか、そしてご自身の野球マイナーリーグでの経験をお聞きしました。学生の中には、留学してATCを目指したいと刺激を受けていた者もありました。そして午後には、金岡氏がATとして働かされているマッキンリー高校に伺い、高校でのアスレティックトレーナーがどのような役割を担って働かれているかお話をお聞きしました。

最終日にハワイ大学男子バレーボールの試合も観戦に行きました。ハワイ大の男子バレーチームは全米でランキング1位の強豪チームで、たくさんの観客で常に賑わっています。学生たちもスケールの大きさに興奮していました。そして、クロージングセレモニーがあり、ハワイ大学教育学部学部長Dr. Murataから終了証書が手渡されました。学生一人一人英語でスピーチしました。初日のオリエンテーションでは緊張の面持ちで慣れない英語を使い、頑張って自己紹介していましたが、最後のスピーチでは皆この研修の感想や感謝の気持ち、そして今後の抱負など英語でしっかり伝えることが出来て非常に感銘を受けました。



今回のハワイ大学アスレティックトレーニング研修に参加した学生のほとんどが初の海外経験となりました。異なる文化や言葉の壁に触れることで、それが刺激となり挑戦する心を持って生きていくきっかけとなることを期待しています。そして、ハワイ大学との長きに渡るこの関係がより深いものとなるよう尽力していきたいと思ひます。



高橋 仁学長の韓国訪問および海外実習プログラム

期 間：令和5年3月7日（火）～10日（金）4日間（学長）

令和5年2月11日（土）～3月16日（木）33日間（学生）

場 所：龍仁大学、韓国国立トレーニングセンター、韓国体育大学

出張者：高橋 仁学長、金 賢植教授

参加者：小林 杏奈（子ども運動教育学科3年）、添田 棕（スポーツ栄養学科2年）

瀬戸 宙（現代武道学科2年）、高橋 杏（体育学科2年）

高橋学長は、令和5年3月7日（火）～10日（金）まで、龍仁大学、韓国国立トレーニングセンター、韓国体育大学の学生交流や共同研究を目的に訪問し、学生たちは、龍仁大学校を拠点として、韓国語・伝統武道・文化についてより高度なレベルで学修し、韓国の歴史や文化についての知見を深めることを目的として海外実習プログラムに参加した。

1. 龍仁大学

龍仁大学は、「大韓柔道学校」に始まる伝統的な大学で、現在では、武道、体育科学、芸術、産業情報、自然科学、保健福祉の6つの分野を持つ韓国で有数の私立大学である。特に柔道、テコンドーについては世界レベルの実績をあげており、本学とは平成22年1月21日に国際交流協定の締結している。

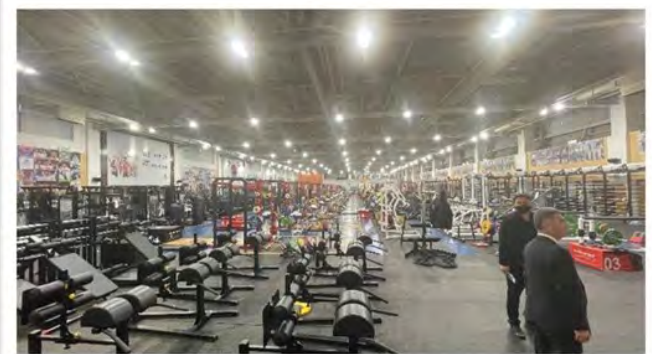
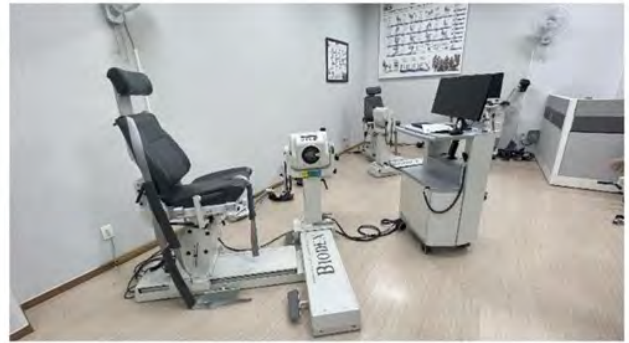
3月8日（水）の午前中は龍仁大学の歴史館、武道学部の施設見学、龍仁大学の総長、副総長、国際交流センター長などと懇談会を行った。



2. 韓国国立トレーニングセンター

「韓国国立トレーニングセンター：ジンチョン選手村」は、韓国・忠清北道・鎮川郡にあるスポーツ専用施設のコンプレックスである。2001年に開設されて以来、国内外のさまざまなスポーツ大会やトレーニングに多くの選手たちが利用している。施設内には、競技場、屋内体育館、プール、テニスコート、練習場、ゲストハウス、食堂など、様々な施設があり、全国的に人気のある人工芝の競技場やミニサッカーコート、人工クライミングなどのスポーツ施設も備えている。また、スポーツ学科の教育課程と国家代表チームのトレーニング課程を兼ねる多目的選手村であり、選手たちの競技力向上や健康的な体力維持に大きく貢献することができる場所である。当日、ボクシングオリンピック銀メダリストであるイ・スンベ委員より選手村の案内を受けた。





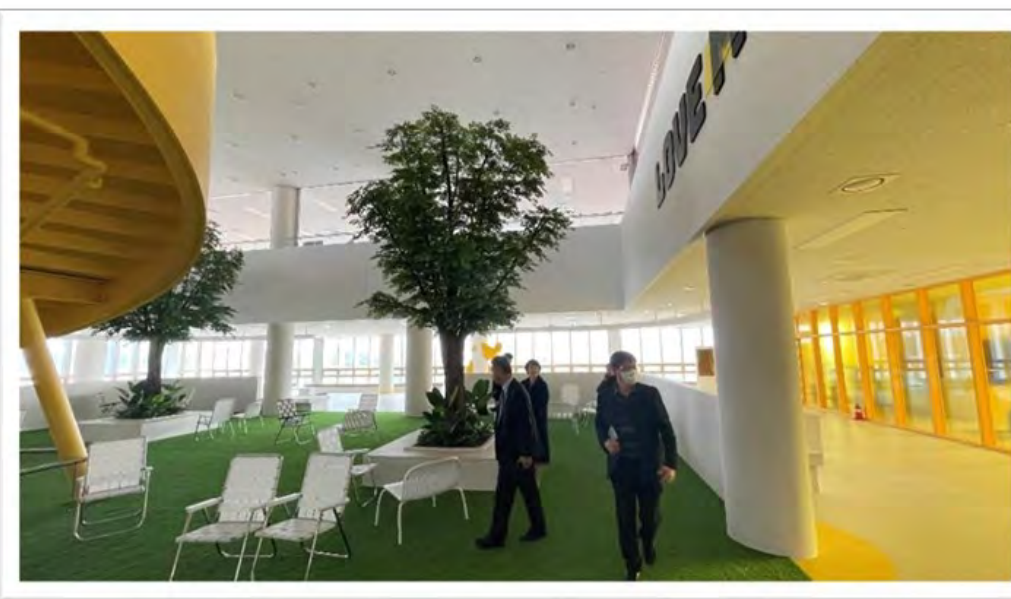


3. 韓国体育大学

韓国体育大学は、韓国の体育大学の一つであり、大韓民国文化体育観光部に所属している。

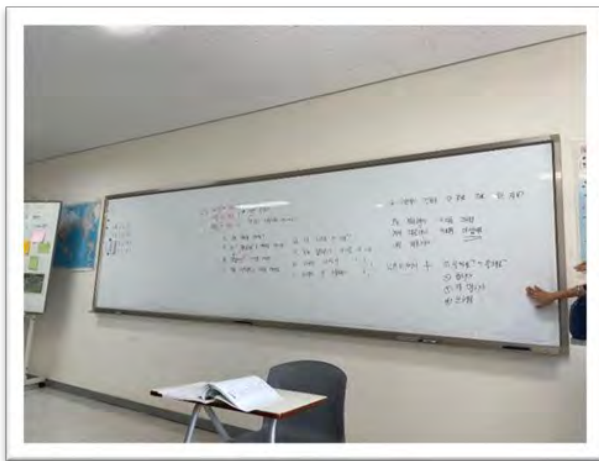
1972年に設立されたこの大学は、全国的に体育分野で人材を育成する役割を果たしており、大学校唯一のスポーツ専門大学として指定された。本学とは平成22年に国際交流協定の締結しており、体育教育科、スポーツ科学科、スポーツ産業科、ダンス科などの学科がある。また、韓国体育大学は大学教育課程以外にも、様々な体育教育及び研究のための施設を保有しており、国際スポーツ大会や国内スポーツ大会など様々なスポーツイベントを主催している。





4. 韓国海外実習

本プログラムでは、龍仁大学校を拠点として、韓国語・伝統武道・文化を学修し、韓国の歴史や文化についての知見を深めることを目的として実施された。本プログラムに参加した4名の学生は、1ヶ月間の毎日午前中には韓国語の授業に参加し、午後はテコンドー授業、文化活動、現地の学生との交流を行った。





2023 ニュージーランド 被災地復興・スポーツ文化交流プログラム

クライストチャーチ・イングリッシュ・リミテッド(CCEL)

2月16日～3月20日 (1ヶ月の研修+ホームステイ)

准教授 ジェリー パランギ

ニュージーランドのクライストチャーチにあるカンタベリー大学(UC)とCCEL(英会話教室)で英語学習、防災/ボランティア活動、スポーツ、文化などをテーマにした「ニュージーランドスタディプログラム」は、2016年に開始して以来、2017年に4名の少人数で最初の交流プログラムが続きました。その後、2021年7月にUCと正式に覚書を締結し、仙台大学はUCとの関係を深め、両大学間の持続的な相互交流の確立を目指し、着実に歩を進めてきました。本プログラムは、そのような交流を促進するための重要なプラットフォームであり、UCとの強い「レガシー」となる関係を築く取組みを続けています。

2022年、世界中でコロナウイルスの予防接種が進み国際的な国境規制が緩和されたことから、仙台大学では国際交流スタディプログラムの大半を再開することが可能となり、ニュージーランド・スタディ・プログラムは2023年2月16日に始まりました。

今回は2年生男子2名、3年生女子2名の4名がプログラムに参加しました。参加者は例年通り、ニュージーランドに出発する前に毎週木曜日の昼休みに集合し、マオリの文化や習慣、ホームステイに役立つ自己紹介や日常英会話、そして何より留学を最大限に楽しむためのトピックについて集中的に学びました。その間に、CCELで英語の基礎と4技能を学ぶGeneral English (GE) Programに登録され、クライストチャーチに到着後、クラス分けテストを受けて各クラス分かれて英会話を学びました。

また、カンタベリー大学の学生に日本文化を紹介する授業を企画し、2011年の東日本大震災について40分間のパワーポイントによる英語プレゼンテーションを準備し、想定される質問とそれに対する回答も用意してUCの学生たちの前で発表しました。UCの学生や先生方に大変高く評価され、多くの質問があり、それらの質問にも本学の学生たちは的確に答えていました。UCの学生たちとともにボランティア活動にも参加したことも、思い出に残る活動となりました。

帰国前には学長がUCとCCELを訪問し、学生たちのレッスンの様子を視察するとともにUCでは大学関係者とのミーティングを行い、今後も交流を深化させることで意見が一致しました。

今回のニュージーランド・スタディ・プログラムは、参加した学生たちにとって語学学習だけでなく多くの学びを得ることのできる機会となりました。

なお、今回は、日本を出国する前に学生全員がコロナの予防接種を受ける必要があったことも記載しておきます。



写真左・UCの学生ボランティアSVA (Student Volunteer Army)会長のガレス・ハーコンブ氏(幹部)とお会いしました。写真右:カンタベリー地震記念館付近でSVA会長と。



写真左・2011年クライストチャーチ大地震の犠牲者のために祈る。

写真右・UCのアン・ホートン教授のユース&コミュニティ・リーダーシップ (YACL101)の授業で仙台大学の学生が発表したものの。



右写真・仙台大学の学生が七ヶ浜の津波後の被害について話しています。これらの写真は、派遣学生である千葉萌絵さんが撮影しました。津波を体験した千葉さんの話は、みんなに大きな感動を与えました。
写真右・45分のプレゼンテーションの後、40分の質疑応答が行われましたが、通訳はほとんど必要ありませんでした。学生のプレゼンは素晴らしく、好評でした。



写真左・マオリの伝統的なタモコ（タトゥー）を顔につけたUCのコメネ・クルランギ教授に、仙台大学の学生たちがアニメーションでマオリの授業を受ける様子。
写真右写・仙台大学の学生が“けん玉”を紹介。



写真左・カンタベリー大学3年生と日本語の授業。毎年、仙台大学の学生が参加する授業で、日本語教員の荻野正佳先生のアシスタントをして盛り上がります。写真左・佐々木穂香さんによる学生へのインタビュー。
右写真・UCの日本語クラス3年生。



写真左-仙台大学の学生とSVA会長のガレス・ハーコンプ氏。



2023 UC SVA Big Give Event - Red Zoneの植樹&地域のネイティブツリーを保護する。



右写真：ビッグ・ギブ・イベントは、国際理解の架け橋となり、地域社会の大義のために志を同じくする人々と友だちになることも目的としています。

右写真・美しいワイヘキ島に到着した皆さん、いよいよ島での新しい発見の時が来ました。



写真左 仙台大学高橋仁学長から記念品を受け取るカンタベリー大学副学長Brett Berquist氏

写真右 カンタベリー大学教員と仙台大学高橋仁学長、ジェリー・パランギ准教授

カンタベリー大学SVAのSNS（インスタグラム・フェイスブック）ではこの様子を収めた写真と感謝のメッセージが紹介されました

この1か月間、日本の仙台大学から4名の学生がクライストチャーチに交換留学しました。。カンタベリー大学の学生ボランティア団体SVA (Student Volunteer Army)と仙台大学は、2011年のクライストチャーチ地震と2011年の東日本大震災で経験した災害を共有していることから、強い絆で結ばれています。

訪問中、SVAの役員は学生達とカンタベリー地震国立記念館を訪れ、クライストチャーチ地震で失われた人々の思いを馳せました。また、学生たちは2023年のザ・ビッグ・ギヴ（最大800名の学生が参加したこのイベントは、一人でも多くの学生ボランティアに挑戦するきっかけを作り、活性化させることを目的としています）に参加し、仙台大学学長とともにSVA事務所を訪れ、災害への対応や悲惨な出来事からの復興方法について話をしました。

NZの研修プログラムの最中でSVAを訪れていただき、本当にありがとうございました。訪問を通して、皆さんと繋がることができ、また、皆さんの経験についてKōrero（マオリ語で物語）を聞かせていただくことができ、光栄に思っています。



高橋学長と本学学生1名とカンタベリー大学 SVA Executiveメンバー4名その内の1名はSVA President Mr. Gareth Harcombeさんの写真



2011年の東日本大震災のプレゼンテーションを行った本学の学生4名とカンタベリー大学 SVA President Mr. Gareth Harcombeさんの写真

川平キャンパスAT・S&Cレポート

「高校スポーツの安全を守る」Vol. 59

助手 高野 順平

仙台大学附属明成高校では3月3日に卒業式も終わり、来年度へ向けた準備も進んでいる中、川平ATルームでは特定指定研究部活動に向けて今年度最後の傷害予防講習会を開催しました。今回のテーマは「脳震盪について」で、スポーツを行う高校生に知っておいて欲しいスポーツ傷害の知識の1つについて話をしました。特にここ数年、色々な競技団体から脳震盪に関する情報発信があったり、ルールを変更する事により選手の安全を守るというような動きがある中で、実際にスポーツを行う選手の知識が不足している事により、危険な状況に繋がり兼ねない事はまだまだ多いのではないかと思います。実際に生徒たちに質問していく中で、自分たちでは脳震盪と認識していなくても、過去に脳震盪、または脳震盪が疑われる症状を経験した事のある生徒が数名いました。脳震盪でも、周りの人たちが見たり話したりする中で、様子がおかしいと気づくこともあると思いますが、本人が感じる症状だけの事の方が多いと思います。各協会の指導者講習会やコーチングライセンス講習会、審判講習会などではこういった内容も入っているのだと思いますが、実際にスポーツをする選手立ちへの情報共有が傷害予防には大切だと思い、このような講習会を行っています。



退職される先生方からメッセージをお寄せ頂きました

今年度で退職される先生方から本学教職員や学生へメッセージをいただきましたのでご紹介します。

10年間の思い出 ～出会いに感謝～

特任教授 久能和夫

10年前、赴任した当初から道德教育論をはじめ教職関連の科目を主に担当しました。その中で心に残っている授業科目があります。それは、2年生を対象として開講されていた「全学教養演習」です。提携協定を結んでいる明星大学の通信教育により取得できる「小学校教員免許」を希望する学生を主な対象者とし「小学校の先生」というテーマを掲げました。開設当初はどれくらいの学生が集まるのだろうかという思いがありましたが、嬉しい誤算で毎年2桁の学生が授業に参加してきました。中・高の保健体育科の教員免許に加え、通信教育課程を修了し、今、多くの卒業生が小学校の現場で子どもたちと向き合っています。

赴任して2年目の秋から、新学科設置に向けての取り組みに加わりました。全学教養演習で取り組んでいた流れを幼児期における保育・教育の領域に拡大していく枠組みの中で「運動（遊び）を中核においた」幼児期から小学校への指導者養成に向けた流れに大きく舵を切る思いで、当時、東京事務所にいた遠藤前学長や金先生と連携を図りながら設置に向けて邁進しました。

赴任して5年目の春、仙台大学50周年を記念する節目の年に念願の6番目の学科「子ども運動教育学科」が誕生しました。初代の学科長を拝命し、大学の理念としてのSports for Allを年代で縦軸に貫く指導者養成課程の実践化が図られることになりました。

50年を越える歴史の積み重ねの中で培われてきた体育大学ならではの知見と実践を基盤とした各発達段階に応じた指導者養成に関わることができたこと、そして、それぞれの現場で活躍している人材を輩出できたことを嬉しく思っています。

この10年、私自身、得がたい経験・体験を積み重ねながら、国内外を問わず多くの人との出会いをもたらせていただいた仙台大学に心からの感謝と御礼を申し上げるとともにさらなる発展をご祈念申し上げます。



5年間の感謝

子ども運動教育学科長 教授 原田 健次

仙台大学に赴任し5年間お世話になりました。新学科の立ち上げはもちろん東北に幼児体育の普及と子どもの健康の啓蒙が私の役割として日々過ごしてまいりました。

ただ、ここ数年は人々の想像を超える様々な出来事に遭遇した現代社会になり、地震・洪水といった自然災害、コロナパンデミック、国際的違反を意に介さない国連常任理事国による他国への侵攻とこれまでにない想定外の出来事が起こっている中、思うような取り組みにかなわず、世界の平和、そして子どもたちの幸せと健康を願わずにはおられませんでした。

私が専門領域とする幼児期の運動では、「乳幼児期の子どもに対してスポーツを教授すること、もしくはコーチングすること」のように誤解をされることがあります。「できるようになる」ということは決して悪いことではありません。子どもの成功体験は自信につながり、こころの成長に大きく寄与することは言うまでもありません。ただし、大切なことは、当事者(ここでは子ども)自身が「楽しい」「やってみたい」「できるようになりたい」と思って運動に取り組むことができているのかが大切なことです。

私たち大人の役割は、運動あそびを通して「個々の子どもが他者の存在や思い、ルール必要性などに気づいていくプロセス」をどのように環境を通して導くかを考え、実践することです。大切なことは、子どもが「やってみたい」と主体的な活動になることです。すなわち、研究や実践で大切にしたいことは、子どもを中心軸(誰のため、何のため)に置き、指導(保育者)者の思い・願いが伝わる強いメッセージ性が求められるということです。これからも「幼児体育」の持つ可能性を一層高め教授するために、仙台大学は、研究者・実践者(幼児体育指導者、保育者)・行政に共に知恵を出し合い、創意工夫をし、研鑽を積むことが重要な役割であるということを発信し続ける存在であってほしいと願っております。

5年間、本当にありがとうございました。またこれからも引き続きよろしくお願いいたします。

教員として、メディア人として伝えたかったこと

スポーツマスメディア学科 講師 安藤歩美

仙台大学でお世話になった皆様、本当にありがとうございました。新聞記者として宮城県に赴任し、独立してからインターネットメディア、テレビ、ラジオと新旧さまざまなメディアで実務経験を積んできたこの10年間。そんな中で、仙台大学で教員として働くことができたことは私の誇りであり、大きな財産となりました。

スポーツ情報マスメディア学科で主担当として受け持ったのは、取材・執筆の手法を学ぶ「インタビュー論」と、動画制作や発信を学ぶ「演習C」の授業でした。座学の時点はあまり乗り気ではないように見えた学生も、実際に人に話を聞いたり、街へ出たりすると生き生きとした表情になっていくのがとても印象的でした。記事の執筆や動画編集も回を追うごとにどんどん細部を工夫したり、仲間たちと熱心に話し合ったりする様子が見られ、学生たちが急速に成長していく姿を間近で見ることは私の何よりの喜びでした。

学生たちが将来本当に伝えたいこと、訴えたいことができたとき、共感を呼び多くの仲間を集めるためには、文章や喋り方などの「表現力」が問われることになります。その意味でメディア表現を学ぶことは「生きる力」を育むことだと考えています。そんな力を授業を通して少しでも身につけてもらえたら、という思いで教育に取り組んでまいりました。短い期間にはなりませんが、出会えた学生たちが何か少しでも学びを得て、将来それぞれのフィールドで実践してくれたら嬉しいという気持ちであります。

優しく迎え入れて下さった高橋学長、大学のことがまるでわからなかった私に一から丁寧に教えて下さった職員の皆様、本当にありがとうございました。そしてスポーツ情報マスメディア学科の先生方には、学生への熱心な教育の姿勢や温かい眼差しにいつも多くのことを学ばせていただきました。厚く御礼を申し上げます。

仙台大学のますますの発展と、皆様のご活躍を心よりお祈りしております。



仙台大学での3年間

助手 今野 桜

私は2019年12月から3年4ヶ月の間、仙台大学にお世話になりました。仙台大学の助手ですが、勤務地は仙台大学附属明成高校がある仙台大学川平キャンパスでしたので、船岡キャンパスで勤務されている教職員の方々や学生の皆さんとも接する機会は少なかったと思います。川平キャンパスにあるアスレティックトレーニングルームにて、約3年間アスレティックトレーナー（AT）として高校生の部活動サポートをさせていただきました。私自身も高校までは部活動で忙しい日々を送っていたので、勤務開始当初は高校時代がとても懐かしく感じました。

私は高校を卒業後にアメリカへ留学し、2019年に帰国してから初めての職場が仙台大学でした。まだATとしての経験も浅く、部活動に力を入れている私立高校で、更には日本ではまだ珍しい高校に常駐しているATとして働くことには大きな不安がありました。しかし、まだまだ未熟な私のことを周りのスタッフや大学、高校の教職員の方々はいつでも優しく受け入れて下さいました。私が仙台大学にお世話になった約3年間は、ほとんどがコロナ禍で学校行事や部活動も制限されていた期間でした。制限ばかりで本来あるべき高校生活を送れなかった高校生のそばで働いている中で、自分が当たり前のように過ごしてきたことがどれだけ幸せだったかを考えさせられました。

仙台大学で過ごした3年間を通して、多くの方と出会い、貴重な経験をさせていただきました。仙台大学の益々のご発展をご祈念申し上げます。ありがとうございました。

<仙台大学学術会運営委員会>

～仙台大学教職員の共通理解事項～

仙台大学の「建学の精神」、「基本理念」、「使命・目的」

建学の精神

「実学と創意工夫」

仙台大学の経営母体である学校法人朴沢学園(明治12年開設)の学園創始者は、建学の精神として「実学と創意工夫」を掲げ、「創意工夫と先見性をもって実学を志し、実学に根ざした人格形成と人材育成を図る」ことをもって先進的な女子教育を行い、寺子屋方式に代え一斉教授法を導入し明治時代の裁縫教育に一大革新をもたらした。

その考え方は、体育系単科大学として昭和42年に開学した本学にも受け継がれ、人格形成の要素である体育・徳育・知育のうち「体育」に教育・研究の重点を置きつつ、実学と創意工夫に根差した広い教育研究領域を探索することに継承されてきた。なお、建学の精神の意図するところについては、開学時の第1回入学式・初代学長告辞にも「社会で充分活動できるための智識と技能を鍛えた心身ともに健康である人間をつくること」であり、仙台大学は、企業等における健康管理・健康指導の企画・実施担当者の育成、各種の運動機構等における実技指導者、ならびに学校体育の指導者を養成することを目的としております」と端的かつ明確に示されている。

基本理念

「スポーツ・フォア・オール」

仙台大学は、昭和42年、単一学部・単一学科で開学した。その後、平成7年度以降、順次学科を増設し、現在では6学科構成としている。また、学科増設に加え平成10年度には大学院スポーツ科学研究科(修士課程)も新設している。こうした教育研究領域の拡大に伴い建学の精神を基盤に据えつつ、大学の新たな基本理念として定めたのが「スポーツ・フォア・オール」である。

「スポーツ・フォア・オール」とは文字通り「スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に」を、すなわち「乳幼児から元気なお年寄りはもちろん、寝たきりのお年寄りまで。そして、性別や障がいの有無を問わず、トップアスリート、生活の中での楽しみや健康の励みとしてスポーツをする人、スポーツをみる人が好きな人、スポーツをささえる人などすべての人を対象としてスポーツを科学的に探究すること」を意味している。

使命・目的

基本理念を踏まえた仙台大学の使命・目的は、仙台大学学則第2条および仙台大学大学院学則第2条にそれぞれ示している。

■仙台大学学則 第2条

本学は、体育・スポーツ、健康福祉、スポーツ栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する諸科学を教授研究し、当該分野における指導者としての専門的知識と技能を体得させるとともに、高い識見と広い視野とをもって、社会の指導的な役割を果し得る有能な人材を育成することを目的とする。

■仙台大学大学院学則 第2条

本大学院は、広い視野に立って、体育・スポーツ、健康福祉、運動栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道及び子ども運動教育に関する学術の理論と応用を教授研究し、当該分野における高度の専門的な職業等を担うための卓越した能力を培い、もって体育・スポーツ及び健康分野の発展に寄与する有為な人材を育成することにより、広く社会に貢献することを教育研究上の目的とする。

その他 (リンクを貼っていますので、項目をクリックして閲覧ください)

■人材の養成に関する目的その他教育研究上の目的(仙台大学学則別表第一)

■3つのポリシー ①学部 ②大学院

③体育学科 ④健康福祉学科 ⑤スポーツ栄養学科

⑥スポーツ情報マスメディア学科 ⑦現代武道学科 ⑧子ども運動教育学科

■朴沢学園中期経営計画

■事業計画